

386

386-252



1200501457033

252

口
復
行

灣
鐵
道
旅
行
景
觀



1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
1
2
3
4
5

始



紅72-21



臺灣錢道旅行券券內



臺灣總督府鑄造局寄贈本

例言

- 一 本書は臺灣鐵道沿線に於ける最近の實情を紹介し臺灣の氣分特色を表現することに努め從來刊行のものに比し聊か内容の充實と體裁の改善とを期した。
- 二 種々の事情で編纂を急いだ爲に物足りない所や、誤謬、杜撰の點も多々あらうと思ふが此等は讀者の御教示によつて漸次増訂したい考へである。
- 三 宿泊料及各種乗物等の賃金は大體の標準を示したもので多少の相違は免れないと思ふ。
- 四 本書中の統計的數字は昭和元年度に依據した。
- 五 主要市街遊覽其の他に便する爲め市街地圖に區劃線を引き本文中の必要な箇所の下に(五い)等の符號を附して置いたから兩者對照して其の所在を知りたい。

臺灣鐵道旅行案内目次

臺灣早わかり	一頁	八塔驛	五四
地勢	一	七塔驛	五四
氣候	二	五塔驛	五四
衛生	四	汐止驛	五五
衛生	四	南港驛	五五
産業	五	松山驛	五五
交通	七	臺北驛	五七
教育	二一	萬華驛	七七
蕃人の話	二二	板橋驛	七七
臺灣人の生活様式	二四	樹林驛	八一
植物	三二	山子脚驛	八一
動物	三三	鶯歌驛	八二
地名解	三五	桃園驛	八四
臺灣鐵道の沿革	三八	崁子脚驛	八八
縦貫線	四一	中壢驛	八八
基隆驛	四四	平鎮驛	九〇
		楊梅驛	九二

次 目

湖口驛	九三
紅毛驛	九四
新竹驛	九六
香山驛	一〇一
竹南驛	一〇一
造橋驛	一〇四
北勢驛	一〇四
苗栗驛	一〇四
南勢驛	一〇七
銅羅驛	一〇七
三叉驛	一〇七
十六份驛	一〇八
大安驛	一〇八
后里驛	一〇九
豐原驛	一一〇
潭子驛	一一三
臺中驛	一一三

烏日驛	一一九
王田驛	一二〇
彰化驛	一二〇
花壇驛	一二五
員林驛	一二五
社頭驛	一二七
田中驛	一二七
二水驛	一二九
林內驛	一三〇
斗六驛	一三二
斗南驛	一三三
大林驛	一三三
民雄驛	一三六
嘉義驛	一三七
水上驛	一三七
後壁驛	一四四
新營驛	一四六

次 目

林鳳營驛	一四九
番子田驛	一五〇
善化驛	一五三
新市驛	一五四
臺南驛	一五六
車路墘驛	一六七
中州驛	一六八
大湖驛	一六八
路竹驛	一六九
岡山驛	一七〇
橋子頭驛	一七一
楠梓驛	一七二
舊城驛	一七三
高雄驛	一七五
海岸線	一八三
淡文湖驛	一八三
大山脚驛	一八三

後龍驛	一八四
公司寮驛	一八四
白沙屯驛	一八五
新埔驛	一八五
通霄驛	一八六
苑裡驛	一八七
日南驛	一八七
大甲驛	一八八
甲南驛	一九〇
清水驛	一九〇
沙鹿驛	一九一
龍井驛	一九二
大肚驛	一九三
追分驛	一九三
潮州線	一九五
三塊厝驛	一九五
鳳山驛	一九五

次 目

後庄驛	一九八
九曲堂驛	一九九
屏東驛	二〇一
西勢驛	二〇四
竹田驛	二〇四
潮州驛	二〇四
溪州驛	二〇六
宜蘭線	二〇八
暖暖驛	二〇九
四脚亭驛	二〇九
瑞芳驛	二一〇
猴硐驛	二一一
三貂嶺驛	二一一
武丹坑驛	二一二
頂雙溪驛	二一二
貢寮庄驛	二一三
澳底驛	二一四

大里驛	二二四
大溪驛	二二五
龜山驛	二二五
外澳驛	二二六
頭圍驛	二二六
礁溪驛	二二七
四結驛	二二九
宜蘭驛	二二九
二結驛	二二九
羅東驛	二二二
多山驛	二二五
新城驛	二二五
蘇澳驛	二二五
淡水線	二二八
臺北裏取投所	二二八
雙連驛	二二八
圓山驛	二二八

次 目

士林驛	二二九
叭里岸驛	二三一
北投驛	二三一
新北投驛	二三二
淡水驛	二三二
集集線	二三六
濁水驛	二三六
集集驛	二三七
水裡坑驛	二三八
外車埕驛	二四〇
臺東線	二四四
海岸驛	二四五
花蓮港驛	二四五
荳蘭驛	二五〇
吉野驛	二五〇
初音驛	二五一
賀田驛	二五二

壽驛	二五三
豐田驛	二五三
溪口驛	二五四
平林驛	二五四
林田驛	二五五
鳳林驛	二五五
萬里橋驛	二五六
馬太鞍驛	二五六
大和驛	二五七
拔子驛	二五七
瑞穗驛	二五七
三笠驛	二五八
末廣驛	二五九
玉里驛	二五九
安通驛	二六〇
大庄驛	二六〇
頭人埔驛	二六〇

次 目

公埔驛	二六一	急行列車料金	二六九
池上驛	二六一	寢臺料金	二六九
新武呂驛	二六二	入場券	二六九
里壩驛	二六二	途中下車	二七〇
月野驛	二六二	乘換驛	二七〇
大埔驛	二六二	公衆電報取扱驛	二七一
大原驛	二六三	飲食物煙草等呼賣驛	二七一
鹿野驛	二六三	定期乘車券	二七一
稻葉驛	二六四	回数乘車券	二七一
初鹿尾驛	二六四	特種割引旅客運賃	二七二
日奈敷驛	二六四	團體運送	二七三
馬關驛	二六四	列車貸切及客車貸切	二七三
臺東驛	二六五	乘車券引換證	二七四
鐵道營業案内		手荷物及小荷物	二七四
旅客運賃	二六九	手荷物無賃制限斤量	二七四
乘車券通用期間	二六九	手荷物及小荷物受託制限	二七五
		旅客携帶品一時預	二七五

次 目

旅客附隨小荷物	二七六	運送心得	二八七
旅客自用自轉車運賃	二七六	大貨物運送	二八七
行商品運賃	二七七	速達便扱運賃	二八七
通常小荷物運賃	二七七	通常扱運賃	二八八
易損品・嵩高品運賃	二七七	通常扱等級品	二八八
新聞紙・雜誌運賃	二七八	貸切車扱運賃	二九一
車輛類運賃	二七八	臺灣鐵道線路圖	
死體及遺骨運賃	二七八		
貴重品運賃	二七九		
貴重品増賃金	二七九		
小動物運賃	二八〇		
手荷物配達驛及料金	二八〇		
小荷物配達驛及料金	二八〇		
手小荷物保管料	二八一		
本島内地間連絡取扱	二八二		
基隆上陸客の手荷物取扱	二八五		
本線臺東線間連絡取扱	二八五		

目次終



胡 蝶 蘭



ステダミア



ウツスナペムルデペオヒバ

Table with multiple columns of text, likely a list of items or prices. The text is very faint and difficult to read.

Table with multiple columns of text, likely a list of items or prices. The text is very faint and difficult to read.



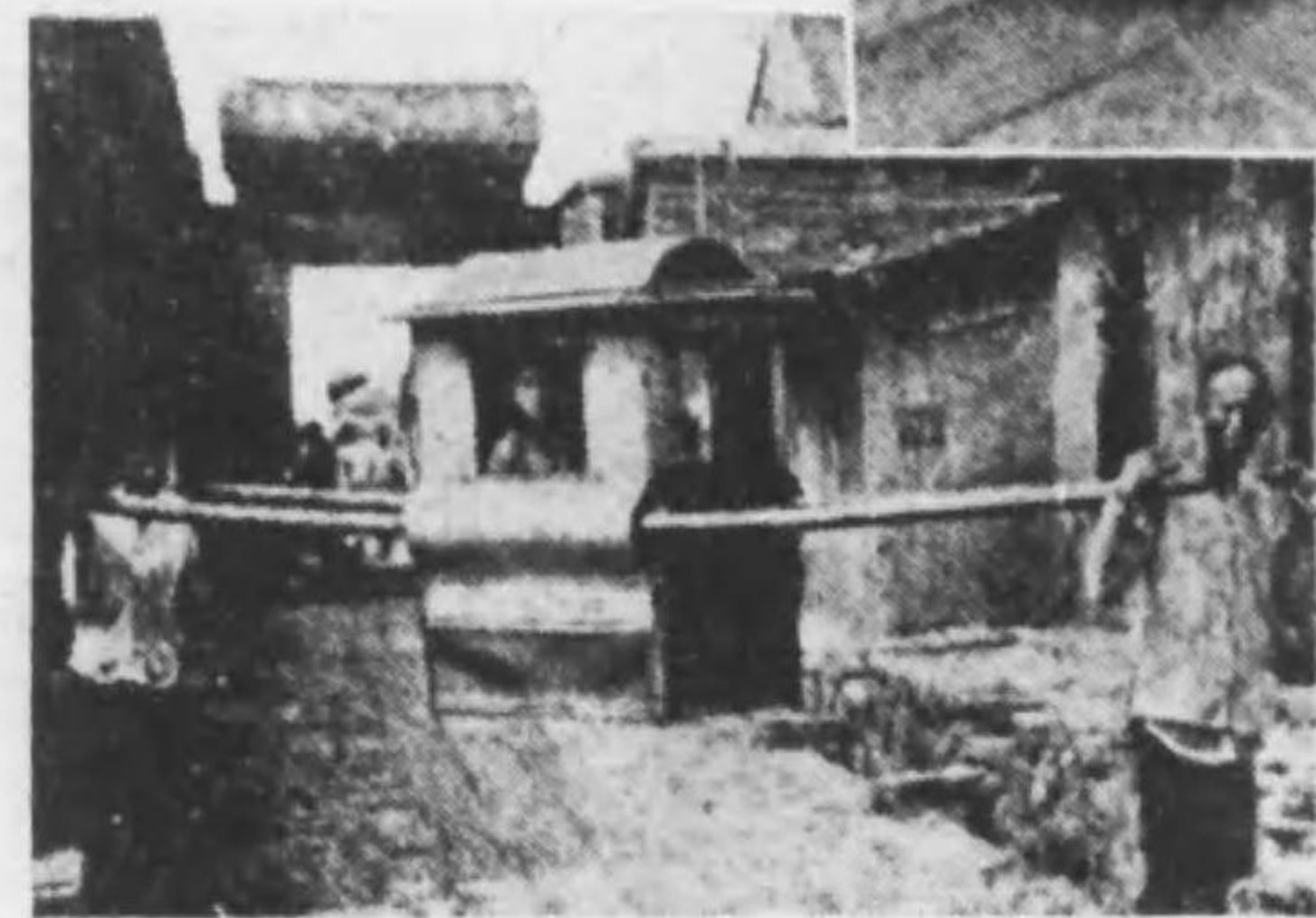
筏
い は っ て



克 戎
く ん や じ



手
押
臺
車



輜
す げ 車

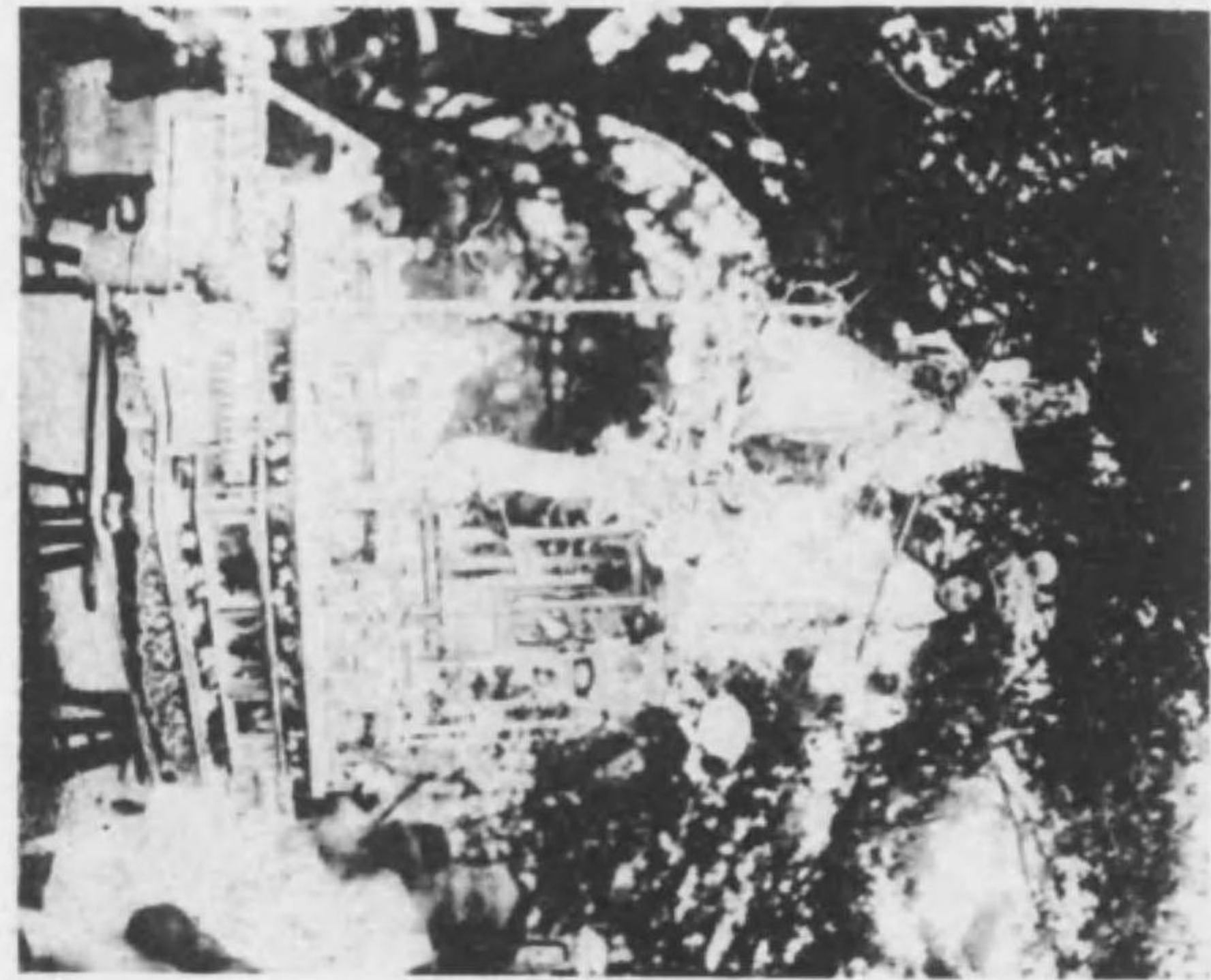


樹 椰 檳
ゆ じ う ろ ん の

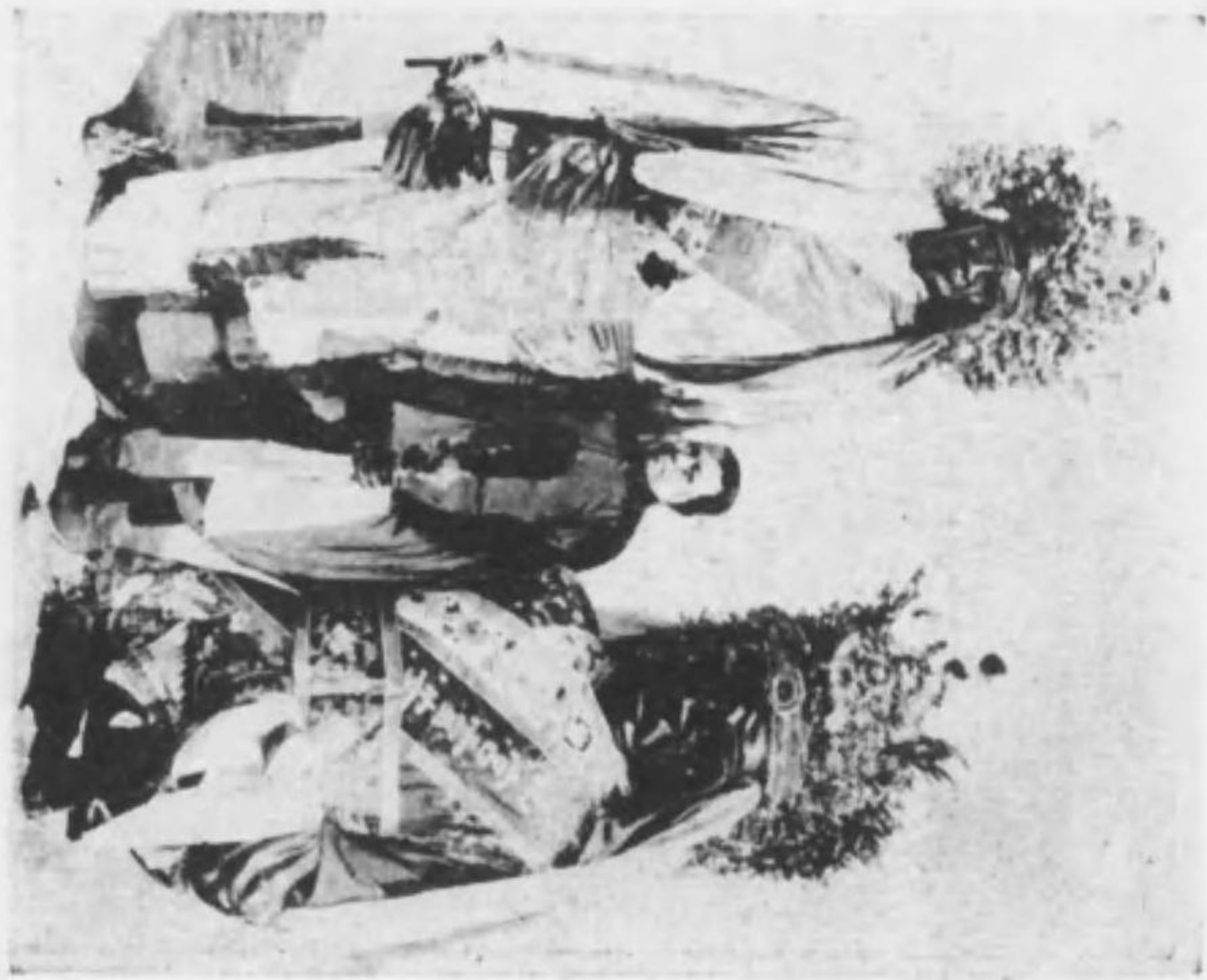


培 栽 梨 鳳
る ぶ っ ない は

詩 意 圖



范 將軍 謝 將軍



藝 妓



生 蕃 風 俗



閑意詩



ひ賑の日子祭

異國的な臺灣人の習俗

臺灣早わかり

▲變つた地勢

臺灣は我が國の南端に位する一大島で、臺灣本島と其の附近に散在する澎湖列島其の他の島々を合せて臺灣島を成し、北緯二十一度四十五分から二十五度三十八分に亙り、東經百十九度十八分から百二十二度六分に達し、周圍は四百里が二里足らぬ、面積は二千三百三十二方里で其の廣さは九州、樺太等と相似てゐる。

島の形は楕圓形で、南北は長く百餘里に及ぶが東西は最も廣い處で四十里を出ない、狭い處は僅かに四五里に過ぎぬ、中央部を南北に縦走する中央山脈は稍東方に偏してゐるが、その中央から西方に分岐するものにシルビヤ山脈、水社山脈、新高山脈等があり、北端に近く大屯火山系、東部海岸には中央山

脈に平行して海岸山脈がある。全島總面積の約三分の二は實に山嶽地帯であつて、而も此等の山脈中には、日本第一峰の新高山を初めとして海拔一萬尺以上の高峰が四十八座の多きに達してゐる、其の主なる高山を擧げるに、

新高山	一三、〇七五	中央尖山	一一、二六〇
次高山	一一、九七二	關山	一一、一〇〇
秀姑巒山	一一、六五〇	大水窟山	一一、〇二八
マボラス山	一一、五六〇	奇萊主山北峰	一一、八九五
南湖大山	一一、五三一	東郡大山	一一、八九五

かく南北を貫通する中央山脈は、本山の地勢を自づから東に西に二分し、東部では海岸山脈との間に一條の平野を開くのみで、斷崖は直ちに海に接し平野は少ないが、西部の方は一目茫茫たる所謂西部平野を成し、濁水溪、大甲溪、曾文溪等が其の間を貫流し、臺灣の主要産業をなす農産物を此の間から豊富に産出してゐる。

▲面白い氣候 臺灣は北回歸線が島の中央部即ち嘉義の邊を横斷してゐるので、當然亞熱帯に屬する、従て冬でも高山の外は雪も降らず、たまに結霜するこゝがあつても極めて稀れで、氣温が氷點下に降り

結氷したこゝなきは、領臺後北部に於て僅か二回あつたばかりである、既往各年に於ける平均最低氣温は、極北基隆が六十六度二分極南恒春七十一度其の日数は内地の十分の一以下であつて北部の寒い季節でも尙ほ佛桑花の眞紅な花なきは美しく咲いて、内地の一年生植物も多年生として繁茂するため四季草花は絶えず、常盤なる山野の美景と相まつて臺灣情調を添へてゐる、斯く冬の間が短いに比し、夏の期間は相當に長く、氣温九十度以上の日数は東京の二十七八日内外なのに較べて臺北は七十日以上百日に達するこゝがある、然し同じ九十度と言つても内地の九十度より臺灣の九十度の方が遙かに凌ぎよい、それは主として海軟風、驟雨なきの關係に因るのであつて、盛夏の日中でも室内又は樹蔭に在れば清風常に去來し、寧ろ清涼を感じる位で殊に夜半から黎明にかけては冷ゆる程に覺ゆる、要するに臺灣の夏と言つても少しも恐る、事はなく唯だ内地の夏に比して暑い間が比較的長いこと云ふに過ぎない、また中央山脈の一帯の高峯は、氣候が緩和されて避暑に適するばかりでなく、森林の美は雄大なる景觀と相まつて頗る壯觀を呈し、將來は熱帯地の極樂園たる『山上都市』なきも出來るべく期待されてゐる。

天候は地勢によつて影響を受け、臺灣の南に北までは大なる相違がある、即ち北部の臺北方面は十月から三月迄の冬期六箇月は、季節風の影響を蒙り、一二三月頃は殆ど連日雨つづきで内地の入梅頃と同じであるが、南に向ふに従つて濕度を減じ、臺中以南に到るに却つて乾燥期になつてゐる、こゝろが四

月から九月に至る夏季六箇月は、盛んに驟雨即ちスコールが来て、晝の暑さを緩和する、之は特に南部臺灣に多く、南部の人々は此の期間を雨期と言つてゐる位で、全く天の配劑妙を得てゐる、此の期間は北部は勿論南部も、天候は概して平穩であつて、北部の雨期のやうに連日降り続くことはない、但し七八九月頃には暴風雨の襲來が無きにもあらずである。

▲衛生の現状 領臺當時の臺灣は、いろ／＼な悪疫が流行したことは事實であつてあの當時の本島人の衛生状態では是非もない事であつた、例へば其の家屋の多くは竹材土塊で築き、通風や採光の便を缺いてゐたし、また飲料水なごも河水又は溜り水を使用し、下水の設備もなく道ばたや街路にさへ豚や羊の放ち飼ひをし其の穢さと言つたらお話しならず、恰も悪疫を助長するやうに凡てができてゐたも自然だつた、然るに我國の領有後は督府は専ら衛生の改善につこめ仕事を興し或は取締を嚴重に改めたので、今日に至つては各主要都市の殆ど全部に上下水道が設けられ、また到る處に公設市場が設立され新鮮な魚菜を供給し一躍して或る點では内地以上の衛生施設を見てゐる、一面醫療機關としては各主要都市に官設の病院を置き、其の他の地方には公醫制度を設けて其の普及發達を圖つた結果、昔猛威を逞したペスト病も今は全く絶滅し、マラリア病なごも市街地では全く發生を見ない状態である、ごにかく其の進歩の著しかつた事は想像以上で悪疫の地も忽ち變つて南方の樂土となつた次第である。

▲恵み多い産業 臺灣は熱き光に恵まれてゐるので自然の恵澤を享くることも從て頗る多い、臺灣の産業の面白味も茲にある、山地は鬱蒼たる森林に富み、水田からは年に二回の收穫がある、殊に近年は内地米に似た蓬萊米の產出あり、臺灣米の聲價は昔ご全然一變し今日は母國の食糧問題に對し大なる貢獻をしてゐる、其の他砂糖の原料たる甘蔗は平野に波打ち、バナナ蜜柑等の特産ご相まつて大なる農産物ごなつてゐる、礦産の多いのも名高く、水産も頗る豊富で誠に帝國海南の寶庫たるの稱に恥ぢない、然るに領臺以前にあつては、住民の多くは天然惠澤に依頼して進歩した農耕法を知らず甚だしきは徒らに此の天恵を濫獲し、爲めに百年の大計を誤り産業の發達を阻害するの弊があつた、領臺後督府は此の點に鑑み鋭意産業の助長改良の策を講じ、保護獎勵に努めた結果、僅々三十餘年にして早くも今日の如き發達を見るに至つた、産業の主なるものは勿論農業であつて、其の生産總額は三億八百萬圓に達してゐる、その中では米が第一位で甘蔗・甘藷・茶・落花生・黃麻・苧麻・胡麻・木藍・煙草・柑橘類・バナナ・パイナップル・龍眼・蔬菜等之に次ぎ、水牛、黃牛、豚、山羊等の家畜類の飼育も盛んに行はれてゐる。

糖業も亦本島主要産業の一であつて、砂糖の年産額は約八億斤に達し輸移出品の大宗ごなつてゐる。林業は高山の多い關係上、中央山脈の所々には暖帶林、溫帶林に屬する雄大なる森林を存し、現在山林

面積は約二百二十萬甲（一甲は約一町歩）に達し、阿里山・八仙山・宜蘭太平山等は最も有名であつて、何れも總督府に於て經營してゐる。鑛業も領臺當時は產出額も僅かに十一二萬圓に過ぎなかつたが、今や石油を除いて千五百萬圓に達してゐるが、其の主要なものは石炭で年額千三百萬圓を算する。臺灣の石油は最近著しく評判になつて來た鑛產の一つで、新竹州出鑛坑の如きは、大正十五年頃より夥しく湧出し、日本石油會社は大恐悅の體で、湧出量の最も多い時は日に二三百石と言はれた。然し斯る量が何時まで持續するかは専門家も豫斷できぬところであつて年湧出量も一定してゐない、大正十四年の調では本島の石油の産額は僅々三十萬圓程度だが、之が一躍して百倍位の大増加を見てゐる筈で此の儘湧出が持續するに、臺灣の産業上非常なる新利益を獲るのみでなく、之に依つて諸種の工業を勃興させる動機となる點注意すべきである。

工業は、製糖業、製茶業等の外、近來バイナップル鑛詰業や苧麻織等が興つて將來有望視されてゐる。本年臺灣は農産地だけに農産物の加工業、家内工業等が可なり發達してゐる、例へば世界へ輸出して來た大甲帽の如き其の一例で臺中州及び新竹州の一部で產出し、大戰當時は年産三百萬圓に達したが、目下は百萬圓程度である。歐洲大戰中の好況時に乘じて、セメント・ビール・肥料・製紙・製帽・製粉・紡績・煉瓦等の製造工業が次ぎ次に發達し、この上若し動力として電力が安く供給されるやうになれば、農業

臺灣も次第に工業臺灣として新しい發展を見せて行くであらう。次には水産業であるが、臺灣の沿岸には、臺灣最南端の三板埕の捕鯨の如きは最も壯快なる海上作業の一つで、大阪の東洋捕鯨會社が此の地で許可を得、毎年十二月から四月頃まで二隻の捕鯨船で其の期間に四五十頭を捕へてゐる。其の他西部の沿岸は製鹽に適し、鮪・旗魚・真鯛・連子鯛・鱸等の魚族が豊富なため其の收穫も多く、年漁獲高は一千萬圓を突破し、之に伴ふ鰹節、鱈仔等の水産工業も漸次發達して來た。其の年産額二億斤に達し本島の需要を充すのみならず、更に進んで内地の缺乏をも補はんとしてゐる。最近基隆沖で珊瑚の漁獲あり、多い年は百萬圓の收穫を見たが餘り多獲の結果、事業の進展を阻んだやうだが、兎に角「臺灣珊瑚」の名高まり、今日では相當に立派な珊瑚の加工業も興り内地土産としても喜ばれてゐる。

▲交通 領臺以前の臺灣の交通は言ふ迄もなく不備不便であつて、交通機關としては光緒年間、巡撫劉銘傳によつて敷設された基隆新竹間六十二哩餘の不完全な鐵道と、英商ドグラス汽船會社によつて經營された淡水、安平を起點として南支那間を往復する小航路のみであつて他は轎・牛車・舟筏・戎克船により僅かに各地の間を連絡するに過ぎなかつた。従つて物資の取引は狭い範圍だけに限られ、各市場間の物價の高低は甚しき相違があり、唯だ單に交通上の不便のみでなく經濟の發達を害する所も少くなかつた。

そこで領臺後總督府は、専ら交通の改善を企て、道路にあつては明治二十八年中に南北縦貫軍道を開いたのを手始めとし、同三十三年には道路橋梁準則を制定し之が改修を奨励し、國費で重要道路を開鑿するにこゝした爲め、全く昔の面目を一新し、今や其の延長は三千七百三十八里に達し、山間僻地でも道路の開かれぬ處はなく、殊に基隆から高雄に至る縦貫道路は、幅八間延長百十七里に達し各河川に架ける橋の工事も次第に進捗を見てゐる。

鐵道は、明治三十二年度から十年繼續事業として南北を貫通する縦貫鐵道の起工を見て以來、海岸線・潮州線・宜蘭線・淡水線・臺東線等漸次開通し、最近集々線を買収し現在では官線延長五百三十六哩九分に達してゐる。傍ら私設鐵道・手押軌道は、島内産業の發達に伴ひ、隨所に敷設せられ、前者は營業線三百十四哩、專川線九百九十七哩餘、後者は五百七十六哩に達し、官設鐵道と相待つて本島の交通網をなしてゐる。

手押軌道 内地でいふ「トロツコ」で、一般旅客の輸送をもやつてゐるが、道路や橋などが充分に完成してゐない地方では頗る便利で唯一の交通機關として其の地方の開發に役立つてゐる。軌間は概ね一呎七吋半にして軌條は多く十二磅を用ひ、現在島内の總延長は六百三十五里に及び、旅客運輸上の役目を果たすことに於ては内地の軌道に比すべくもない。普通に臺車とも呼び、板張又は竹張腰掛を用ひ、特等臺車は籐張または革張腰掛に日覆ひを附してあるものもある。其の料金は晝間普通臺車に於て大要左の通りで、特等臺車は此の倍額、夜間即ち日出前と日没後及

び雨天の時は何れも其の二割増の定めてある。

一哩につき	人夫一人押	人夫二人押	一哩につき	人夫一人押	人夫二人押
一人乗	九錢以内	十一錢八厘以内	三人乗	十五錢以内	十九錢六厘以内
二人乗	十二錢以内	十五錢六厘以内	四人乗	十八錢以内	二十三錢四厘以内

其の乗車制限は、普通臺車は四人、特別臺車は二人を以て限度としてゐる。人夫の一人押は多く平地で、上り勾配のある線路は人夫二人がつく事を例としてゐる。臺車行違ひの場合に待避方は、同級同数の場合は、下り臺車が待避し、異級同数の場合は下級臺車待避し、貨物臺車に對しては乗客臺車が待避するものとしてゐる。而して其上り下りの区分は官私設鐵道停車場又は之に準すべき主要地向ふものを上りと言ひ、之と反對に向ふものを下りと稱す。臺車の運行速度は、普通六哩内外で、運轉中格別の危険はないけれども、乗客の心得方一二をあげると、腰掛は成るべく臺車の中心より前方に据え、重量を成るべく前方に置くやうにし、屈曲の箇所には於ては身體を其の曲がる方向に少しく傾けると安全第一である。

海運は、明治二十九年大阪商船會社に命じ、内地航路を開かせ、以來次第に發達して明治三十二年には、更らに淡水・香港線を開設してドグラス汽船會社を驅逐し、對岸航路の端緒を開くに至つた。其の後、基隆・高雄の兩港に工を施し、さらに命令航路の隻數を増加し、また遠く南支南洋方面の航路をも開く等、大いに海上交通の改善を計つた結果、今や内地航路三線・沿岸線航路二線及び蘇澳、花蓮港間

連絡航路の外、基隆・福州線、基隆・香港線、基隆・瓜哇線、基隆・海防線、高雄・廣東線、高雄・天津線、高雄・大連線等合計十二線の命令航路を有し、補助金百四十餘萬圓、使用船三十一隻、十一萬噸に及んでゐる。その他、日本郵船の北米航路を初めとして貿易の發達と共に幾多の自由航路の出現を見ることゝなつた。

現在の命令航路は左の通りである。

内地臺灣間航路

神戸・基隆線 この航路は大阪商船・近海郵船兩社の所屬船六隻を以つて神戸基隆間を月に十二往復してゐる。その内四隻は一萬噸級、二隻は六千噸級の巨船で前者を甲型船、後者を乙型船と稱し來航は毎月一・四・六・九の日の正午神戸を出帆翌朝門司著、同日甲型船は正午、乙型船は午後四時門司を發し、甲型船は三日目の午後四時、乙型船は四日目の朝基隆港に入港する。往航は一・三・六・八の日甲型船は午前九時、乙型船は午後四時基隆を出帆し、甲型船は三日目の午後、乙型船は四日目の朝門司著、同日發翌日神戸に著す。但し十月から三月までの往航に限り甲型船も乙型船と同様に航海する。船は大きいし客室の設備は完備してゐるので動搖を感じることが少なく安全で愉快な航海を續けることが出来る。尙ほ臺灣と内地との時差は一時間であるので船中で二十分宛三回位に時計を進めたり後らせたりする。

(運賃及び使用船)

<p>神戸</p> <table border="1"> <tr><td>一等</td><td>1,900</td></tr> <tr><td>二等</td><td>1,200</td></tr> <tr><td>三等</td><td>800</td></tr> </table>		一等	1,900	二等	1,200	三等	800	<p>大阪商船</p> <table border="1"> <tr><td>一等</td><td>4,500</td></tr> <tr><td>二等</td><td>3,000</td></tr> <tr><td>三等</td><td>2,000</td></tr> </table>		一等	4,500	二等	3,000	三等	2,000
一等	1,900														
二等	1,200														
三等	800														
一等	4,500														
二等	3,000														
三等	2,000														
<p>門司</p> <table border="1"> <tr><td>一等</td><td>3,500</td></tr> <tr><td>二等</td><td>2,500</td></tr> <tr><td>三等</td><td>1,800</td></tr> </table>		一等	3,500	二等	2,500	三等	1,800	<p>近海郵船</p> <table border="1"> <tr><td>一等</td><td>3,500</td></tr> <tr><td>二等</td><td>2,500</td></tr> <tr><td>三等</td><td>1,800</td></tr> </table>		一等	3,500	二等	2,500	三等	1,800
一等	3,500														
二等	2,500														
三等	1,800														
一等	3,500														
二等	2,500														
三等	1,800														
<p>基隆</p> <table border="1"> <tr><td>一等</td><td>3,500</td></tr> <tr><td>二等</td><td>2,500</td></tr> <tr><td>三等</td><td>1,800</td></tr> </table>		一等	3,500	二等	2,500	三等	1,800	<p>因信吉 幡濃野 丸丸丸</p> <table border="1"> <tr><td>一等</td><td>3,500</td></tr> <tr><td>二等</td><td>2,500</td></tr> <tr><td>三等</td><td>1,800</td></tr> </table>		一等	3,500	二等	2,500	三等	1,800
一等	3,500														
二等	2,500														
三等	1,800														
一等	3,500														
二等	2,500														
三等	1,800														
<p>高雄</p> <table border="1"> <tr><td>一等</td><td>3,500</td></tr> <tr><td>二等</td><td>2,500</td></tr> <tr><td>三等</td><td>1,800</td></tr> </table>		一等	3,500	二等	2,500	三等	1,800	<p>瑞扶蓬 穗桑葉 丸丸丸</p> <table border="1"> <tr><td>一等</td><td>3,500</td></tr> <tr><td>二等</td><td>2,500</td></tr> <tr><td>三等</td><td>1,800</td></tr> </table>		一等	3,500	二等	2,500	三等	1,800
一等	3,500														
二等	2,500														
三等	1,800														
一等	3,500														
二等	2,500														
三等	1,800														
<p>高雄横濱直航の場合</p> <table border="1"> <tr><td>一等</td><td>3,500</td></tr> <tr><td>二等</td><td>2,500</td></tr> <tr><td>三等</td><td>1,800</td></tr> </table>		一等	3,500	二等	2,500	三等	1,800	<p>大坂商船</p> <table border="1"> <tr><td>一等</td><td>4,500</td></tr> <tr><td>二等</td><td>3,000</td></tr> <tr><td>三等</td><td>2,000</td></tr> </table>		一等	4,500	二等	3,000	三等	2,000
一等	3,500														
二等	2,500														
三等	1,800														
一等	4,500														
二等	3,000														
三等	2,000														
<p>高雄</p> <table border="1"> <tr><td>一等</td><td>3,500</td></tr> <tr><td>二等</td><td>2,500</td></tr> <tr><td>三等</td><td>1,800</td></tr> </table>		一等	3,500	二等	2,500	三等	1,800	<p>湖高恒博明桃 南雄春洋石園 丸丸丸丸丸丸</p> <table border="1"> <tr><td>一等</td><td>3,500</td></tr> <tr><td>二等</td><td>2,500</td></tr> <tr><td>三等</td><td>1,800</td></tr> </table>		一等	3,500	二等	2,500	三等	1,800
一等	3,500														
二等	2,500														
三等	1,800														
一等	3,500														
二等	2,500														
三等	1,800														
<p>高雄</p> <table border="1"> <tr><td>一等</td><td>3,500</td></tr> <tr><td>二等</td><td>2,500</td></tr> <tr><td>三等</td><td>1,800</td></tr> </table>		一等	3,500	二等	2,500	三等	1,800	<p>近海郵船</p> <table border="1"> <tr><td>一等</td><td>3,500</td></tr> <tr><td>二等</td><td>2,500</td></tr> <tr><td>三等</td><td>1,800</td></tr> </table>		一等	3,500	二等	2,500	三等	1,800
一等	3,500														
二等	2,500														
三等	1,800														
一等	3,500														
二等	2,500														
三等	1,800														
<p>高雄</p> <table border="1"> <tr><td>一等</td><td>3,500</td></tr> <tr><td>二等</td><td>2,500</td></tr> <tr><td>三等</td><td>1,800</td></tr> </table>		一等	3,500	二等	2,500	三等	1,800	<p>元岩元日 中手明光 丸丸丸丸丸丸</p> <table border="1"> <tr><td>一等</td><td>3,500</td></tr> <tr><td>二等</td><td>2,500</td></tr> <tr><td>三等</td><td>1,800</td></tr> </table>		一等	3,500	二等	2,500	三等	1,800
一等	3,500														
二等	2,500														
三等	1,800														
一等	3,500														
二等	2,500														
三等	1,800														

●表中括弧内の乙二等は近海郵船に限る

●小兒運賃

四歳未満一名に限り無賃
其他は一人増す毎に四分の一額、十二歳未満半額

大阪商船 此内四船

近海郵船 此内二船

高雄	海口	紅頭嶼	火燒島	臺東	新港	花蓮港	蘇澳	基隆
一等	一等	一等	一等	一等	一等	一等	一等	一等
二等	二等	二等	二等	二等	二等	二等	二等	二等
三等	三等	三等	三等	三等	三等	三等	三等	三等
10.00	10.00	10.00	10.00	10.00	10.00	10.00	10.00	10.00
15.00	15.00	15.00	15.00	15.00	15.00	15.00	15.00	15.00
20.00	20.00	20.00	20.00	20.00	20.00	20.00	20.00	20.00
25.00	25.00	25.00	25.00	25.00	25.00	25.00	25.00	25.00
30.00	30.00	30.00	30.00	30.00	30.00	30.00	30.00	30.00
35.00	35.00	35.00	35.00	35.00	35.00	35.00	35.00	35.00
40.00	40.00	40.00	40.00	40.00	40.00	40.00	40.00	40.00
45.00	45.00	45.00	45.00	45.00	45.00	45.00	45.00	45.00
50.00	50.00	50.00	50.00	50.00	50.00	50.00	50.00	50.00
55.00	55.00	55.00	55.00	55.00	55.00	55.00	55.00	55.00
60.00	60.00	60.00	60.00	60.00	60.00	60.00	60.00	60.00
65.00	65.00	65.00	65.00	65.00	65.00	65.00	65.00	65.00
70.00	70.00	70.00	70.00	70.00	70.00	70.00	70.00	70.00
75.00	75.00	75.00	75.00	75.00	75.00	75.00	75.00	75.00
80.00	80.00	80.00	80.00	80.00	80.00	80.00	80.00	80.00
85.00	85.00	85.00	85.00	85.00	85.00	85.00	85.00	85.00
90.00	90.00	90.00	90.00	90.00	90.00	90.00	90.00	90.00
95.00	95.00	95.00	95.00	95.00	95.00	95.00	95.00	95.00
100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00

大阪商船
長春丸 (一、七二八噸)
撫順丸 (二、七二六噸)

臺灣沿岸航路
沿岸東線 月六回基隆發東海岸を航行し、蘇澳・花蓮港・臺東・海口を寄港地とし基隆・高雄間を往復する。時には新港・紅頭嶼・火燒島にも寄ることがある。本航路は神戸・基隆線と連絡し互に乗換の出来る便宜がある。

基隆	西表	八重山	宮古	那覇
一等	一等	一等	一等	一等
二等	二等	二等	二等	二等
三等	三等	三等	三等	三等
10.00	10.00	10.00	10.00	10.00
15.00	15.00	15.00	15.00	15.00
20.00	20.00	20.00	20.00	20.00
25.00	25.00	25.00	25.00	25.00
30.00	30.00	30.00	30.00	30.00
35.00	35.00	35.00	35.00	35.00
40.00	40.00	40.00	40.00	40.00
45.00	45.00	45.00	45.00	45.00
50.00	50.00	50.00	50.00	50.00
55.00	55.00	55.00	55.00	55.00
60.00	60.00	60.00	60.00	60.00
65.00	65.00	65.00	65.00	65.00
70.00	70.00	70.00	70.00	70.00
75.00	75.00	75.00	75.00	75.00
80.00	80.00	80.00	80.00	80.00
85.00	85.00	85.00	85.00	85.00
90.00	90.00	90.00	90.00	90.00
95.00	95.00	95.00	95.00	95.00
100.00	100.00	100.00	100.00	100.00

大阪商船
八重山丸 (九六三噸)
宮古丸 (九七三噸)
備考 右兩船には一等定員なし但し二等別室の設備ありその使用料は二等賃金の一刻五歩増し。

那覇・基隆線 月五回那覇發宮古・八重山・西表經由基隆間を往復してゐる、臺灣と沖縄とを連絡する唯一の航路である。

沿岸西線 毎月三回。基隆發、西海岸を航行し、馬公を経て基隆高雄港間を往復する。

連絡線 蘇澳・花蓮港間の連絡航路で毎日午後十時蘇澳を發して翌日未明花蓮港に著き、同日午前十時花蓮港を發して同日午後五時蘇澳に歸著する。

別府丸 (七〇七噸)

沿岸西線 毎月三回基隆を發して本島西海岸を航行し、馬公を経て基隆・高雄兩港間を往復する。

支那航路

基隆	三	二	一	等	等	等	馬公	三	二	一	等	等	等	高雄	三	二	一	等	等	等
11,000	7,000	11,000	11,000	7,000	11,000	11,000	11,000	7,000	11,000	11,000	7,000	11,000	11,000	11,000	7,000	11,000	11,000	7,000	11,000	11,000
大阪商船							奉天丸 (一、六四〇噸)													

基隆福州線 月四回基隆福州間を往復する。

基隆	三	二	一	等	等	等	福州	三	二	一	等	等	等
11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000
大阪商船							温州丸 (一、一八五噸)						

基隆香港線 毎週日曜午前九時基隆を發し臺灣海峡を横斷し、廈門・汕頭を経て四日目の午前七時香港に著く。復航は翌週日曜の午前八時香港を發し、汕頭・廈門を経由し四日目に基隆に歸著する。本航路の香港碇泊は三日間であるから敏捷に立ち廻ると香港市街は勿論廣東・澳門をも見物して同じ船で歸航することが出来る。尙こればかりでなく寄港地の厦門・汕頭は往復とも顯著いて午後出帆するので上陸してゆつくり見物する暇がある、都合のよい時は汕頭の奥の潮州まで行けて誠に便利である。

基隆	三	二	一	等	等	等	厦門	三	二	一	等	等	等	汕頭	三	二	一	等	等	等	香港	三	二	一	等	等	等
11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000
大阪商船							鳳山丸 (一、三三四噸)							開城丸 (一、〇二〇噸)													

りかわ早濤臺

			汕頭			廈門			高雄					
			三 等	二 等	一 等	三 等	二 等	一 等	三 等	二 等	一 等	三 等	二 等	一 等
			六〇〇〇	一〇〇〇〇	一八〇〇〇	六〇〇〇	一〇〇〇〇	一八〇〇〇	六〇〇〇	一〇〇〇〇	一八〇〇〇	六〇〇〇	一〇〇〇〇	一八〇〇〇
			香港			汕頭			廈門			高雄		
			三 等	二 等	一 等	三 等	二 等	一 等	三 等	二 等	一 等	三 等	二 等	一 等
			三〇〇〇	六〇〇〇	九〇〇〇	六〇〇〇	一〇〇〇〇	一八〇〇〇	六〇〇〇	一〇〇〇〇	一八〇〇〇	六〇〇〇	一〇〇〇〇	一八〇〇〇
			廣東			汕頭			廈門			高雄		
			三 等	二 等	一 等	三 等	二 等	一 等	三 等	二 等	一 等	三 等	二 等	一 等
			三〇〇〇	六〇〇〇	九〇〇〇	六〇〇〇	一〇〇〇〇	一八〇〇〇	六〇〇〇	一〇〇〇〇	一八〇〇〇	六〇〇〇	一〇〇〇〇	一八〇〇〇

大阪商船

でりい丸 (二、一七〇噸)

高雄・廣東線 二週一回水曜日午前十時高雄を發し臺灣海峡を横斷し、廈門・汕頭・香港を經由し珠江を溯航して五日目に廣東に著く。復航は反對に前記各港を經由して高雄に歸著する。

りかわ早濤臺

			天津へ			上海			福州			基隆			高雄		
			三 等	二 等	一 等	三 等	二 等	一 等	三 等	二 等	一 等	三 等	二 等	一 等	三 等	二 等	一 等
			一四〇〇	二四〇〇	三六〇〇	一四〇〇	二四〇〇	三六〇〇	一四〇〇	二四〇〇	三六〇〇	一四〇〇	二四〇〇	三六〇〇	一四〇〇	二四〇〇	三六〇〇
			天津より			上海			福州			基隆			高雄		
			三 等	二 等	一 等	三 等	二 等	一 等	三 等	二 等	一 等	三 等	二 等	一 等	三 等	二 等	一 等
			七五〇	一三〇〇	二〇〇〇	七五〇	一三〇〇	二〇〇〇	七五〇	一三〇〇	二〇〇〇	七五〇	一三〇〇	二〇〇〇	七五〇	一三〇〇	二〇〇〇
			大連へ			上海			福州			基隆			高雄		
			三 等	二 等	一 等	三 等	二 等	一 等	三 等	二 等	一 等	三 等	二 等	一 等	三 等	二 等	一 等
			七五〇	一三〇〇	二〇〇〇	七五〇	一三〇〇	二〇〇〇	七五〇	一三〇〇	二〇〇〇	七五〇	一三〇〇	二〇〇〇	七五〇	一三〇〇	二〇〇〇

大阪商船

長沙丸

(一、五四〇噸)

福建丸

(二、五六八噸)

盛京丸

(二、五六五噸)

高雄・大連線 月四回高雄・大連間を往復してゐる。

大連	一等	六〇〇〇
	三等	二五〇〇

大阪商船
 貴州丸
 武昌丸
 日東丸
 湖北丸

(一、五六八噸)
 (一、五六七噸)
 (一、一八六噸)
 (一、六一〇噸)

南洋航路

基隆・爪哇線 月一回神戸・門司・基隆(毎月八日出帆)・マニラ(隔月寄港)・タワオ・パタビヤを経てスラバヤに至り復航はスラバヤ・マカサ・タワオ・香港・高雄を経て基隆に歸著し、後内地へ歸る。此の間約二箇月半、就中爪哇にありてはパタビヤ著からスラバヤ發迄約十餘日の日子があるから島内の視察も相當に出來非常に便利である。尙基隆では神戸・基隆線に乗換へて内地行接續の便もある。

神戸	一等一九	六五	七七	一四六	一五五	一六〇	一八〇	二〇〇	二五〇										
門司	三等五	二〇	二四	四七	五三	七〇	七七	九〇	九五										
基隆	一等一八	二二	二四	四七	五一	六八	七五	八〇	九三										
高雄	一等二四	二七	二八	五一	五〇	六〇	七〇	七五	八〇										
馬尼刺	一等三三	三三	三三	五〇	五〇	六〇	七〇	七五	八〇										
タワオ	一等四〇	四〇	四〇	五七	五七	六〇	七〇	七五	八〇										
パタビヤ	一等四八	四八	四八	六五	六五	七〇	八〇	八五	九〇										
サマラン	一等五五	五五	五五	七二	七二	七五	八五	九〇	九五										
スラバヤ	一等六二	六二	六二	七九	七九	八〇	九〇	九五	一〇〇										
マカサ	一等六九	六九	六九	八六	八六	九〇	一〇〇	一〇五	一一〇										
タワオ	一等七六	七六	七六	九三	九三	九五	一〇五	一一〇	一一五										
香港	一等八三	八三	八三	一〇〇	一〇〇	一〇五	一二〇	一二五	一三〇										
高雄	一等九〇	九〇	九〇	一〇七	一〇七	一一〇	一二五	一三〇	一三五										
基隆	一等九七	九七	九七	一一四	一一四	一二〇	一三五	一四〇	一四五										

大阪商船
 ばたびや丸 (四、三九二噸)
 がんぢす丸 (四、三三七噸)
 すらばや丸 (四、三九一噸)

巡廻切符 神戸・門司・基隆を發航地とし一廻航の上高雄又は基隆に歸著する巡廻切符を發賣してます
 運賃 神戸—爪哇—基隆一等二六〇圓二等二〇〇圓
 基隆—爪哇—基隆一等三五圓二等二八圓
 但しパタビヤに上陸しスラバヤより乗換ぐのてあります
 通用期間 六箇月間は各地に上陸し次船に乗換ぐことが出來ます

基隆・海防線 月二回基隆發厦門・汕頭・廣東を経て海防に著き、復航は海防發廣東・汕頭・厦門を経て基隆に歸る。

				基隆
			厦門	基隆
		汕頭	厦門	基隆
	廣東	汕頭	厦門	基隆
海防	廣東	汕頭	厦門	基隆

大阪商船

大華丸 (二、一九七順)

めなど丸 (二、一六六順)

右の外一箇年十回基隆出帆上海・長崎・神戸・横濱を経て桑港に至る日本郵船會社の天洋丸型の航路がある基隆を午後に出帆して翌々日の未明に上海に入港し午後に出帆であるからゆつくり上海見物が出る。
天洋丸・コレヤ丸型運賃は

基隆	上海	長崎	神戸	横濱	桑港
一等	六五〇〇	二八〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇
二等	七〇〇〇	四〇〇〇	一七〇〇	一七〇〇	一七〇〇
三等	八〇〇〇	四五〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇

基隆港より島内及び島外の各港に至る運程は左の通りである。

福州	厦門	上海
一等	二三五運	三七六運
二等	四〇〇運	六五六運
三等	六九四運	一、一三〇運
青島	長崎	廣東
一等	九九二運	六五六運
二等	一、七三五運	一、一三〇運
三等	一、七三五運	一、一三〇運
蘇澳	神戶	横濱
一等	九四運	一、一三〇運
二等	一、七三五運	一、一三〇運
三等	一、七三五運	一、一三〇運
高雄	馬公	臺東
一等	一九五運	一七〇運
二等	一九五運	一七〇運
三等	一九五運	一七〇運

▲臺灣の教育

内地人の爲めには島内の大抵な地方には小學校があるが、本島子弟の爲めには國語の關係から別に公學校を設けて其處で初等教育を授けてゐる。未だ義務教育制度でないから就學兒童數は左程多くはないが、公學校數は分教場の二百を加へるに七百五十校に近く、外に主として漢文を教へる書房が百數十あり、小學校も百四十位ある。中等學校は中學十校、男子師範學校三、高等女學校十二校、其他實業學校、實業補習學校なども多く、臺北には七年制の高等學校があり、官設臺灣大學も昭和三

年から開校され法文理農科が置かれる事になつてゐる。専門學校としては臺北と臺南に高等商業學校が二つ、高等農林、醫學専門學校等があつて新領土の教育制度としては頗る完備したもので南支南洋方面へ活動する有爲の青年の爲めには絶好な搖籠として役立つであらう。この外臺灣總督府は對岸支那の本土に於ても邦人や臺灣籍民等の子弟の教育に當る爲め學校を經營してゐる。即ち廈門には小學校一、廈門旭瀛書院、福州には小學校一、福州東瀛學校、汕頭にも小學校一、汕頭東瀛學校、廣東には小學校だけある。

▲蕃人の話

臺灣には約四百萬人の住民があるが、その中南支那から移住して來た漢民族（印度支那民族も交じる）が約三百七十萬人あり、内地人は約二十萬人、その他は世に謂ふ蕃人である。蕃人は臺灣土著の住民で、明朝の末年以後、漢民族（一部は印度支那民族）の爲め次第に逐はれて深山幽谷の間に隠れ住み現代文明とは全く没交渉な原始的生活を送つて來た爲め、嘗ては賊首等の弊風もあつたが、今は非常な勢ひで文化の風に浴しつゝある。この本島の實情に通じない者が、領臺當時暴威を揮つた土匪は是等の生蕃を混同してゐるのは非常なる間違であつて、生蕃は主に行政區域外の山地に居住し平地には觀光の爲めに罕れに警察官等に引率されて下山する位のもので、普通臺灣へ來ても平地では容易に蕃人は見られないのである、現在の蕃族は、タイヤル・サイセツト・ブヌン・ツオウ・バイワン・アミ族

及びヤミ族の七種族で、最近の調査によれば蕃社數七百十五社、戸數二萬二千五百、人口十三萬七千人許りで本島全人口に比するに言ふに足らぬ少數である、其の内官命を奉ぜぬ未歸順蕃は、タイヤル族に屬するガオガンの一部と其の他二三の蕃社で其の數も僅かに四五千に過ぎない、他は悉く文化の惠澤を受けて教育に授産に醫療に著々撫育教化の効果をあげ、今日では彼等の間から醫者や看護婦なども出てゐる。歸順蕃中、約五六萬人は既に平地に居住して農をばけみ、アミ族の一部の平地蕃は本島人と同様地租を納め、赤十字社の會員や愛國婦人會員などになつてゐる男女も澤山ある。事實彼等は内地の一部の人々が誤解してゐるやうに恐るべき者でも何でもなく、却て義に固く立派な道徳を持ち愛すべき種族である。彼等獨特の文化等は持たぬ爲めに往々本島人に比し改風移俗が速かであるに驚かねばならない。

臺灣人の生活様式

風俗 臺灣の住民は、内地人、本島人、蕃人及び少數の外國人の四つに區別されるが、同じ本島人と言つても支那福建省地方から移住して來たもの、子孫たる福建族と、廣東地方から渡來した廣東族の後裔とがある。前者は一に閩族と言ひ臺灣に於ける最初の移住者であるところから後來の廣東人即ち粵族に對し自分等を主人と言ひ粵族を客人と呼んでゐる。以前に於ても互に敵視して争闘が絶わなかつたが、此の關係は在住久しきに及ぶ今日でも今尚ほ兩族とも祖先の慣習を重んじ其の間風俗人情言語等に於て相異なる處が少くない。即ち言語は福建語と廣東語とに別れてゐるし、兩族の居住地も大體に於て分れてゐて、福建系は臺北の大稻埕を初めとして臺北州下、臺南澎湖島等に居住し、廣東系は新竹州下高雄・臺中の一部に住んでゐる。

衣服 本島人常用の服は大體に於て滿服即ち清服で、滿洲服が清朝を通じて支那に入り之が今日の本島人の衣服となつて遺つてゐる。禮式等に着るのも滿服で芝居等で着る漢服を除いては全部統一されてゐる。女子が穿く太いズボン様のものは褲と言ひ本島女子の風俗上一特色をなしてゐる。然し臺灣も領有以來三十餘年となり此の間教育の普及や風俗舊慣の移り變りを見て今日の青年處女なごは競うて洋

式を眞似、或は和式に移り姓名なごは内地式の名にしてゐるのが相當に多い。

家屋 中流以下の家は多く土塊家屋で竹木に土煉瓦たる土塊を積んで家としてゐる。それ以上になる土煉瓦建てで屋根は赤い臺灣瓦を以て葺いてある。従つて一體に室内は採光も不十分で薄暗い。普通の家屋は門口を入るに稍々広い土間があつて之を廳堂と稱する。茲に卓子や椅子を並べてある。客間應接間食堂等を兼ねたもので、其の左右の室に寢臺が設けられ、炊事場や便所は更らに其の背景に設けられてゐる。市街地の家屋には前に亭仔脚なるものがある。臺灣の市街住宅建築の一特色で、道路に面して更らに屋下に人道を設け、通行人は暑熱や雨を避けつ、此の亭仔脚を歩行する事ができる。此の亭仔脚は前へ葺き出した廂ではなく脚上は二階三階の座敷等になつてゐる。

結婚 昔から支那民族は決して同姓を娶らない。また一夫一婦を原則としてゐるが、原則必ずしも實際ではなく種々興味ある挿話もある。随嫁嬢と言つて花嫁附きの女中が新婦と一緒に夫の家に入り一生を其の側で送るが、其の間夫人が病没でもするに随婦嬢が正夫人に据つて遺兒の面倒をも見る。更に査某嬢即ち女中なるものもあり、若し主人の意に適ふに昇格して妾となるものもある。然し近來は次第に廢妾の風が盛んになつて一夫一婦の制が守られるやうになつた。結婚式は中流以上は古禮即ち六禮に依つてやる。六禮といふのは、(一)問名、(二)訂盟、(三)納采、(四)納幣、(五)請期、(六)迎親の六式であつて大體

日本の古式に似て更に儀禮的であるといふに過ぎない。尤も總ての結婚が此の六禮に依つて行はれること云ふ譯ではない。由來本島には大娶、小娶の別がある。即ち大娶は六禮を履み、正式に結婚したもので小娶は招夫、即ち寡婦の家に入り夫となるもの、媳婦子、即ち他人の幼女を僅かな聘金で貰ひ受け、他日己れの子に配するもの、貰ひ兒即ち螟蛉子ちりまごは他人の幼男を聘金して養ひ他日自己の女又は他より女を迎へて配する者等で、これ等は六禮を履まず極めて簡易に行はれるものである。その六禮の式云つても貧富に依て著しき差異があるが一般に現今では此の古式は次第に省略され、問名、訂盟、納采を一時に行ひ、又納幣の式を省いて行つてゐる様である。殊に下流社會では此の古式は全く廢されて式も頗る簡單であるが、是等の結婚は概して賣買婚の觀があり、此の弊風に對しては本島人青年の間なきに改善の叫びが高く次第に革めらるゝであらうが、高等の教育を受けた女子や特別に美貌の持ち主なきは何千圓といふ聘金を出さぬと娶ることのできない舊慣である。故に本島人青年の結婚には相當多額な聘金を要するので貧困者は年頃になつても妻を聘することを得ず一生を無妻で送るものもある。従つて此の風習から既婚の婦人男子との間に種々の惡弊を見るは誠に遺憾の次第である。

葬儀 之は人間一生の大禮として最も嚴肅に行はれる。即ち病者が病一度あらたまり藥石效なきに至れば之を正廳に移し、其の愈よ呼吸を引きこるや一家集りて慟哭する。この時死者の枕邊には米飯、

鴨卵、竹箸等を置き、また脚尾には香爐を點じ、銀紙を焼き死者の冥路の安穩を祈る。また紙にて小幡を作り銀紙を填めて之を屍前に焼き其の死亡を天に報ずる。之の前後して報白ひらかきと稱し親族友人にも之を通知し其の日終日終夜近親相集つて聲を立て、泣く。二日親族朋友より作敬しやうけいと稱し靈前に種々の供へ物をする。此の日初めて和尚道士を迎へ、孝男かうなん(相續人)は喪衣して屍者を入棺し之を正廳の正面に移し、和尚道士等鳴鉦、讀經し、相續人を第一として家族順次跪拜し、外賓は室の外から弔意を表す。斯くて送葬の日なるに鹽しほと米こめを撒いて惡魔拂ひをしてから僧侶、道士等の讀經があり、一家親族が焼香してから出棺する。親族は何れも喪服して續くが、それ等の親類若くは友人知人中の婦人や女兒等は號哭しながら棺の後から行く。之は支那に見る泣女の一形式ではあるが臺灣では死者と何等の關係もない者が金錢を貰つて職業的に泣きながら葬列に加はるこいふ事はない。送葬の行列は途中鳴鉦、打鑼、吹喇叭等の奏樂を行ひ、沿道では放落紙はうらくしと稱し銀紙を焼き物々しい光景である。一定の區間此の行列を練るこい會葬者に謝して歸つて貰ひ、近親縁故者のみが棺を送つて墓に至り埋葬して歸る。そして墓より歸るこい魂帛(位牌)を正堂に安置して服喪する。服喪の期間は父母は百日麻服を着け且つ頭を剃らず、百日を過ぐれば白に換へ、以後三年間之を用ゆる。その他祖父母、叔伯、夫、妻、兄弟皆それらの服喪期間が一定し一般に此の服喪は嚴正に行はれてゐる。

祭祀 臺灣人は祭祀については特別の考をもち、平素勤儉力行して貯蓄するも祭典の爲めならば之を一度に消費しつくしても願わない。祭には豚や鶏鴨等の牲體を供へ、爆竹を放ち香紙を焼き、神明、祖宗を祀り、殊に元旦祭、媽祖祭、城隍祭は非常な騒ぎである。是等祭祀の中で趣きの異つてゐるのは城隍廟、王爺廟等の祭祀であつて其の日は神像が市中を巡遊するを稱し氏子等は神輿を舁ぎ音楽隊と共に街々を練り廻はる。其の行列の次第は八將又は三十六將を稱し、丹青黒色に顔面を彩つた古代の軍裝をなした者が六人、又は三十六人先頭に立ち、其の前に『靜肅』、『廻避』を書した木牌及偃月刀、青龍刀神旗を掲げて進む、之は靜肅になし巡行を遮るべからずこの意である。また五方將を以て竹骨で巨大な人間を作り之に衣裝を著せ、古代の偉人に見せたもの五人、六丁六甲を稱し同様古代の丁甲に扮したものを十二人、及び張爺、矮爺等之に従ひ、外に『藝閣』を以て屋臺上に鐵柱を立て盛裝せる妓女を乗せた催物、または騎馬隊を稱し幼童少女を馬に乗せたるもの等其の行列は數町に達し、その日は神輿を拜し行列を見んごする者老幼男女等で街路は身動きもならぬ雜踏を呈する。兎に角其の行列の大袈裟で美々しい事は、他に比類なく確かに臺灣の特色として誇るに足る年中行事である。

宴席 臺灣人の宴席は、廳堂の正位を上座とし下位を空席とするが古禮であるが、今は必ずしも下位を空席としない。客の數は奇數を忌み一卓八人、十人、十二人、十四人迄を最大限とし之以上になる

ときは卓を分つものである。卓上には菓子四皿、果物八皿、花四壺を順序に配列し其の中央に料理一鉢をつつ順次に運び出す、主人先づ盃を上げて客に應酬して後ら主人箸を取りて客にすゝむ。客は主人が箸を取り又は杯を舉げて勸むるを待つて飲食するを禮とし、思ふ儘勝手に振舞つてはならない。また臺灣の宴席では互ひに盃を舉げて乾杯するだけで内地式に杯の獻酬はしない。料理の數も奇數を忌み、十鉢十二鉢、十四鉢、十六鉢等の偶數に出すもので其の半數即ち十二鉢なれば六鉢目を半宴または半席と稱し必ず甘い料理が出る。この時主人は一々客の匙を取つて熱湯で洗ひ客の前に置く。客は主人の勸めにより匙を取つて甜汁を掬ひ食し了つて一旦傍らの別椅子に休憩する。其の時主人は洗面器に熱湯を取らしめ手拭を浸し絞つて一々客にすゝめる。客は之を受けて手や顔を拭き、暫くして主人の勸めに従ひ再び座席につき、宴に移り最後にまた甘き菓子又は甜汁の料理が出て宴を終るのであるが、半席以後は打ち寛ぎ親しい間柄であるを臺灣語で支那拳等を打ちなごして興じ戯れ、料理數が多い所謂盛宴になるを、實際『長者の宴』で藝妓の出る宴席ならば、此の間を美婦連が巧みに斡旋し樂師と共に音曲を奏し歡樂を盡す。臺灣人の宴席に列して特に注意することは主人の勸めを待たずして勝手に振舞つたり又は鉢の料理が自分の口に適したと言つて幾回もつまみ取ることは作法に叶はない。また周圍の人は主人の勸めにより同時に杯を舉げ箸をとるものであるから、性急に手を出し他人の箸や匙等に觸れないやうに注意し、また成べく匙や皿、箸の音を立てないやうに靜かに取扱ふべきである。

年中行事

(本島人の年中行事は舊暦による)

一月元旦 元旦は黎明になれば各戸爆竹を放ち、其の音街々に響き渡り春風春水一時に到り、所謂「爆竹一聲除舊歲、桃符萬戶更新々」の象を現はす。夜既に明くれば茶に水糖を加へ茶菓を三皿に卓上に盛り之を門口に供へ、爆竹を放ち香を焚き、金紙を焼き恭しく玉皇上帝を拜し迎年の式を行ふ。後互ひに相祝して年頭の廻禮をする。此の日一家の老少は悉く温恭、謙讓、惡言を放たず暴言を戒め、最も器物の破壊を忌む。

同日 豚、羊肉、鳥肉等三牲禮を供へ土地の神を祭る。平素深窓の婦人も此の日には神廟に詣て一家の平安を祈り、雇人媳婦子の如きも里歸りする。

同十五日 上元、俗に燈爺といふ、各戸走馬燈を吊し、また紙燈を作り其の中に火を點じ大勢列を爲して各街を練る。内に龍燈と稱し長さ四五丈、龍頭は竹骨に紙を貼り、龍身は竹骨を布に包み、龍頭、龍身中に數十の燭を點じ數人にて之を支へ、雜沓の街に至れば觀舞す

る。其の狀恰も龍の玉を弄ぶが如く壯觀である。

同二十日 この日から各地の廟宇を開扉する。昔は各官衙この日開印の式を行ひ初めて公務を執つたといふ。

二月十二日 花朝と稱し百花の生日である。本日晴天なれば百果豐熟すると稱し晴れを祈る。

三月十日 清明節は此の前後三日間に互り行はれる。各戸三日間は葷酒。酒飯を携へ展墓する。改葬は多く此の時期に行はれるが、此の前後は天氣が概ね晴朗であるから郊外に杖を曳くものが多い。古人の所謂踏青に倣つたものである。

四月八日 浴佛節と云ひ土女の佛廟に香を進むるものが多く寺及堂では甜菜を備へる。

五月五日 短陽節又は天中節と云ふ、俗に言ふ五月節である。各戸紅紙にて菖蒲、艾を束ね門口に懸け又黄紙で聯を作り門戸に貼り百邪を避ける。その他粽を作るなど内地と同様である。此の日扒龍船と稱し船を江に浮べ盛んに競技し勝を争ふ。蓋し楚の屈原が汨羅に投じて死せるを弔ふに出たものであると。

六月十五日 半年と稱し各家園子を作り家神を祭る。

七月十五日 中元節、または七月半と稱し各戸牲禮菜飯を奉供し祖先を祀る。此の日は又盂蘭盆と稱し普度を施行する。但し普度には私普と公普とがある。私普は七月一日から三十日迄の間に各街毎に舊例に依つて行はれる。この日各戸は「普昭陰大」慶讃中元等と大書した燈を門戸に吊し珍珠を門戸に配例して餓鬼を超度する。公普は各所の祠廟に各保、各派別に協同行はれるもので、此の普度は各派共殆んど競争的に囊底を傾け盛んに供物を供へる。尙公普を行ふ前夜には放水燈の儀がある。之は餓鬼を迎へる爲めに幾百萬張の燈籠を作り行列をなして江邊に行き水流に向つて燈籠を流す

八月十五日 中秋節と言ひ、各戸門縁を結び燈を吊し月下に香案を設け月娘(月)に供物し一家團樂(主に婦人)して酒を酌み中秋餅を喫して相樂しむ。また讀書人は此の夜賞月の宴を張る。

九月九日 重陽節又は登高日といふ。縉紳の家では親友を招き宴を張り或は近傍の山に登つて菊花酒を酌む。

十月十五日 下元といふ。各家廳頭に吊した低燈の下に卓を置き、五牲、紅龜(赤い龜形の菓子)を供へ爆竹、燒金して一家の平安を祈る。

十一月冬至 冬至節又は長節といふ。各家冬節丸(團子)を作り家神祖先の位牌に供へ其の福氣を祈る。若し家に五六代以上の古き神位(位牌)があると此の期間に家廟即ち祖廟に合祀する。

十二月二十二日 「尾期」と稱し一年最終の取引決算日である。商家は午後十二時迄に從來の決算をする。

十二月二十四日 送神と稱し各地各廟の神明は下界人間の善爲悪行を天上の玉皇上帝に報告の爲め上天すると稱し各家紙にて神馬、神將を作り諸神の上天を送る。此の日祠廟の門扉を閉ち翌年一月二十日迄は一般の出入を禁ずる。

十二月三十日 越年と稱へ、各家正廳の神前または佛祖に五牲を備へ辭年の式をする。終て明友知己等に物品を贈答する。夜は「圍爐」と稱し一家團樂して夜を徹する。

臺灣の植物 臺灣で園藝をやる位面白い事はない。大抵の植物なら切つて地に挿して置けば生きて来る。その中には熱帯の植物もあるし山から下した温帯の草花もある、竹など切つて倒さずに挿しておいてもつく。野菜は年中青いのが作れて食卓で賞美する事ができる。之も臺灣獨特の「熱光」の賜物である。更に内地のやうに臺灣では冬枯れの光景なき平地では見られない。詰り落葉樹があつても青い葉が次ぎ々々に出るので四時常緑の光景を絶たない。も一つ臺灣の特色は、植物の種類の種類が多い事だ。それは平地の亞熱帯から海拔八九千尺乃至一萬二三千尺の高峯に至る温帯林まで包擁してゐるからで、今日までに発見された植物だけでも既に約三千七百餘種を算してゐる。今これを本州の四千種、朝鮮の二千九百種に比較すると僅かに二千三百方に過ぎない面積の上に如何に多く種類を藏してゐるかが窺はれるのである。

木材として特に有用な樹種には、扁柏・香杉・紅檜・亞杉・柯・檜類・梅・姫子松・唐檜等である。又藥用植物中生薬として取扱はるゝものも約六百種に上つてゐる。現在本島に産する珍奇な植物を左に掲げる。

- 紅頭嶼の植物 ▲阿里山神木 ▲臺灣杉と帶大杉、坪林の油杉 ▲和社溪の樟の神木 ▲澎湖島の榕樹 ▲新埔の和活柚(果實)
- ▲仙洞の大葉素絨 ▲鸞鑿鼻の紋羽木 ▲昔觀音座蓮 ▲芝山巖の鐵苔齒朶 ▲草山の松村草と八角蓮 ▲桃園地方の桃

園草と本葉毛氈苔 ▲鹿港海岸の濱沈丁 ▲蓮華池の臺灣奴草 ▲埔里的臺灣梓 ▲高雄港内の紅樹林 ▲紅毛港及淡水港の琉球筍 ▲竹子湖及霧社之櫻樹 ▲瑞芳地方の木生羊齒林 ▲恒春の洗榔 ▲渡羅密と頭寮(果實)

此の外臺灣の植物として世界的な名物がある。それは蘆草といひ五加科に屬する灌木で、二千尺内外の蕃地に産する半野生植物である。此の幹の蕊心から蘆草紙の原料がされる。造花用として島内の消費もあるが多くは支那や歐米に輸出される。

本島の動物界 臺灣は世界に於ける生物界の寶庫とも稱すべく、其の面積に比し種類が頗る豊富であつて、分布の状態も複雑であるが今日までに発見せられた臺灣哺乳動物は、二十三科五十八種を算してゐる。中でも珍奇なものでは平地には穿山甲・辟香猫・白鼻心・羌仔の類があり、山地では高砂豹・花鹿・水鹿・臺灣尾長猿・顔白鼯鼠・縞栗鼠等である。また鳥類は五十一科三百四十三種で其の習性により特異なる分布状態を爲してゐる。是等鳥類中最も珍奇なのは雉科・水鷄科・鸞鷹科等で、雉科の一種帝雉の如きは世界的珍種である。その他山鷄・竹鷄・姬鷄の如きも決して他に求め難い本島特産種であるが更に鸞鷹科に屬する大冠鸞・臺灣つみ鷹の如き何れも動物學上最も珍重すべき特産種である。又羽毛の美なる點に於ては山娘・星娘・鬼山椒喰鳥・紅山椒喰鳥・五色鳥・八色鳥・花鳥等珍重すべきものが少くない。本島産の蛇類は今日迄に発見されたものは總數四十九種で内無毒種三十一種、有毒種十八種であつ

て有毒種中陸棲するものは十種である。其の重なるものは臺灣ハブ・雨傘ハブ・百步蛇・臺灣コブラ・青蛇・クサリ蛇・ワモン赤蛇等であつて、是等毒蛇の有毒成分は大別して神經毒のものミ出血毒のものミに區別するこゝが出来、何れも鋭い毒牙があり、咬傷の際猛烈なる毒液を注入するのである。咬まれて死亡する率は百人につき七人半程度である。然し平地等では滅多に毒蛇等を見ず、従つて其の害に遭ふことも罕れで寧ろ臺灣の悪宣傳の材料に使はれてゐた観がある。南部等にはヤモリが住家の天井等に夜間遊んでゐるが、之は全く無害で蚊等を食べて文字通り家を守つてゐる。與謝野晶子女史の歌であつたが『やもり啼くなり』の一首があり、夜啼く動物ミして臺灣では却て詩趣を添へてゐる。

本島産魚類に關する研究は未だ全しこ言へない。ただ淡水魚に就いては多少調査せられてゐるが、それに依れば約五十四種あつて、その中本島特産とも稱すべきものは三十三種である。昆蟲類は四季共温熱高く、植物が繁茂してゐるために其の生育に適し、發育も旺盛である。現に中央研究所農業部に於て今日迄に採集した種類は實に一萬二千八百餘種に達し、之を本土北海道に産する一萬二千六百六十種に比するに土地の面積、調査の年數から見ても實に其の豊富なるに驚かざるを得ない。この外臺灣名物ミして蝶がある、美しい種類も頗る多く標本ミする外加工して美術裝飾品を作製してゐる。産地ミしては臺中州埔里社邊が名がある。

臺灣地名解

臺灣の地名中には、領臺後内地風のものに換へたものもあるが、今尙ほ舊名を其のまゝ用ゐてゐる處も少くない。是等の舊地名は、凡て支那風に音讀であるが、其の文字だけ見ても其の意義が不可解で譯の解らぬものが十中八九を占めてゐるから、茲に夫等の起源を概括的に説明して旅行上の参考に供しやう。

臺灣各地の地名の起源を見ると、(一)番語を漢音に字譯したものの、(二)自然的形象に基づくもの、(三)歴史的沿革に基づくもの、(四)拓殖當時の情勢に基づくもの、四つに區別することが出来る。番語を漢音に字譯したものとては、北投(番名バツタウ)、羅東(同ロトン)、士林の舊名八芝蘭(同バチナー)、苗栗の舊名貓裏(ツアリ)等の如きであつて即ち北投「バツタオ」は平埔蕃族の番名であり、又番語では羅東の「ロトン」は狼の義、八芝蘭「バチナー」は温泉の義、貓裏の「バアリ」は平原の義である。

自然的形象に基づくものは、臺北・臺南・臺中を初めとして溪州・湖口の如き、水邊脚・赤山の如き、礮山・桃園の如きで、或は地形に基づき、或は所在の位置に基づき、或は地文上の特徴乃至物産によつて名づけられたものである。

歴史的沿革に基づくものでは、澎湖の紅木埕がある。之は蘭木の築城に因んで紅毛城址と言はれてゐたもの。また南部臺灣の領旂・石營・國公府・二鎮・中協・角宿等の如く領・營・鎮・中協・角宿等の字のついた處は大概鄭氏時代の駐屯地だつたのに因んだものである。清領後に於て歴史的沿革に基づくものにして

は嘉義が最も有名である。即ち此の地はもろ諸羅しよらと稱してゐたが乾隆中林匪の亂に土民義を守つた功を記するため清廷が定めたものである。其の他行政機關の新設等により佳良の文字を擇みて舊名に替へたもの、例へば彰化・恒春等の如き、または地方第二次の發展に伴ひ、新街庄を建設するに當り舊街庄に對して新設の意を表はし、新庄・新街・新店等と名づけた處も少くない。

拓殖上の情勢に基づくものとしては田寮・竹園・銃櫃・隘寮庄等を初めとし、園・城・柵・股・份・張犁等の字の附いた處がそれである。元來臺灣の拓殖は官府の保護あるなく各自が分に應じて自營の計を爲さなければならなかつた。即ち開墾者は一定の地をトし竹を構へて屋をなす、之を俗に田寮と言ひ、開墾既に成り人民繁殖し村落の形をなすに至るに竹を植へて籬をなし以て盜賊の侵入を防いだ。之を竹園といふ、即ち田寮庄・竹園庄等の名は之に因んだものである。然し當時は尙ほ生蕃の跳梁してゐた地域が甚だ多く、従つてこれ等の地方の拓殖は一方に鋤犁を手にして開墾を計るに共に、他而戈を執つて防蕃に當らねばならなかつた。即ち園・城は是等防蕃用の土城をいひ、柵・寮は堡柵・隘寮を意味し、銃櫃・隘寮等と同様隘勇兵を置いた處である。結・股は宜蘭地方に多い地名であるが、之は此の地方の拓殖が團體的に行はれた爲めに此の團員を十數班に分ち、各班に結首を置いて分割開墾させた、即ち一、二、三、四結等の地名は、此の結首分擔の數に因んだものであつて、股は其の開墾地の股分に依つたものである。

又張犁（臺灣の田制は蘭人の遺制に則り甲を以て計る一張犁は五甲）は土墾開墾の延長に因み、份はもろ腦灶を設けたに因んだものである。以上の外、碑・土・牛・牌・埤・坡・圳等の字のついた處も多い。碑・土牛は清廷が民蕃の境界を定め其處に土牛江線及至碑を立て漢人の蕃地侵耕を禁じたに基づき、また埤・坡・圳は何れも灌溉用の施設物であつて何れも其の所在地なるに依つて名づけられたものである。尙ほ阿里史・房裡・日南・日北等の地名が各地に散見するがこれ等は彰化・新竹地方より移住したものが原籍地名を再現したものである。

臺灣鐵道の沿革

臺灣の北と南とを繋ぐ縦貫鐵道の一部である基隆新竹間六十二哩餘の鐵道は、前にも述べたやうに清國時代に於て、時の巡撫劉銘傳の獻策に基き、光緒十三年(我が明治二十年)に起工し同十九年(明治二十六年)に竣成したものであるが、施設不完全で線路の傾斜屈曲甚しく、停車場、橋梁其の他一として完全なものなく、領臺の初め之を修理して軍用としたが運轉意の如くならず、「後押し汽車」の名が、今尙ほ話の種子となつてゐる位だ。明治三十一年に臺灣縦貫鐵道建設の議が定まつて、第十三議會の協賛を経て建設費豫算二千八百八十萬圓、十年繼續の事業として計畫を樹て、南北兩端から工事に著手し、明治三十七年には、僅かに濁水溪、三叉間五十七哩の未成線を残す迄に進んだ。時恰も日露戦争が始まり、時局の形勢は本島南北の連絡を急施するの必要を感じたので、軍事費六十四萬四千圓を以て、濁水、豊原間四十二哩餘の速成工事に著手し、翌三十八年五月に竣工し、次いで縦貫線中最難工區と稱せられた三叉豊原間の工事も漸次進行し、明治四十一年四月、縦貫線全部の開通を見るに至つた。臺北・淡水間及び高雄九曲堂間は、この全通に先つて竣成し、九曲堂・屏東間の延長線は、明治四十四年以後三箇

年の繼續事業として、經費二百三十萬圓を以て起工し、大正二年十二月竣工し、また臺北・基隆間複線計畫も大正元年以降五箇年繼續事業として經費百二萬圓を以て、大正八年に完成した。然るに其の後臺灣産業の異常なる發達は、歐洲大戰の勃發以來一層急激となり、鐵道輸送力に不足を生ずるに至つたから、大正八年より四箇年繼續の事業として、經費千五百萬圓を以て海岸線竹南・大肚五十一哩の鐵道建設に著手し、大正十一年十月、全部の開通を見ることとなつた。

臺東線 花蓮港・玉里間五十四哩は、明治四十二年經費四百二十五萬圓を以て、九箇年繼續事業として工事に著手し、大正六年全通した。しかし東部臺灣の開發は、結局、島内循環鐵道が出来た上でないこと望めないで、其の第一著として、大正十一年四月、豫算二百二十萬圓を以て、臺東開拓株式會社の經營に係る臺東鐵道を買収し、之を臺東南線と稱し、臺東里壩間二十七哩の運輸營業を始め、同時に従來の臺東線花蓮港・玉里間は之を臺東北線と改稱した。そこで更に進んで此の南北兩線を連絡すべく、玉里・里壩間二十六哩餘を大正十年から三箇年の繼續事業として經費二百十萬圓を以て工事を始め、十五年一月漸く全通し同時に兩者を合して臺東線と改稱するに至つた。

宜蘭線 枋寮線は大正六年度以降五箇年間の繼續事業として、總經費一千萬圓を以て敷設に著手することとなり、途中で經費の都合により工事の繰延べを行ふの止むなきに至り、宜蘭線は豫定より二

年後れて大正十三年十二月全線の開通を見るに至つた、枋寮線の方は、大正十二年十月溪州迄開通したが、豫算の都合で溪州以南の工事は、一時中止の止むなき状態にある。

集集線 二水・外車埕間十八哩は、もも臺灣電力會社の經營する處であつたが、昭和二年三百七十餘萬圓を以て之を買收し同年五月一日から官線として運輸營業を開始した。

斯くて現在營業線路の總延長は、縱貫線二百四十九哩一分、宜蘭線六十一哩二分、淡水線十四哩五分、海岸線五十八哩、潮州線二十九哩二分、臺東線百七哩八分、集集線十八哩五分、合計五百三十八哩三分に達してゐるのであるが、最近に於て島内産業の發展は、北は臺北・竹南間五十七哩及び、南は高雄・臺南間二十九哩を複線に改良する必要ありとし、昭和二年度より五年間の繼續事業として經費千四百餘萬圓を以て工事進捗中である。

縱貫線 (二四九哩一分)

基隆を起點として、臺北・新竹・臺中・彰化・嘉義・臺南の諸市を経て、南、高雄に至る延長二百四十九哩一分は、臺灣鐵道の幹線であつて、急行列車は基隆・高雄の兩驛から晝間二回、夜間一回づつ運轉し、うち晝間一回は臺中線即ち山手線を経由するが、他の一回の晝間急行と夜間急行とは、海岸線を通る。その中の、夜行は臺中に寄り、他の一列車は、臺中發著の客車を連結するので臺中へ出入するには何等の不便がない。晝の急行列車には、食堂の設備があり、夜の急行列車には販賣店及び一等寢臺車の設備があるので旅行上便宜が多い。

基隆を出發し竹子嶺の隧道を出る三八堵(宜蘭線の分岐點)に著く、茲から汽車は淡水河の支流たる基隆川に沿うて走る。汐止驛を過ぐる頃、兩側の丘陵は漸く遠ざかり、やがて眼前には太古湖底なりと謂はれる臺北平野が展開し、基隆を出てから約一時間足らずで、臺灣の首都臺北の市街に入る。茲から次の驛萬華までは市街を縱走し、新店溪を渡り板橋を過ぎ、香魚に名ある大嵙崁溪を左窓に見て丘陵を登りつめる三桃園驛である。桃園・湖口の間は幾つかの丘が起伏し、赭土の上には茶が一面に栽培されて

る。この邊は山地、勾配線で往々六十分乃至八十分の一の急坂があるので、目下線路の改良工事を始め、此の急坂を百分の一以下に緩和しやうとしてゐる。

湖口より汽車は新竹平野を見おろし乍ら勾配を下り、鳳山・紅毛田兩溪を越す。新竹驛につく。臺北より四十八哩、新竹州廳の所在地である。南進するに共に線路は次第に海に近づき、竹南驛にて海岸線に分れ、頭份・後龍兩溪の流域を横断して苗栗平野の中心たる苗栗に著く。此の地を過ぎるに山嶽重なり溪川入り亂れた山地となり三叉河谷の急勾配を上り詰めるに、十六份信號所に達する。海拔千二百餘尺、本島鐵道の最高所で北部臺灣と中部臺灣との分界點である。それよりは殆ど四十分の一の下り勾配で、隧道を潜るに八、内社川の深谷を渡り、大安溪・后里驛・大甲溪を経て豊原驛に近づく。臺中平野が次第に眼前に展開されて来る。汽車は臺中平野を縦走し、平野中心で且つ臺中州廳の所在地たる臺中驛を過ぎ彰化驛にて再び海岸線と相會する。

彰化を経て員林・二水(集集線の分岐點)に至るまでは美しい田園に芭蕉畑が打ち續いてゐる。此の邊から濁水溪の上流を見やるに中央山脈が層また層をなして聳々立ち、斗六・斗南・嘉義に進むにつれて、一面に渺茫たる甘蔗畑となり、製糖工場は彼方此方に黒煙をあげてゐる。嘉義驛の南方にある北回歸線標は東窓からも充分に見られるが、之を越すに愈よ熱帶圏に入ることになる。晴れた朝なごは、この附

近から新高山の山頂を眺めるにこゝが出来る。新營・番子田に進むにつれ南國的氣分は益々濃くなり、曾文溪を渡るに忽ち臺南である。

臺南は、本島の古都で曾ては和蘭人や鄭氏の覇業の地であり、今は臺南州廳の所在地として本島第二の都會となつてゐる。岡山を出る頃、その前面に奇妙な形の山を見る。即ち半屏山である。この麓を廻はるに本島第二の開港場で、且つ高雄州廳の所在地である高雄驛に著く。

新營	番子田	新營	番子田
...

線 貫 縦

基隆驛

(縱貫線起點) 宜蘭線起點
臺北州基隆市會子寮

驛名	哩程	旅客運賃		
		一等	二等	三等
臺北	一七・八	四・一五	二・九〇	〇・八〇
新竹	六三・九	四・一五	二・九〇	〇・八〇
臺中	一一九・六	七・七五	五・四〇	一・六〇
嘉義	一八二・〇	一一・八五	八・二〇	二・五〇
臺南	二二〇・三	一四・三〇	九・九〇	三・〇〇
高雄	二四九・一	一六・二〇	一一・二〇	三・五〇
宜蘭	四七三・三	三〇・五五	二二・一五	六・二五
蘇澳	六一二・二	四〇・〇〇	二七・五五	一・五五

▲手荷物運搬▲携帶品一時預▲手荷物酌達▲入場券發賣▲臺東線連絡扱▲自動車▲馬車▲人力車▲仲賣▲呼賣

線 貫 縦

依姫館(新店街)(五) 内山館(義重橋)(五)

宿泊料 三圓五十錢乃至五圓

中食料 一圓七十錢乃至二圓五十錢

會食所 日本亭(哨船頭)(三) 巖亭(哨船頭)(三) 吾妻(哨船頭)(三) 姫路亭(哨船頭) 自由亭(義重橋)(五)

劇場 基隆座(哨船頭)(三)

沿革 此の地は昔港東又は東蕃と稱せられ、支那の明朝の初年(西暦一三)既に、漢人の來住ありしものゝ如く、日本人も足利氏の末頃(西暦一四)所謂、入幡船の健兒が朝鮮・支那沿海より、遠くは、南洋方面の海上に雄飛するに當り、早くも、本島の要港を扼し、之を根據地としてゐた事蹟もあつて、基隆港及び港口に在る社寮島は、四百年前、既に、日本海客竝に支那流氓の居住する處となつてゐた。即ち、方輿記略に所謂鷓鴣山の地が之である。降つて、十七世紀の初め、西班牙人之を占領し、サン・サルバドル城竝にサン・テンマ・トリニダード城を築き、銳意、土蕃の化育に努めたが、占領十六年にして、和蘭人の驅逐す

驛勢

乗降客數 一、七九六、〇〇〇人
發貨物噸數 一、八二八、二二八噸
收貨物噸數 一、七三二、三五四噸

重要貨物噸數

發	送	到	著
肥料	一九〇・二五	石炭	七二四、八八八
米	六〇・七七九	米	二七五、九九四
セメント	三〇・六九八	砂糖	八六、二九九
鹽乾魚	二二、四〇〇	芭蕉實	八四、四八〇
木材	二〇、三五七	茶	二五、六六五
金屬	一九、六四一	木材	一一、一〇五
雜穀	一四、五一六		

銀行 彰化銀行支店(草店尾)(五) 商工銀行出張所(哨船頭)(三) 臺灣銀行支店(哨船頭)(三)
郵便局 基隆郵便局波止場出張所(新店街)(五) 基隆郵便局(義重橋)(五) 基隆哨船頭郵便局(哨船頭街)(五)
旅館 船越旅館(會子寮)(五) 常盤館(新店街)(五)

る處となり、尋いで十九年の後、鄭氏之に代り、後、幾何もなく、清國の領有となつた。道光十年(西暦一八)道臺姚瑩の議に依り、十七港を開き、對岸五市の市場となすや、此の地は、淡水・安平・打狗と共に、本島の四大港となるに至つた。其の後、道光二十年(西暦一八)鴉片戦争に際し、英艦の襲撃を受けてより、漸く、海外との交渉を生じ、咸豐元年(西暦一八)始めて洋船が入港し、通商を許すこととなり、茲に外國貿易の端緒が開けた。清の同治十一年(西暦一八)海防廳を置き、次いで、光緒十一年(西暦一八)巡撫劉銘傳は、基隆撫民理蕃同知を置き、古名鷓鴣を、現名基隆に改め、一般行政をも處理せしむることとした。

領臺後、明治二十八年、臺北縣支廳を置き、後、辨務署に變じ、廳となり、再び支廳となつたが、大正九年十月、地方自治制度の施行と共に基隆街となり、基隆郡役所を設置せられたが大正十四年街勢の發展と共に市制を布かれ今日に至つてゐる。

基隆港大觀 基隆市は、基隆港を抱く本島北端の市街であつて、近來出入船舶の激増と共に市況著しく發展して來た新進の都市である。首都臺北から汽車で僅かに十七哩八分、臺灣北方の關門をなし、外は内地・南支・南洋への飛び石として船舶の出入激しく、内は縦貫線及び宜蘭線の起點として臺北・臺中・臺南・高雄等の主要都市に連り、南の高雄市と共に本島の二大港都である。冬分は雨が多く、雨港の名がある。この地はまた北部漁業の中心をなし、水産業が盛んで之に従事する發動機船三百隻に近く、その漁獲高は百六十萬斤に達し、本島水産總漁獲高の約三割五分を占めてゐる。之に伴うて水産工業も發達し、鱈節製造工場十二、其の生産高は十三萬斤に及んでゐる。最近附近の

海底に珊瑚林を發見し、其の採集從業船は百八十隻に達し年産額八十萬乃至百萬圓に及んだ事もあるが、近來は幾分不振を見てゐるので更に新珊瑚林の發見に力めてゐる。

市街は灣頭に於て東西に區分され、西を大基隆東を小基隆と呼ぶ。基隆市は此の二區を中心として港口に向つて開展し、西方大基隆に連つて厝寮・牛欄港・仙洞等を形成し、東方小基隆の北に三沙灣・大沙灣等を現出し、此等に接續する附近部落及び社寮島等の港口の島を合して基隆市を成してゐる。中でも大基隆は、本市創始の地であつて、主として本島人の居住者多く、新店・後井子・炭子頂・草店尾・石牌等の諸街に分れてゐる。小基隆は内地人の居住者大部分を占め、義重橋・哨船頭・

田寮港の諸街より成る。義重橋・哨船頭街には、官衙・銀行・會社等多く、行政・經濟の中心をなしてゐる。厝寮は大基隆の北に連り、停車場のある所で、埠頭を合せ海陸連絡の要區をなし、大阪商船・近海郵船兩社の支店を初めし運送店・旅館等が多い。

基隆港は、本島の最北端、富貴角と鼻頭角とによつて抱かれた基隆灣の中央に在る。港灣の廣さ東西六町、南北十町、東西南の三面は山を負ひ、港口は北に向つて開け、社寮島・中山子・桶盤嶼等の諸島が點在し、自然の良港を成し防波堤により内港と外港とに分れてゐる。冬期は支那大陸から來る北東信風を受けて、風浪高く且つ往時は、港内水淺く、一千噸級の汽船すら市街を距る一湮餘

の沖合に投錨するの右様であつたので、領臺後築港の必要を感じ、明治三十二年以降第二期第二期に互り築港計畫の歩を進め、目下は第二期追加工事の施工中である。

尙ほ第二期工事は明治三十九年度より大正十八年に至る二十四箇年の編續事業として繼承して來たもので之に要する總豫算額は二千二百六萬八千九百四十六圓である。

現在の工事による港灣の大體を説明するに、西岸に基隆埠頭と牛欄港岸壁があり、東岸には對馬棧橋・大正棧橋がある。埠頭は主として内臺定期船其他大汽船の繫留所、牛欄港岸壁は石炭の荷役場所東岸の棧橋は、沿岸航路の發着所である。埠頭は第二若くは第四の岸壁より成り、六千噸級の汽船七隻を一時に横著けるこゝができる。埠頭

線貫縦

の荷役設備としては、鐵道線路を岸壁にある上家倉庫の前後に導き、且つ岸壁上には移動式電氣起重機三臺を据わつけ、荷役の圓滑を迅速を計り、海陸連絡至便である。

いくら擴けても發展に追いつかぬ基隆港は、目下第二期追加工事中である。此の工事は大正元年から昭和四年に至る十八箇年間の繼續事業で、其の總經費は約千三百萬圓である。此の工事の主要は、既成岸壁に接續して仙洞鼻防波堤に至る沿岸に千間近い岩壁を築き牛欄港に海岸石垣・延長二百三十間を築造する。そして岩壁を有する陸上には上家倉庫を建設し起重機を備へて貨物の積卸を安全且つ敏速ならしめる。石炭船席に於ては貯炭場を設け載炭設備をなし敏速に多量の石炭搬出に便ならしめる。この新岸壁には三千噸級または一萬噸級の汽船十一隻を同時に繋留させる設備を爲し、既に成つてゐる岸壁と相まち十五隻の汽船を同時に岸壁に繋いで機械設備により荷役ができる様にし、

線貫縦

錫・砂糖・燐寸等之に次ぎ、輸入品は豆糟の四百三十萬圓大豆の二百四十五萬圓を最多とし、小麥・阿片・黃麻・鹹魚・木材・毛織物等の順序である。また移出入品の主なものは、移出にあつては米の三千二百三十六萬七千圓を首位に、砂糖の二千三百五十萬圓弱及び芭蕉實・樟腦・石炭・樟腦油・鯨節等之に次ぎ、移入品は綿織物及び絹織物の六百五十六萬餘圓を筆頭に、鐵材・水産物・乾鹹魚・錫・小麥粉・清酒・紙卷煙草等之につぐ。大正十三年に於ける船舶出入隻数は三千二百五十七隻、この噸数は五百五十萬噸に及ばんとしてゐる。

人口 五八、五二四人
内地人 一五、〇二二
本島人 四〇、五五七
外國人 二、九四五
官衙 基隆市役所(媽祖宮街) 郡役所(義重橋)

別に浮標には六隻を繋留し得て、内港だけで二十一隻を容れ得るやうにするにある。更に一般船舶の修理に應ずるため三千噸級及び一萬噸級の二修繕船渠をも築造する筈である。また既成岩壁即ち第一岩壁から追加工事中の第二岩壁即ち球仔岩壁まで約一哩間引込み線を延長し之に依つて水陸連絡の便を得べき計畫であるが之が完成の時は、基隆港の面目は殆ど一新され東洋屈指の良港たるに至るであらう。

基隆港の大正十三年度の内外貿易額は、一億八千六百萬圓弱で之を築港計畫に著手した當時、即ち明治三十二年の九百二十萬圓弱に比すれば實に二十倍の増加を示し、本島輸移出入年額三億八千六百七十萬圓の過半は實に基隆を経由するのである。輸出品の重なるものは石炭の七百餘萬圓、水産物乾鹹魚の二百七十萬圓を最多とし、綿織物・

- (五) 醫院(義重橋)
- (六) 税關(曾子寮)
- (七) 港務所(哨船頭)
- (八) 水上警察署(哨船頭)
- (九) 觀測所(社寮島)
- (十) 燈臺(仙洞)
- (十一) 築港出張所(仙洞)
- (十二) 軍 要塞司令部(大沙灣)
- (十三) 重砲兵大隊(獅球嶺)
- (十四) 憲兵分遣所(哨船頭)
- (十五) 陸軍運輸部(大沙灣)
- (十六) 陸軍經理部派出所(大沙灣)
- (十七) 學校 基隆中學校 女學校(田寮港)
- (十八) 會社 近海郵船會社支店(曾子寮)
- (十九) 大阪商船會社支店(曾子寮)
- (二十) 三井物產會社(新店街)
- (二十一) 基隆炭礦會社(新店街)
- (二十二) 臺灣漁業會社(草店尾街)
- (二十三) 臺灣土地建物會社(哨船頭)
- (二十四) 臺灣肥料會社(田寮港)
- (二十五) 海南製粉會社
- (二十六) 物産 石炭・鹽・鯨・鯨節・肥料・珊瑚

交通機關

▲航路(十一頁迄参照)
▲乗合自動車 驛前から市中を経てクルベリ濱へ往復し、更に八尺門までも運轉する。市内は十錢で八尺

門までは驛より二十錢。更に基隆自動車會社は臺北基隆間を乗合車及び貨物車を運轉してゐる。所要時間は四十分乃至一時間、賃金は臺北迄五十五錢。

▲軌道 基隆炭礦會社の經營に係り田寮港を起點とし瑞芳を経て九芎橋に達する。瑞芳迄六哩二分、一人乗普通運賃一圓十一錢、二時三十分。九芎橋迄七哩九分、同一圓六十五錢、約三時間。

▲乗合馬車 停車場より社寮島への渡船場たる八尺門に至るもので、其の七區に分つ。一區に付五錢。

▲船版 港内には數多の船版があり、港口内の來往、近海の遊樂に便である。賃金は、一日備切一圓五十錢、半日備切八十錢、埠頭よりの賃金は、哨船頭五錢、税關宿舍附近十錢、クールベール濱迄二十五錢、社寮島迄三十五錢、八尺門迄四十錢。

▲人力車 賃金は、五町迄五錢。以上一町に付一錢。雨天・夜間は各二割増。停車場より高砂公園迄五錢、郵便局迄六錢、郡役所迄九錢、哨船頭迄十錢、基隆醫院迄十五錢、田寮港迄十六錢。

附近案内

(注意) 基隆は要塞地帯で、西は汐止、東は頂雙溪に至る區間で要塞司令官の許可を得ずして寫眞をとり測量模寫等をやると要塞地帯法で罰せられます。

基隆市内の觀光は、停車場から高砂公園や千人塚を経て郵便局前を右折し、義重橋を渡つて基隆神社に詣で、それより哨船頭街を北に水産會社クルール濱、平和公園を見て八尺門より社寮島に渡り、蕃字洞・紅毛井等に三百年の史蹟を探り、さらに社寮島より渡船をやまつて仙洞に登り、基隆船渠を視察して基隆驛に歸著するの順路をこれば約五時間位で一巡できるが、御遺跡時に領臺當時の戰蹟を探らんすれば、郵便局前より臺車に乗り往復三時間を費やせば歸途無線電信局をも序で

に見るこゝができる。此の臺車賃は往復三十八錢であり之を合し全部の車賃・自動車賃(乗合)舟賃約二圓で足りる。

▲高砂公園(註) 停車場の南約二町、新店街の西端にある。丘上には綠樹多く茲より船の出入激しい基隆港を一目に眺めるこゝができる。同所には故兒玉大將の揮毫になる戦死者招魂碑がある。

▲千人塚 丘腹にあり領臺の際わが出征の戦病者の屍を埋めた地であるが、後年政府は遺骨を集めて臺北圓山に移葬した。明治四十五年此の地に忠靈殿を建立し毎年六月大祭を行ひ參詣者が多い。

▲基隆神社(註) 停車場の東五町。北白川宮殿下外三柱の神を併祀しあり、境内は高燥、頗る眺望が佳い。脚下には基隆灣を隔て、港口に點々する

島々を望み、紺碧の大洋を見晴らす最趣は雄大である。

▲臺灣水産會社 十八を數へた魚問屋即ち魚行を買收し組織したもので資本金七十二萬餘圓(拂込三十六萬餘圓)、會社の特權は魚市や珊瑚及び石花菜の市場經營をやり手数料を徴するにある。年取引高二百萬圓、八尺門の經節工場は自營せず人に借してある。

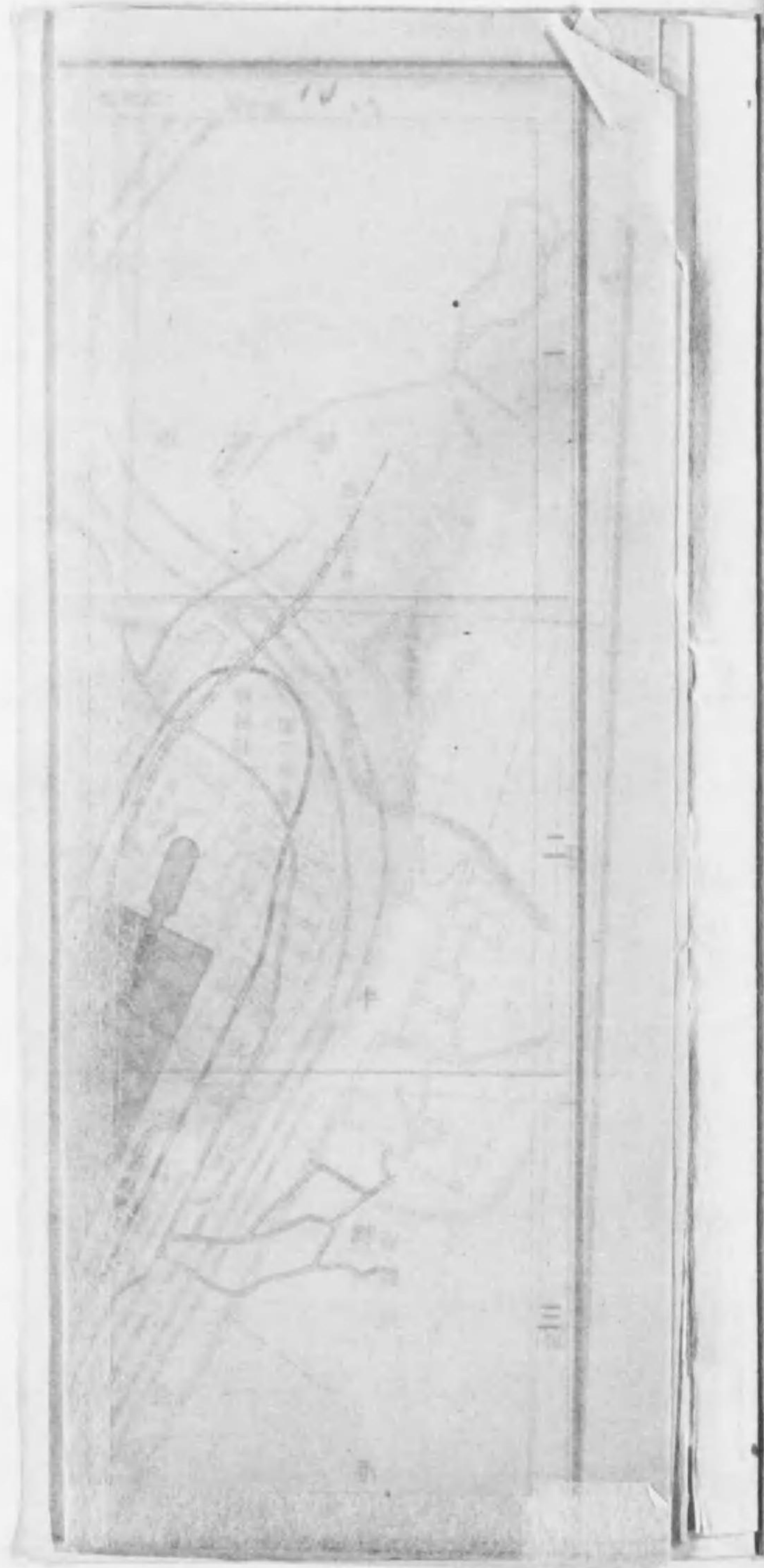
▲クールベール濱(註) 停車場の東北二十町、義重橋より北を指して進む哨船頭街・鼻子頭街等を経てクールベール濱に達する。鼻子頭街には税關官舎がある。其の構内は清國時代の海關廳跡で、領臺當時樺山總督が始政式を舉げた所である。クールベール濱は、光緒十年(西曆一八八四年)清佛戰爭の際、佛國海

兵の上陸した所で、當時艦隊を統率した提督の名に因んで此の名がある。この中央の方尖形の墓碑は、此の役に戦死した將卒を葬つたものである。

一帯の濱は背後に翠巒を負ひ、前に白沙連り好箇の海水浴場をなし、來り遊ぶ者多く、夏は殊に雑沓を極める。浴場宿として千鳥あり外に浴場平和湯、會食所巖亭支店等がある。

▲平和公園 また旭ヶ岡を稱し臺灣八景の一である。基隆附近第一の眺望所で、港の内外を一眸に收むる丘陵上にあり、面積約三萬坪、枕山砲臺は此の岳上にある。劉銘傳が佛式によつて築造したもので砲座四つあり、地下兵營等もあり其の規模の案外大きいに驚く。茶亭等もあり散策には絶好の地である。

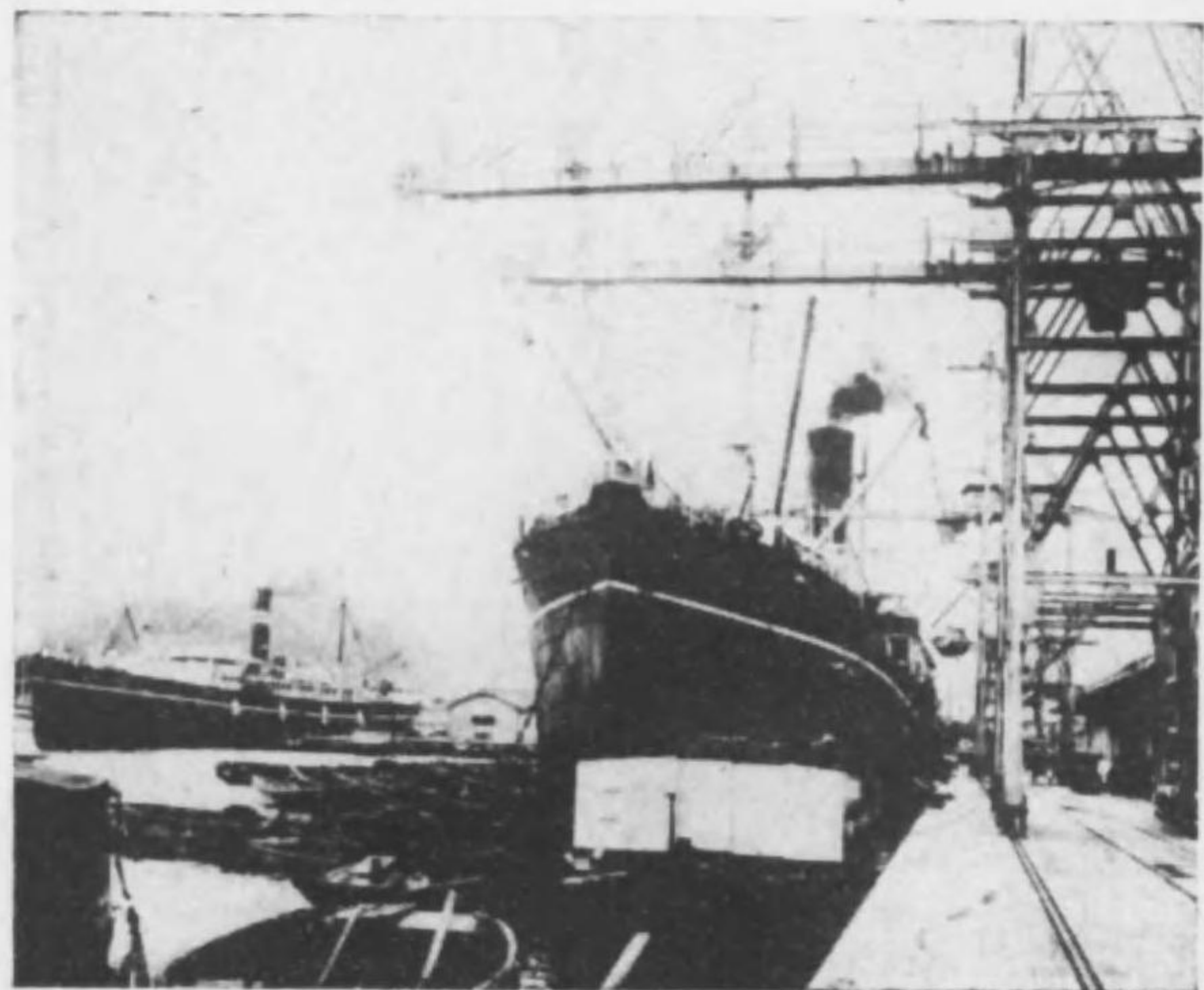
▲社寮島 停車場の北、海路二哩、陸路ではクルベー濱から海に沿うて北行し、八尺門を渡る港口の小島、社寮島に達する。基隆八景の一で社寮、日の地である。山あり、谷あり、千疊敷の岩盤あり、樹木鬱蒼たる間に小部落が点在してゐる有様は、實に一幅の繪である。西班牙人築城の遺跡を初めし龍目井・蕃字洞等史跡の探るべきものが少くない。蕃字洞は昔蘭人がスペイン人に代つて此の地に在つた時、記念の爲め洞内の巖面に氏名年代等を刻み残したもので好い資料である。また島内には沖繩人の漁村があり、獨特の權を操り、或は海中に潜り入りモリで泳ぐ魚族を突き刺すなど珍にするに足る。島内には旅館・會食所等もあり新鮮な魚を直に庖厨に上すこともできる。



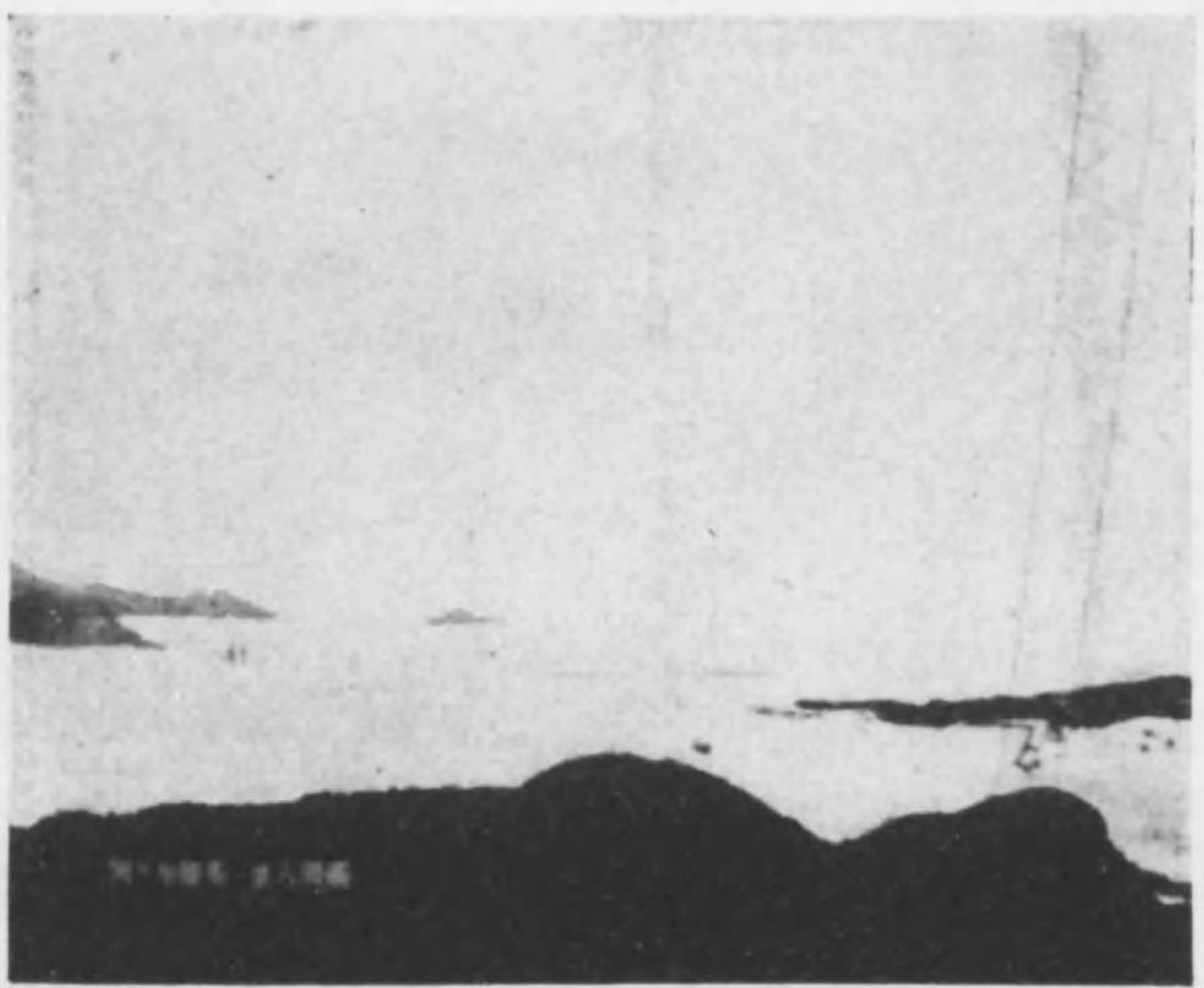
基隆市街圖

縮尺一萬分





基 隆 埠 頭



旭 ヶ 岡



兵の上陸した所で、當時艦隊を統率した提督の名一、
 此の地、亭林島の北、毎路二里、陸路ではクー

線 貫 縦

涼風に吹かれながら蛇味線を聴くのも一興であらう。同島へは埠頭から舢舨さんはんによれば片道約五十錢で行ける。

▲仙洞窟せんどうくつ 停車場の北十五町。牛欄港うしらんこうを過ぎ、仙洞鼻せんどうびを廻はつた所に仙洞窟の奇勝がある。奇巖高く海に聳立する所中央に一大洞窟をなし洞中更らに三箇の小洞がある。中に入るに外部の潮音は洞の内部に反響して恰も鼓聲を聞くやうで、古來仙洞聽潮せんどうりやうと稱し、基隆八景の一となつてゐる。洞内には觀音菩薩を祀つた代明宮及び辨財天の祠がある。洞の内外の岩壁には來遊者の題詩が多く彫られてゐる。

▲金山温泉 停車場の西約五里も金山包里きんざんぱうりと稱し人口約一千。街區井然とした小市街である。温泉



仙 洞 附 近



彭 佳 嶼

は無色無臭で腸胃病・リウマチス・脚氣等に特效がある。土地は閑靜で靜養に適する。基隆から小汽船の便があるが淡水から陸路によることもできる旅館金山館。

▲アジンコート 基隆の北四十哩、彭佳嶼ほうかじま又は峙山嶼ざいしやまと言ひ歐洲人はアジンコートと言んだので今は通稱になつてゐる。口碑によるに、清の道光の初年(西曆一八二〇年)一團の漢族が漂著して生活してゐたが間もなく去り、次いで咸豐三年(西曆一八五三年)基隆地方に於ける漳泉人の争鬪の結果、泉人二十餘家が難を此の島に避けて定住したと傳へられてゐる。清佛戦争の際、佛人之を占領したため、住民は基隆にのがれ、後無人島となつてゐたが、明治四十二年、燈臺が建設されたため、本島に居住するものがで

きた。燈臺は、白色一等閃光、光達距離三十哩に達する。島内には山羊が多く、また信天翁が群居してゐる。珊瑚林が発見されたのも、此の附近である。

▲魚漁地 基隆の外港から社寮島の周囲にかけて小鯛・小鯷等が多く釣れる。

▲基隆水源池 次の八堵驛から歩行で約三十分の山腹にあり、水源地は周囲二里、八十尺のダムを以て水深五十尺の永を湛へ、一滴の雨がなくても三十日間供給に堪へる。この一帯風光もよい。

八堵驛

(宜蘭線分岐點)

基隆ヨリ二哩二分 高雄マデ二百四十六哩
蘇澳マデ五十九哩

(臺北州基隆郡字八堵南)

▲手荷物運搬 ▲携帯品一時預 ▲入場券發賣
▲呼賣 ▲仲賣
八堵は、七堵庄の一部であつて宜蘭線の分岐驛として交通上重要な地位を占めてゐる。

次の七堵驛は、基隆より三哩五分、驛のある七堵庄は、北に五指山、大武崙山、東に獅球嶺、南に五份山の支脈があり、三面山岳に圍まれた盆地であつて、基隆川が其の間を流れてゐる。この一帯の地には石炭・茶の産出がある。

五堵驛は、七堵庄の一部五堵にあり、五指南山の麓、基隆川に臨み、附近には鹿寮・北口港・洪内等の諸炭坑あり、石炭の産出が多く年額約十五萬噸に及ぶ。また一帯の山地には茶の栽培が盛んである。

交通機關

▲乗合自動車 汐止から臺北大稻埕間を往復するものと、汐止を経て基隆・臺北間往復するものがある。

賃銀は南港まで十五錢、松山迄二十錢、臺北驛迄三十五錢、大稻埕まで四十錢

次は南港驛であるが、同地は内湖庄の一部で、汐止街と松山庄との中間にあり、や、広い平野を占め、附近は石炭の産地として知られてゐる。

松山驛

基隆ヨリ十三哩八分
高雄マデ二百三十五哩三分
(臺北州七星郡松山庄松山)

▲携帯品一時預 ▲入場券發賣 ▲仲賣

松山庄は、元錫口と言ひ、七星郡の西南端に位置し其の南半分は丘陵が重なり、土地概して高燥であるが、北半分は基隆川の流域に當り、廣々とし

汐止驛

基隆ヨリ八哩一分
高雄マデ二百四十一哩

(臺北州七星郡汐止街汐止)

▲携帯品一時預 ▲入場券發賣 ▲仲賣 ▲呼賣

旅館 大阪屋

宿泊料 一圓二十錢—一圓八十錢

中食料 三十錢—八十錢

汐止街は、基隆市と臺北市との大體中間にある一市街で、基隆川は町の西を流れ、水陸交通の便に富む。この邊は粗製茶の製造が盛んで、毎年五月の交には、仲買人集合し、茶の取引が盛に行はれる。

人口 一七、二二七

官衙・會社 郵便局・商工銀行支店

線 貫 縦

た沃野をなし臺北市東方の門戸となつてゐる。市街は停車場を中心として東西に連り、最近、産業の興るにつれ煉瓦や防腐材の製造が行はれ、街勢の發展著しくなつて來た。

人口 一三、二三一八

官衙・會社 郵便局・臺灣煉瓦會社・基隆煉瓦會社
物産 煉瓦・石炭・瓦・竹細工・野菜・麵類・果實

交通機關

▲軌道 松山より南方三張梨に到る二哩餘の軌道がある、運賃は一人乗十五錢、約三十分
▲乗合自動車 汐止・臺北間を往復するものと、臺北・基隆間を運轉するものがある。賃銀は汐止迄二十錢、南港迄十錢、臺北驛迄十五錢、大稻埕まで二十錢
▲船版 基隆川により汐止、臺北間を往復するもので賃銀汐止まで十五錢、臺北まで二十六錢



耕 作



龍 骨 車 (漚 漚)



洗 滌

附近案内

▲媽祖宮 停車場の北二町、市街の中央にある。約百五十年前の創立で天上聖母を祀る。毎年舊曆三月二十六日に大祭を行ひ、附近よりの參拜者が多い。

▲木材防腐工場 停車場の東五町。内湖庄にある。工場の装置は、壓搾注入式を用ひ、規模も稍や大で一日枕木千二百本内外を注入することが出来る。

▲永春坡 停車場の東六町。周圍里餘の大貯水池で、四圍に丘陵起伏し其の千姿萬態が湖心に映り、風光の明媚なる昔から名がある。光緒年間、巡撫劉銘傳は、時々舟を此處に浮べ、その絶景を激賞してやまなかつた傳へられる。

▲成德學院 停車場の東十一町。本島唯だ一つの



張一の北門

臺北驛

(淡水線分岐點)

臺北州臺北市北門町(附)

線貫縦

感化院で、元西本願寺が創設經營したのを大正十年總督府の所管としたもの、現に數名の職員を置き、四五十名の兒童を收容してゐる。

▲療養所 停車場の東十九町。内湖庄にある。大正四年に創設せられたもので現に總督府の所管にかゝる本島唯一の肺患者收容所である。現在の患者は三十名内外である。

▲鷺山 停車場の北西一里二十町。内湖庄湖山脚にある。南面は二箇の小坡を距て丘陵を据へ、想思樹が茂つて風致に富む。毎年一月から十月頃迄、白鷺が群居するため此の名がある。殊に四五月ころは其の數最も多く、紛々として滿山雪の如き奇觀を呈する。

驛名	哩程	旅客運賃		
		一等	二等	三等
基隆	一七・八	四・一五	〇・八〇	〇・四五
新竹	四六・一	三・〇〇	二・〇五	一・一五
臺中	一〇一・八	六・六〇	四・六〇	二・五五
嘉義	一六四・二	一〇・六五	七・四〇	四・一〇
臺南	二〇二・五	一三・一五	九・一〇	五・〇五
高雄	二二一・三	一五・〇五	一〇・四〇	五・八〇

▲手荷物運搬 ▲携帶品一時預 ▲手荷物配達 ▲公衆電報取扱 ▲入場券發賣 ▲内臺間連絡扱 ▲自動車 ▲人力車 ▲仲賣 ▲呼賣 (辦當・壽司・檢査・濟)

乗降客數 三、二九七、三一七人
發貨物噸數 二六一、三三二噸
收 入 一、七三二、三五四圓

重要貨物數量

發 送 到 著
樟腦 五、二七一噸 木 材 一、二、八八四噸
酒 四、七三三噸 セメント 一〇、六五二噸

主要旅館 鐵道ホテル(表町)〔註〕吾妻(表町)〔註〕日の丸館(明石町)〔註〕朝陽號(本町)〔註〕

鐵道ホテル室料五圓乃至十六圓、朝食一圓七十五錢、晚餐三圓、晚餐三圓五十錢。

其他 宿泊料三圓五十錢乃至五圓、中食料一圓七十錢乃至二圓五十錢。

會食所 梅屋敷(北門町)〔註〕竹の家(大和町)〔註〕梅本(壽町)〔註〕日本亭(壽亭)〔註〕丸新(西門町)〔註〕花屋(北門町)〔註〕

乾隆の中葉(西曆一七二〇年代)には、都司を置かれ、嘉慶十四年(西曆一八〇九年)には、水師遊擊を駐屯せしむるに至つた。

當時、淡水河は水深く、船舶の出入に便であつた爲め、艋舺を中心として對岸貿易が行はれ、道光年間(西曆一八二〇年代)には、其の極盛時代を現出して、臺南・鹿港と相並んで「一府・二廳・三艋」と唱へられた。

然るに咸豐三年(西曆一八五三年)以後、先住泉州人と、後來の漳州人との間に、勢力の爭奪が行はれ、焚掠せられた八甲庄の泉民は、新に居を北方の原野に定め、一部落を立つるに至つた。是れ實に、大稻埕の起原である。爾後艋舺の隆運は之が爲めに頓挫し、殊に淡水河床が土砂で埋まつてからは、漸次船舶の出入が減り、次第に衰運を示すに至つた。之に反し大稻埕は漸く、泉人の來住するもの多く、自から、商業の中心となり、光緒十三年(西曆一八八七年)貿易港たる淡水港の一部と見做され、外人の來住するもの多く、各國の領事館も相踵いで、此の地に設けられ、創立以來五十年を出でないのに早くも、其の繁榮は艋舺を

鐵道ホテル(表町)〔註〕ライオン(公園内)〔註〕蓬萊閣(建成町)〔註〕江山樓(日新町)〔註〕

劇場 共樂座(壽町)〔註〕新舞臺(建成町)〔註〕永樂座(永樂町)〔註〕

活動常設館 新世界館(西門町)〔註〕第二世界館(西門町)〔註〕芳乃館(西門町)〔註〕第三世界館(太平町)〔註〕

沿革 此の地は、往古の所謂大加納堡の地で、康熙四十七年(西曆一七〇八年)泉州陳鎮章なる者が、官に請うて、開墾に着手したのが、實に臺北の始まりで、其の後、泉人の渡來するもの、漸次増加し、雍正年間(西曆一七二〇年代)に至つては、淡水河流域に據つて、一小部落を形成し、遂に艋舺の基を開いた。乾隆の初年(西曆一七二〇年代)には、漳州人の渡來するあり、林成祖なる者は、今の板橋を根據地として、主として淡水河以西を開拓し、郭元汾なる者は、新店溪一帶を開墾するに及び、艋舺は其の經營の中心地として重要な地點を占め、遂に、

堅するに至つた。

城内は、艋舺と大稻埕との中間に在り、其の起原は清の光緒四年(西曆一八七八年)臺灣府の設置に始まる。當時、艋舺の商人、洪祥雲・李清淋等は、業戶吳源昌より今の木町三丁目地を借り、店舗を築造し、大稻埕の張夢星・大龍廟の王慶壽等も亦た家屋を經營するに至り、人口次第に集中し、遂に一市街を形成した。其の後、光緒六年(西曆一八八〇年)知府陳星聚は、地方の豪族を勧誘し、二十萬兩を義捐せしめ、大いに城壁を築き、東西南北の四大門及び小南門を建て城内には官衙廟宇を造營し、市街を區劃して、民衆を招いた。次いで、光緒十一年(西曆一八八五年)劉銘傳が巡撫として來任したが、城内は尙ほ頗る寂しいのを見て之が繁榮策として、對岸支那から五萬元を募り、「興市公司」と稱する建物會社を創立し、石坊・西門及新起の三街を建て又た巡撫・衙門・西門街・新起街に電燈を點する等、大いに市街の發達に盡す處があつた。然し乍ら當時の臺北城内は、尙ほ、大部分は荒

蕪の状態を呈し、各所に水田が見らるゝ有様で寂寥の感なきを得なかつた。
明治二十八年、臺灣が我が版圖に入るや、總督府を此の地に設け、全臺灣の首都とし、同二十九年、先づ下水道を設けて、市街の衛生設備を整へ、同十二年市區改正の計劃を立て、街路及下水道の延長、淡水河岩壁の築造を完成し、城内を圍む城壁を撤去して代ふるに、三線道路を以てし、全く市街の面目を一新した。明治四十四年八月、未曾有の颱風の襲來に因つて、在來の本島人家屋の大半が破壊し去られたので、當局は之を機として、大英斷を以て、革命的の都市計畫を實施し、遂に、今日の宏壯なる市街を現出するに至つた。其の後、大正九年地方自治制度の實施せらるゝや、從來の城内・大稻埕・艋舺の三區及び附近部落を合併して、臺北市とし、新に市制を布き、大正十二年四月、町名を改正し、一市を六十四町名に區劃した。

臺北市大觀

臺北市は、臺灣の北部、臺北平原の中央に位し、面積二方里七分、臺灣總督府の所在地として全臺灣の首都である。本島北部の關門である基隆港へは、鐵路十八哩で僅か一時間足らずで行ける。市街は元の城内・大稻埕・艋舺三市街の集つたもので、現在でも尙ほ此の三區域は各その特異の色調をもつてゐる。即ち舊城内の地は主として内地人の居住者が多く、新領土の首都としての行政上、經濟上の諸機關は勿論、公園・圖書館、博物館なき各種の文化的な設備が行き届いてゐる。此の界限は大體に近代文明都市として他に多く類例を見ない立派な外觀を備へ、市街は煉瓦または鐵筋コンクリート造りの三層樓が軒を連ね、幅十間のアスファルトの坦道は市街を縱横

に貫通してゐる。市區の中央には二萬三千坪の「新公園」あり、市街を包圍する約二十五間または四十五間幅のリング・ガーデン即ち普通に言ふ「三線道路」には、遊歩道を設け、處々に圓形若くは半圓形の小公園を配し、その瀟洒たる感じは到底内地等に見られぬ光景で、東洋の小巴里と評した者もある。舊大稻埕・艋舺は、主に本島人の居住者が多く、中でも大稻埕は全市の商業區域であつて、本島重要輸出品たる米や茶の取引の中心をなし、家は概ね煉瓦造りで、大商店軒を並べ、城内に甚だ違つた異國的情趣を漂はし内地人の目には珍らしいもの、一つである。舊艋舺は今も萬華文字を改められ、市中最古の市街であるが、今は其の繁盛を大稻埕に奪はれて了つた。其の淡水河に

接する部分には、青樓旗亭なき構比して弦歌の聲が絶わぬ。

- 人口 一九一、一三五人
- | | |
|-----|---------|
| 内地人 | 五二、〇〇七 |
| 本島人 | 一二七、〇二二 |
| 外國人 | 一一、一一六 |
- 官衙 總督府(書院町)(註)、總督官邸(明石町)(註)、州廳(註)、市役所(註)、七星郡役所(以上樟山町)(註)、南警察署(樟山町)(註)、郵便局(京町)(註)、臺北醫院(明石町)(註)、高等法院(註)、地方法院(以上書院町)(註)、交通局鐵道部(泉町)(註)、交通局遞信部(書院町)(註)、專賣局(兒玉町)(註)、刑務所(福住町)(註)、武德會支部(註)、測候所(以上南門町)(註)、赤十字醫院(東門町)(註)、中央研究所(幸町)(註)、税關(港町)(註)、米國領事館(御成町)(註)、圖書館(註)、軍衙 臺灣軍司令部(書院町)(註)、臺灣第一守備隊(旭町)歩兵第一聯隊(旭町)(註)、山砲隊(旭町)(註)、憲兵隊(乃木町)(註)、衛戍病院(南門町)(註)

線 貫 縦

學校 醫學專門學校(東門町)(六) 高等農林學校(富田町) 高等商業學校(幸町)(六) 高等學校(富田町)(九) 第一師範學校(文武町)(七) 第二師範學校(大安) 工業學校(大安) 臺北商業學校(幸町)(六) 第一中學校(龍口町)(七) 第二中學校(幸町) 商工學校(幸町)(七) 第一高等女學校(文武町)(七) 第二高等女學校(幸町)(七) 第三高等女學校(西門町)(六) 靜修女學校(蓬萊町)(三) 女子職業學校(文武町)(七) 銀行 臺灣銀行(榮町)(七) 日本勸業銀行出張所(本町) 臺灣貯蓄銀行(本町)(七) 商工銀行(大和町)(七) 三十四銀行支店(本町)(七) 華南銀行(表町)(七) 彰化銀行支店(太平町)(七)

會社 臺灣電力會社(書院町)(六) 三井物產會社支店(表町)(七) 高砂麥酒會社工場(上埤頭) 建物會社(北門町)(七) 倉庫會社(泉町)(四) 臺灣製糖會社(臺北製糖所(綠町)(七) 日東製氷會社工場(上奎府町)(七) 近海郵船會社出張所(驛前)(七) 大阪商船會社

交通機關

社出張所(驛前)(七) 山下汽船會社支店(本町)(七) 臺北鐵道會社(新富町)(七)

鐵道 臺北鐵道は、臺北鐵道會社の經營に係り、本市の西端、萬華驛より起り、景尾を過ぎて、新店街に達するもので、臺北驛より連絡切符の發賣を爲してゐる。登橋迄二等二十二錢、三等十三錢。景尾迄二等三十七錢、三等二十三錢。新店迄二等四十九錢、三等三十一錢。

▲乗合自動車 近來臺北自動車會社が市内を大體十錢均一で運轉してゐる。臺北驛を起點として大稻埕の大橋行、御成町市場、宮前町を経て圓山動物園行(日曜祭日に限る)、西門市場、總督府、專賣局工場、千歲市場、錦町を経て古亭町登橋行、更に大橋より太平町・鐵道部・第三高女・祖師廟・萬華戲園・綠町市場・仁濟院等を経、淡水河岸の枋寮渡船場に到る線

線 貫 縦

等がある。市内の端から端まで乗つても二區分二十錢(古亭町圓山間は特に二十五錢)他は大抵十錢、少し遠くて一區半分の十五錢である。

此の外大橋・新店間の乗合自動車もある、臺北驛新店間三十五錢、臺北・基隆間も午前三回午後三回發車する。臺北の發着所は驛に近い本町二丁目發車は汐止迄三十錢、基隆迄五十五錢である。

▲貸切自動車 臺北自動車會社・巴自動車會社がある。大體の賃金は市内視光五圓、市内送迎一回二圓、市外は圓山迄二圓、往復三圓、士林迄二圓五十錢、往復四圓、松山迄三圓、往復五圓、北投迄五圓、往復八圓、新店迄五圓、往復八圓、草山迄十二圓、往復十五圓、淡水迄十圓、往復十五圓、基隆迄十五圓、往復二十圓。

▲人力車 賃金は、平道五町迄五錢、一町を増す毎に一錢を増す。尙ほ風雨・難路は二割増、夜間は一割増、暴風雨は倍額。停車場よりの運賃は左の通り。

到 著 地	賃 錢
臺北州廳前附近	六 錢
臺北醫院前附近	九 錢
測候所前附近	十二 錢
專賣局前附近	十六 錢
臺北中學校前附近	十九 錢
西門町市場前附近	十二 錢
古亭町派出所前附近	二十五 錢
水源地前附近	四十二 錢
川端町渡船場前附近	二十五 錢
本町三十四銀行前附近	五 錢
博物館前附近	五 錢
總督府前附近	十 錢
壽町榮座前附近	十一 錢
萬華驛前附近	二十四 錢
臺北製糖會社前附近	三十一 錢
鐵道部前附近	六 錢
新舞臺前附近	十二 錢

靜修女學校前附近	十六錢
北警察署前附近	十八錢
明治橋前附近	三十五錢
工業學校前附近	二十四錢
高砂麥酒會社前附近	二十五錢
第一聯隊前附近	十八錢
軍司令部前附近	十五錢
臺北監獄前附近	二十三錢
臺灣神社前附近	四十五錢

附近案内

▲鐵道ホテル(註) 停車場の前面三線道路を横切るに所謂城内である。ホテルは其の表町の入口に在る。煉瓦建三層造りの宏壯、美麗な建物である。總建坪六百二十有餘坪。庭園には、綠樹翁鬱とし、て茂り、三十二の客室は、何れも採光通風に留意し、設備の完備せる、歐風旅館である。事業は、

鐵道部監督の下に、請負經營せしめ、専ら旅客の利便を待遇の懇切を旨としてゐる。今、其の設備の一斑を示せば、階下には玄關に次ぐに大廣間を以てし、其の左方に喫煙室・待合室・グリルルームを設け、右方に球戯室・酒場・小食堂二箇を配し、小食堂の後方には、別館として餘興場があり、其れに隣つて、理髮室がある。玄關大廣間より、中庭を距て大食堂があり、二百五十人の宴會又は、五百人餘の立食場に充當するここが出来る。二階・三階の各室は、専ら宿泊に充てられ、即ち二階にありては、客室十六、外に廣間・喫煙室・圖書室があり、客室内、二階の特別室には、應接室及浴室を附屬せしめてゐる、三階は客室十六の外廣間等がある。

宿泊の方法は、歐・米兩式に依り、長期逗留の旅客

には、割引の方法を採つてゐる。宿泊料金は、略左の通りである。

室料 特別室十五圓乃至十六圓、普通室三圓乃至九圓。
食事料 朝食一圓七十五錢、晝食三圓、晚食三圓五十錢。

別に、グリルルームの設備があり、簡易に食事を取るここが出来るから、頗る經濟である。又、夏期にはホテルガーデンをも開設する。料理は和食の注文にも應じてゐる。

館内には、又、ジャパン・ツーリスト・ビュロー案内所があり、旅客の相談相手となつてゐる。

▲博物館(註) 停車場の南五町。臺北公園内に在る。希臘風ドリーツク式の宏壯な二層樓より成り、地下室が附屬せられてゐる。大正二年故兒玉總督。

後藤民政長官の記念事業として、建設せられたもので、陳列品は、臺灣に關する歴史上、文化上及び各種の學術上の資料を集め、總員數約一萬點に上つてゐる。其の内、地質・礦物に關するもの一千七百餘、動物に關するもの四千餘、その他六百餘點で、縦覽隨意である。最近一日の觀覽者は平均一千人に達してゐる。

▲臺北公園(註) 停車場の南五町。明石町に在る。俗に新公園と稱し、面積二萬三千餘坪、明治三十二年市區改正と同時に開設せられたもので、榕樹の翁鬱たる、椰子樹・檳榔樹林の亭々たる、遺憾なく、南國の氣分を發揮してゐる。園内には、噴水、花壇等を巧みに配置し、又博物館を初めとして、音樂堂・野球グラウンド等の設備があり、四季折々

線 貫 縦

の催が行はれる。故兒玉總督石像・後藤民政長官・柳生前臺灣銀行頭取の銅像も、又、園内に在る。

▲總督府廳舎 高塔天に聳ゆる近世復興式五層樓で建坪二千百、此の内には千名以上の人達が毎日事務を執つてゐる。明治四十五年から工事に著手、大正五年半成の廳舎を共進會場に充てたこともある。同八年三月全く竣工して舊廳舎から引移つた。建築設計は懸賞募集したものに更に意匠を加へたもので工費は二百八十一萬圓を費してゐる。大立關の壁畫は岡田三郎助氏、大會議室の壁畫は石川寅治氏の執筆に成つてゐる。

▲橢圓公園(註) 停車場の西南十五町。西門町に在る。城内ミ萬華ミを通ずる街路ミ、三線道路ミの交叉點に設けられた小公園で、橢圓形を成し、内

には綠樹を植ゑ、噴水を設け、前民政長官祝辰巳の銅像がある。

▲西門町市場(註) 停車場の西南十六町。橢圓公園の西側に在る。宏壯なる煉瓦造りの建物で、八角堂及び魚菜市場に分れ、市の監督の下に、前者は日用雜貨、後者は専ら魚菜を販賣せしめてゐる。

元來は衛生上の施設として設けられたのであるが、現在では、利用者頗る多く、立派な社會的施設となつてゐて、内外の視察團なき見舞ふ者が多い。構内には、稻荷神社があり、夜は露店軒を連ね、夜の臺北を彩る。

(註) 本島に於ける消費市場は其の初め置廳時代衛生的見地から廳長管理の下に公共衛生費を以て經營して來たが、地方制度改正と共に大正十年より市街庄に移管し、其の改善擴張を圖らしめ、物價の調節。



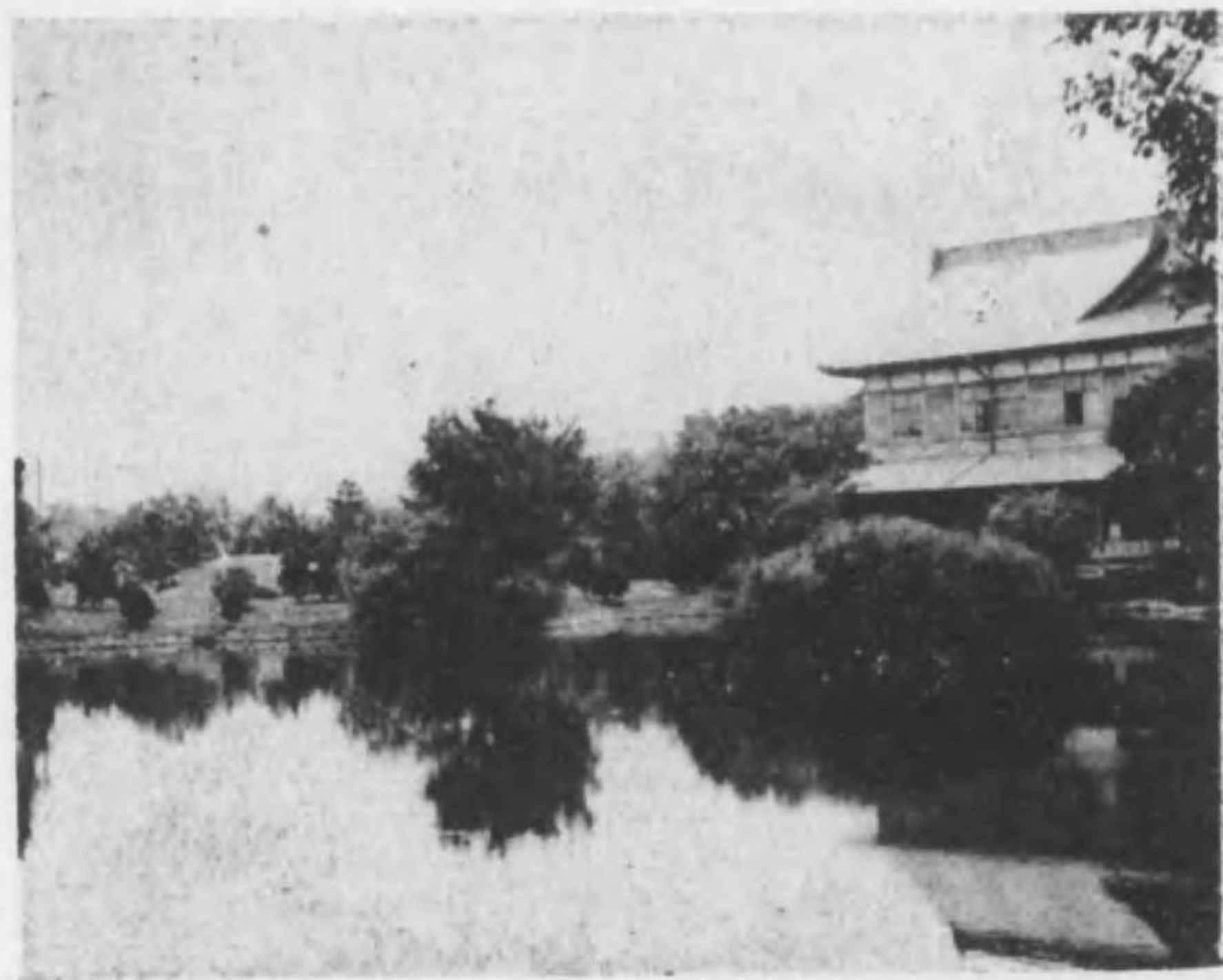
府 督 總 臺 臺



通 町 本 市 北 臺



像壽玉兒と部一の園公北臺



館ヲ陳品商と園物植北臺



部 道 鐵



場 車 停 北 臺



ル テ ホ 道 鐵

線 貫 縦

優良品廉賣等漸次社會的機能を發揚する様になつて來た、現在臺北市に於ける消費市場は此の西門町市場の外に永樂町・千歲町・御成町・綠町の四市場がある。

▲萬華界限 城内の西部にある一區廓で、其の南端に縦貫線の萬華驛がある。驛近くに萬華戲園(劇場)、驛の北一町には殖産局の所管たる植物検査所(モ)があり、内地移出の西瓜・柑橘類等の移出検査を行つてゐる。更に同驛の東三町に臺灣製糖會社臺北製糖所(モ)がある。白糖製造装置の工場で機械能力五百噸、最近一期の製糖高は千九百萬斤と言はれてゐる。龍山寺(モ)は萬華の中央部に位し萬華驛の北四町。清の乾隆三年(西曆一七三八年)の創建に係り、臺北市街中最古の建物であつたが、嘉慶二十年(西曆一八一五年)の震災に破壊され、現在の廟宇は、其の

後再建されたものである。閩の泉州安海の分派で、觀音佛祖を祀つてゐる。この外臺灣が産んだ彫刻家黃土水氏の彫刻した釋迦尊像が最近此の寺に安置された。萬華岸に當る淡水河畔の有明町界限には萬華遊廓があり、河に臨んで川船料理なごもある。夏は納涼客で賑ふ。大稻埕寄りの河岸は、萬華の入船町で、この邊一帶の河上にはボートも浮び舟遊びにも適する。淡水河の本流たる大嵙崁溪は源を遠く中央山脈次高山の北麓に發し、臺北附近に至りて、新店溪を合せて漸く大となり、市街の西を繞り、臺北平野を貫流して、江頭の峽を作り、淡水に至つて海に注いでゐる。實に臺北地方の發達は此の舟運と灌溉とに因つて培はれたのである。現在は、河床が上つて、大船の出入は不可能

臺北博物館



臺北圖書館



臺灣銀行



西門町市場



であるが、淡水との間に小蒸汽船が往復し、尙ほ、
 戎克船・舢舨等の往來が頻繁である。萬華より引返
 して市の南端にある植物園(は)に入る。臺北停車場
 の南十九町、南門町に在る。園内頗る廣く、林泉
 の美を備へ、景趣愛すべきものがある。この植物
 園は、元苗圃と言つて、殖産局に屬し、熱帯各種
 の苗木や草花類の養成試験を行つてゐるが、最近
 總督府中央研究所の所管に轉じ、植物園と改稱さ
 れた。臺灣産の樟楠木・樟大杉・油杉等の有用樹、
 檳果・パンの木等の珍奇なる果樹類を初めとし、藥
 用・染料・香料・油脂用植物の各種類を網羅し、其の
 數四百有餘に達してゐる。園内の迎賓館は、大正
 五年共進會の際建設せられたもので、閉會後殖産
 局の手に移され、商品陳列館と爲し、本島各種の

生産品を蒐集し、一般の縦覽に供し即賣をもやる。
 園内には、又、武徳會支部がある。

▲專賣局 臺灣總督府專賣局は市内兒玉町一ノ五
 にあつて他に比し特色とする所が多い。專賣は阿
 片・食鹽・樟腦・煙草・酒の五種であるが、阿片及
 び樟腦工場は局の直ぐ前に、煙草工場は上奎府町
 に臺北酒工場は郊外近く樺山町にある。この中で
 は阿片の專賣が一番古く明治二十九年からで之に
 依つて阿片癮者を漸禁しやうとするものでゼネツ
 アの國際阿片會議に於ても臺灣の此の制度が最も
 適切であるといふ讚辭を得た位だ、即ち阿片中毒
 に罹つてゐる者だけに鑑札を下けて特許し之地
 方廳の特許した取次人を経て阿片烟膏を賣下け、
 新たには一切吸食を許さぬ。阿片烟膏の値は百匁

入一罐一等四十圓三等三十圓である。
 食鹽は明治三十二年から專賣とし島内産業を振
 興させ今日では鹽田二千數百甲(一甲は約一町歩)
 に達し二億數千萬斤の産出を見、内地以外朝鮮・
 樺太・露領沿海洲・香港・マニラ等へ輸移出する。
 樟腦は明治三十二年より專賣となり天然樟腦と
 して世界的に名を馳せたが、今は獨逸の人造樟腦
 と競争する立場となり專賣收入上からも脅威を蒙
 るに至つた。
 煙草は明治三十八年以來專賣とし内地製・外國
 製・本島製の三種あり本島産中ジャスミン等は好
 評を博してゐる。
 酒の專賣は新しく、大正十一年から實施された
 が其の成績に就いては各方面から注意されてゐる

る。矢張衛生保健の見地から創めたもので酒類は
 島内産・内地製品及び支那や西洋各地からの輸入
 品に別れてゐるが本島人間には蒸餾酒たる米酒が
 中以下に愛用され、紅酒が中以上に最も多く用
 られてゐる。ビールだけは未だ專賣になつてゐな
 い。
 ▲古亭町河畔 臺北驛の南約三十町。淡水河の上
 流に在る。納涼觀月に好く、名物の鮎があり、茶
 店・旗亭等所々に散在し、夏期は涼み舟を擡して、
 一夕の涼を逐ふことも出来る。
 ▲水源池 停車場の南一里九町。新店溪の右岸、
 蒼鬱たる小丘を負うて、臺北水道の水源池がある。
 新店溪の水を電力にて吸ひ上げ、大淨水池を作り、
 臺北全市に供してゐる。土地高燥、前面は臺北市

街を一瞬の内に收め、背後は新店溪の清流を脚下に俯瞰するここが出来る。萬華驛よりは臺北鐵道によるここが出来る。

▲中央研究所農業部 停車場の南一里十五町。市内富田町に在る。本館・附屬館・試験室等より成り、又高等農林學校附屬園がある。元の總督府農事試験場であつて、専ら農法改良の試験調査を行ひ、傍ら農事の指導改善に當つてゐる。萬華驛より、臺北鐵道によるのが便利である。

▲高砂麥酒會社工場 停車場の東十九町。上埤頭に在る。大正八年の創立に係り、資本金二百萬圓、原料は直接獨逸より供給を仰ぎ、一箇年の生産額は約五萬圓に達してゐる。

▲住宅地大正町 北投溫泉行き汽車の發着する

大正街驛附近にある臺北有数の住宅地で、一條より九條まで街區整然としてゐる。御成町には米國領事館・大正町市場なごあり、附近の三橋町には内地人共同墓地あり、乃木將軍遺髮碑(三)明石總督墓地(同)等がある。

▲大稻埕見物 淡水線の雙連驛は大稻埕東北隅の門戸をなしてゐるので茲で下車するに近い。附近には北警察署(三)私立靜修女學校(三)蓬萊公學校(三)日新公學校等がある。尙ほ淡水河に架せられてゐる大橋は大稻埕の近代的名物となり、景趣や夏の納涼なごに於て秀でてゐる。城隍廟(三)は停車場の西十三町。永樂町に在る。本尊城隍爺は、幽界の守護神として、本島人の尊崇篤く、毎年六月十二日より同十四日に亘り、大祭を行ふ。當日は全

市の各町からは音樂團・詩意閣・旗旛・巨大な將軍人形なごの催物があり、其の趣向を競ふので、臺北の近在は勿論、遠く新竹邊よりも參詣する者多く、其の數一日數萬を算し、大稻埕・萬華一帶は、身動きも出来ない程の雑踏を呈する。

其の他大稻埕見物に於て特色あるものは、支那芝居である。劇場としては新舞臺(建成町)永樂座(永樂町)なごあり、年中大抵何かやつてゐる。俳優は主に支那から巡業に渡來する一座で、臺辭は北京官話を以てするので、之を知らぬ大多數の本島人は、唯だ身振りなごを見て筋を察する外ない。上場されるものは史劇が多く武人の大立廻はりなごが喜ばれるが、艶ものも出る。この演劇の特色は、耳が痛い程に強烈な管絃が劇と一緒に奏

せられることで、初めて観る人には頗る堪へない事もある。然し觀なれ聴き慣れると、なか／＼面白ものである。

▲圓山附近 臺北驛から淡水線一哩八分の處に圓山驛がある。臺北市附近では唯一の遊覽地で、殊に日曜・祝祭日なごには市民の出て遊ぶものが多し。圓山運動場は圓山驛の東南一町。臺北市々營の大運動場で、坪數二萬三千餘坪。場内の西側にコンクリート造の觀覽席があり、約二千餘の觀覽者を收容するここが出来る。大正十二年、皇太子殿下の行啓を記念する爲めに創建せられたもので、當時殿下の御臺臨遊ばされた所である。鎮南護國禪寺は同驛の東一町。故兒玉總督が開基せられたもので、其の境内にある石器時代の大砥石は

珍とするに足る。附近一帯は先住民の遺跡として著名である。忠魂堂は鎮南護國禪寺に隣し、圓山公園の山麓に在る。征臺の役に薨去せられた北白川宮殿下を始め奉り、以下將卒七千有餘の英魂を併祀したものである。圓山公園は停車場の北五町。元、土豪、陳維英が別荘を建て太古巢と稱せし所で、鬱然たる丘陵は基隆川の深潭を距て、大直山に對し、園内、巖石層を成し、噴水あり、飛瀑あり、又初代民政長官水野遵氏の銅像がある。圓山動物園は圓山公園内に在る。市營で面積一萬五千坪、獅子・象・虎・豹・鰐等を初めとし、熱帶産の禽獸は殆ど網羅されてゐるが、現在の飼養動物は百有餘種で其の員数は二百數十に上つてゐる。その中で臺灣特有の動物は、

臺灣熊・高砂豹・番犬・白眉心水鹿・臺灣花鹿・麝仔・臺灣猿・野猪・穿山甲・野鷄・山鷄・竹鷄・尺八鳩・山娘・金腹・小鷺

なごである。園を出て明治橋を渡る。劍潭寺がある。圓山驛の北八町。臺灣神社の南麓、基隆川の右岸に在る。明末、鄭氏の時、此の地を開拓した漢人が、觀音菩薩を祀つたもので、寺廟は、乾隆年間(西曆一七二七)に創建せられたが、朽廢甚だしく、最近工費十萬圓を投じて、廟宇を重修した。支那建築らしい色彩絢煉の美は遠くからも眼をひく。結構壯麗、輪奐彫刻の美を極め、本島人の廟宇としては、代表的のものである。

▲臺灣神社 圓山驛から北東九町。圓山公園より北行し、明治橋から對岸の大直山を登ること數町

北白川宮富子殿下

此の島のあらむ限はかやかむ

名も高砂の神のみいづは

▲大龍岫保安宮 停車場の西北六町。大龍岫町に在る、保生大帝を祀る。

▲芝山巖 淡水線士林停車場の北東十四町。草山道路の左方平原中に孤立せる丘陵で、其の形ち圓きに因り、一に圓山子とも稱せられてゐる。全山岩石より成り奇峭削るが如く、苔蒸し古木生ひ、閑雅の境地である。丘上にある學務官僚遭難碑は明治二十八年、土匪の手に死せる學務部員六名を記念するものである。

▲草山温泉 士林停車場の東北二里二十町。自動車・輜の便がある。七星山ミ紗帽山ミの溪谷を占

にして達する。本島唯一の官幣大社で、大國主命・大己貴命・小彥名命の三柱一座に故北白川宮能久親王殿下の英靈を奉祀する。社殿は明治三十四年の創建に係り、同十月二十七日鎮座式を挙げ、故殿下の御命日たる翌二十八日を以て大祭を執行し、爾後毎月二十八日を月例祭とし、毎年十月二十七日・二十八日を以て大祭を行つてゐる。境内は高燥且つ幽邃の地であつて、大直山の青槽を負ひ基隆川の碧潭に臨み、臺北平原を一眸の中に收め、臺北市街は、歴々として指呼の間に在る。神燈幾十級、宮柱太しく、葺神さびて社殿の莊嚴なる、神威自から身に迫るものがある。最近臺灣八景の選定に當つては別格『神域』として推稱され、新高山と共に本島雙絶の一に數へらる。

め、紗帽の山の圓い形は箱根の雙見山にも比すべく風致がよい。泉質は硫黄泉で、湯量豊富である。大正二年、公共浴場設置以來、漸次浴客を増加し、先年 聖上東宮に在せし當時行啓の光榮に浴してより、昔く世に知らるゝに至つた。郵便局・貴賓館・警察官吏療養所等を初めとし、旅館、別荘等の設備を完備してゐる。自動車貸切六人乗臺北より十二圓、北投より八圓である。乗合自動車は臺北より一圓二十錢。朝夕二回通うてゐる。

旅館 巴旅館・若草屋・多喜の湯・公共浴場

宿泊料 一圓二十錢乃至四圓

中食料 四十錢乃至一圓五十錢

▲北投温泉 島都の生活が之に依つて可なり惠まれ慰められてゐる。こゝは何人も異議のない所であ

る。臺北より汽動車で三十八分にして達するこゝが出来る。同温泉は、清の光緒二十年(西曆一八九四年)獨逸の商人オーリーなる者が發見したもので、温泉に三種ある。一は單純泉無色透明無味無臭、弱アルカリ性の反應を呈し、赤褐色の沈澱物を含んでゐる。即ち俗に鐵の湯と稱するもので、公共浴場の湯が之れに屬する。二は鹽類泉、無色透明、無臭であつて酸味と收斂性がある。俗に瀧の湯と稱するもので、松濤園の湯が之れに屬し、三は俗に星の湯と稱するもので、單純泉、無色澄明、臭味なく、弱アルカリ性の反應を呈する。即ち、階行社の湯が之れである。現在、浴場は公共浴場を初めとし、浴場・温泉宿數十軒の多きに達し、四季浴客絶ゆるこゝなく、全島第一の保養地且つ遊

樂境である。その中の公共浴場は停車場の東二町。洋式の瀟洒な建物で、浴場及休憩室より成り、休憩室には更らに娛樂室を作り、其の設備は遺憾なく完備してゐる。浴場は、臺北州の管理に屬し、入場料は、一日大人二十錢、小兒十錢、入浴のみ希望者は大人五錢小兒三錢である。

▲北投草山の勝 北投より瓦斯を噴出してゐる大小地獄の間を上げれば頂北投の温泉場あり、之より草山に至る沿道亦風景絶佳で將來一大遊園地たる地である。『臺灣十二勝』の一つ。

▲ゴルフ・リンクス 淡水線の終點驛淡水には約七萬坪に及ぶゴルフ競技場あり、ゴルフ倶楽部も建設中で日曜祭日等には、臺北及び附近の官民紳士連雑踏し、ゴルフ競技に熱中する。臺北よ

り十四五哩、土地高燥で景色もよく別天地を成してゐる。

▲新店街 臺北鐵道の終點で文山郡役所の所在地新店溪の右岸に位し、蕃界交通の咽喉を扼し、人口四千五百。郵便局・登記所・臺灣製腦會社出張所等がある。蕃界へ入るには此の郡役所につき入蕃許可證を貰はねばならぬ。此の地は乾隆年間(西曆一七二二年)より漸次發達し、光緒十一年(西曆一八八五年)屈尺に撫臺支局を設置するや、其の要路として繁榮するに至つたが、明治四十四年及大正十三年の大洪水の爲めに、市街の大部分を破壊され、復た、昔日の面影を窺ふこゝが出来ないが大正十四年護岸工事の竣成を見、漸次回復の氣運に向ひつゝある。附近は所謂、山紫水明の境地で、新店溪に臨む新店碧潭

線 貫 縦

最も名高く、巨巖屏風の如く碧潭にそばだつころ、月に佳く花によい。『臺灣十二勝』の一である。水泳場の設備があり、旗亭も一二あつて、新鮮な鮎を食膳に上せて呉れる。此所より臺北市川端町まで約三里の間、深潭あり、激流あり、肝を冷しつ、舟を行は頗る痛快である。夏期所謂『川下り』と稱して船を浮べ川端町または萬華まで下る。納涼によい。一舟十人乗五圓乃至七圓。屈尺は新店街より約一里半。戸數百戸に満たざる小市街であるが、清の光緒十一年蕃地統治上の要地として、撫臺支局を置かれた歴史がある。村上の峻坂は伸丈坂と稱し、後藤前民政長官が屈尺に對して命名したものである。尙ほ新店街が新店溪に臨む一帯は風光頗る明媚で、新店赤壁の稱もあり、

最近臺灣十二勝の一に選まれ新店碧潭として舟遊に佳い。臺北より乗合自動車で四十分（賃金三十五錢）で行ける。
▲蕃地見物 臺北附近から比較的近い處で蕃地を見學しやうとするには溫泉もあるし烏來へ行くが宜しい。但し交通が尙ほ完備しないから數里を徒步するの覺悟がいる。烏來溫泉は新店より四里。烏來社に在る。南勢溪の沿岸に湧出する炭酸性礦泉で、腸・胃・瘡に效がある。附近にはラハウ・リモガン・阿玉等の蕃社があり、同所には物品交換所・蕃童公學校等も設けられてゐるから、蕃情を充分視察することが出来る。警察官吏駐在所・公共浴場・臺灣製腦會社出張員駐在所・旅館烏來館等がある。新店より轎に乗れば約三時間、賃金は二人



部支灣臺社字十赤



院 醫 北 臺



廳 州 北 臺

線 貫 縦

昇片道二圓七十錢、往復五圓四十錢。

萬華驛

基隆より十九哩四分
高雄まで二百二十九哩七分

(臺北州臺北市新富町)

▲手荷物運搬 ▲携帶品一時預 ▲入場券發賣
▲自動車、人力車 ▲仲賣

旅館 山一旅館

宿泊料 一圓又は五圓

交通機關

▲臺北鐵道 臺北鐵道會社の經營に係り、此の地を起點とし、登橋・公館・景尾の諸驛を経て新店に達してゐる。水源地・中央研究所農薬部・新店街に至るには、此の鐵道に依るのが便利で運賃は、登橋迄一哩二分、三等八錢、二等十二錢。公館迄二哩八分、三等十二錢、二等十八錢。景尾迄四哩三分、三等十八錢、二等二十七錢。新店迄六哩五分、三等二十六錢、二等三十九錢。



古亭庄河畔



臺北水源地



臺北水源地の遠望

▲軌道 臺灣製糖會社の經營に係り、萬華堀江町より起つて西行し、板橋を経て頂埔に達してゐる。板橋迄一人乗普通賃金二十錢、所要時間三十分。頂埔迄五十二錢、所要時間約一時間二十分。二等は五割増、一等は十割増。
▲乗合自動車 萬華大稻埕間を往復する。運賃は十錢均一。小兒半額。
▲人力車 賃金は臺北と同様で、停車場よりの運賃は左の通り。

到 著 地	賃 錢
臺北驛前附近	二十四錢
西門町市場前附近	十三錢
警官練習所前附近	六錢
萬華分署前附近	七錢
臺北製糖會社前附近	十錢

板橋驛

自基隆二十二哩六分
至高雄二百二十六哩五分

(臺北州海山郡板橋庄)

▲携帶品一時預 ▲入場券發賣 ▲仲賣

板橋庄は、海山郡役所の所在地で、本島人は今尚ほ板橋と呼ぶ、大崙溪に沿ひ、豊饒な平野を占め、農産物に富む。住民には地主富豪多く、瀟洒たる小市街を成し、本島の富豪、林本源の居住地として聞わてゐる。附近には、亦、炭坑多く、石炭の搬出盛んである。

人口 一七、二四三人

官衙・會社 郡役所・郵便局・彰化銀行支店

交通機關

▲軌道 臺灣製糖會社の經營に係る板橋軌道は萬華龍山寺前より起り、此の地を経て南土城に、南西、頂埔に達してゐる、萬華迄三哩一分三等一人乘二十錢、

所要時間約三十分。土城迄二哩五分、同二十一錢、頂埔迄五哩、同四十二錢、所要時間五十分。又枋寮軌道は本街より起り東枋寮に達してゐる。枋寮迄二哩七分一人乘普通運賃十六錢、所要時間約三十分。

▲乗合自動車 此の地を基點とし萬華を経て臺北橋間を往復する乗合自動車がある(途中淡水河渡舟)

運賃萬華迄十五錢、臺北橋迄二十五錢。

▲人力車 賃金平路五町五錢、以上一町を増す毎に一錢。但し風雨・難路二割。夜間は一割増。

物産 野菜・線香・米・石炭

附近案内

▲林本源庭園 停車場の西四町にある。島内隨一の名園で、林家五房の住宅地を加へる其の總面積三甲(約三町)歩に及び、昔は板橋庄の大半を占めてゐたものだ。この庭園を築造した人は林家を

大成せしめた林維源氏で、道光末年(西紀一八一八)即ち林家の黄金時代に成つたものと言ふべく、材料や職人などは總て支那から取り寄せ或は呼び寄せ、前後三年の年月を経して出来上つたもので其の總工費は五十萬圓に上つたといふ。純東洋式の庭園で規模廣大、技巧の優秀完美なる専門技術家をして三款せしむるものがある。五歩に一樓、十歩に一閣といふ風で眞に阿房宮の壯麗さを偲はせる。奇岩怪石を疊み池には舟を浮ぶべく、眺望の爲めの高い陸橋は、園内を長蛇の如く走る廻廊に連なり、宏壯なる建物には定靜堂以下來青閣、田植を見る觀稼樓、圖書館たりし汲古畫屋及び舞臺等あり、實に善美を極めてゐる。外廓は塀を廻らし一城廓の體を爲し昔は平時でも數百の衛兵が之を守つて

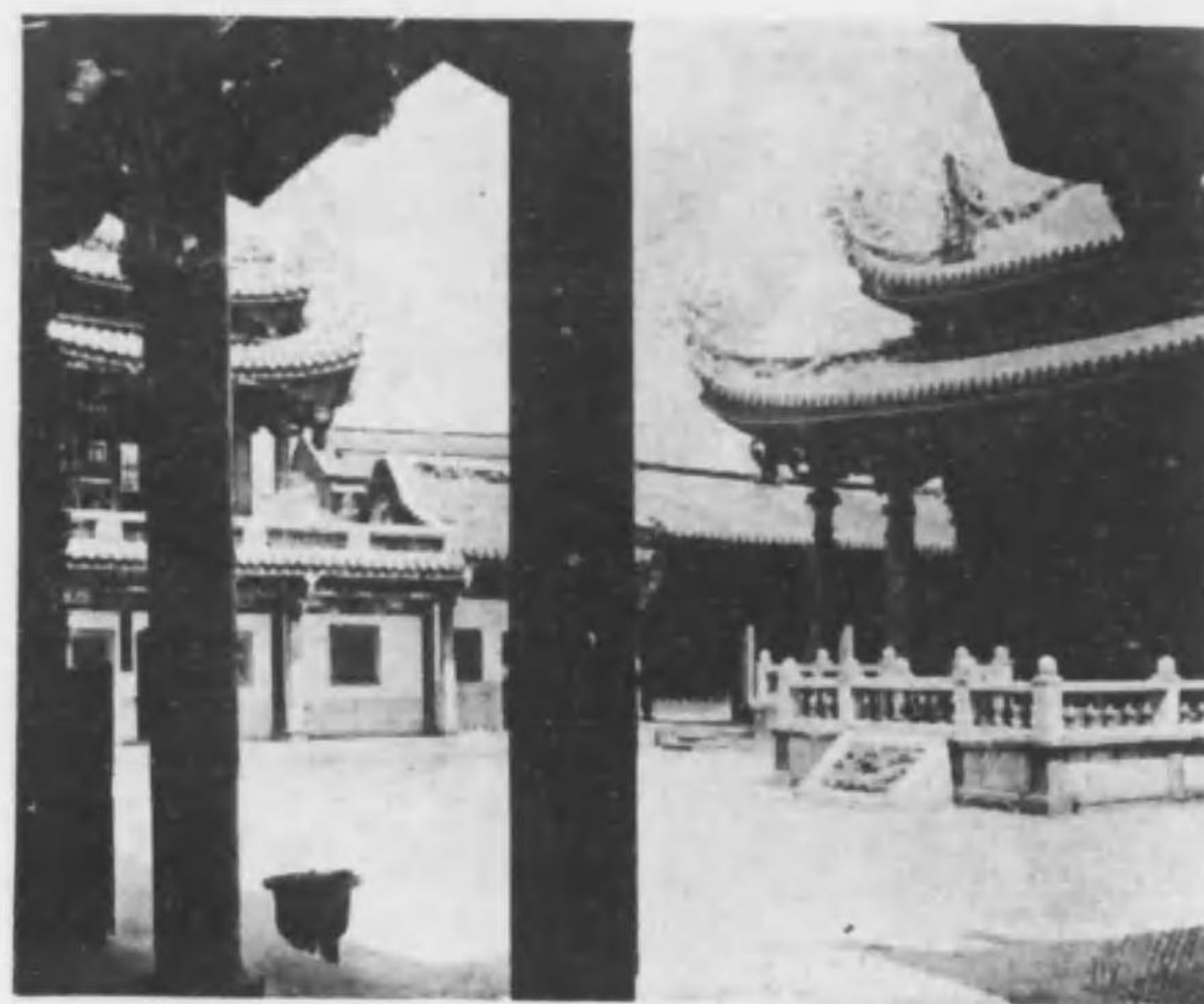
ゐたものだといふ。

上流の家庭生活

林家庭園の一隅に林家五房の住宅があるから、之を一例として上流家庭の生活様式を紹介しよう、同所には五人の兄弟の爲めに五棟の大住宅を五列に並べて造つてあるが、各棟の構造は大同小異て其の様式は本書冒頭「臺灣人の生活様式」中で説明して置いた通り、正面中央に廳堂あり、此の左右に控室、廳堂の背後に更に一室あり、支度部屋若くは化粧室とも言ふべく、此の室の左右にも一つ宛の控室がある。之が一房の主人妻子だちの部屋である。之と並んで裝飾其の他の設備は落ちるが、構造は全然同じに造つてある。部屋が左右に幾つかある。是等にはソレ／＼一族肉身の家族が住み、全く大家族主義に集團生活をなしてゐる。この横に長い一棟の家屋の前庭には美しく色彩等を施した舞臺がある。何か祭等のある場合は、此處で芝居等をやり大家族が全部集つて和樂し談笑する約束になつてゐるのである。

▲林本源 この序でに林本源家の事を少し紹介する。林本源とは飲水思源即ち諸事本源を忘るゝ勿れといふ文字から取つた家號である。臺灣に於ける林家の始祖は林平侯で支那福建省龍溪縣の人、父應寅が臺灣へ来て新莊郡新莊に居をトし書房を設けてゐた當時、平侯は十八歳で渡臺、米商に従ひ、のち鹽館を営み一代に數百萬の巨富を得、全島第一の富豪となつた。其後歸國し廣西省柳州府の知事たる事數年再び歸臺したが、三貂嶺を越える宜蘭街道の如きは平侯が此の當時開いたものである。林家が板橋に居を定めたのも平侯の時で、同時に彼は精神的方面にも新開拓を爲すべく、當時支那一流の文人學者で書家たる呂世宜(西村と號す)、畫家謝瑄樵、文章家葉東谷を招來し臺灣文化の爲に盡さしめた、次代の林維源に至り臺灣學撫大臣光祿寺大夫侍郎の顯官に任じ、生蕃討伐に従ひ鐵路協辦大臣ともなり、時の巡撫劉銘傳督辦を助けて鐵道敷設に當つた。この頃林家の財産は數千萬圓に達し正に黄金時代を現したので、

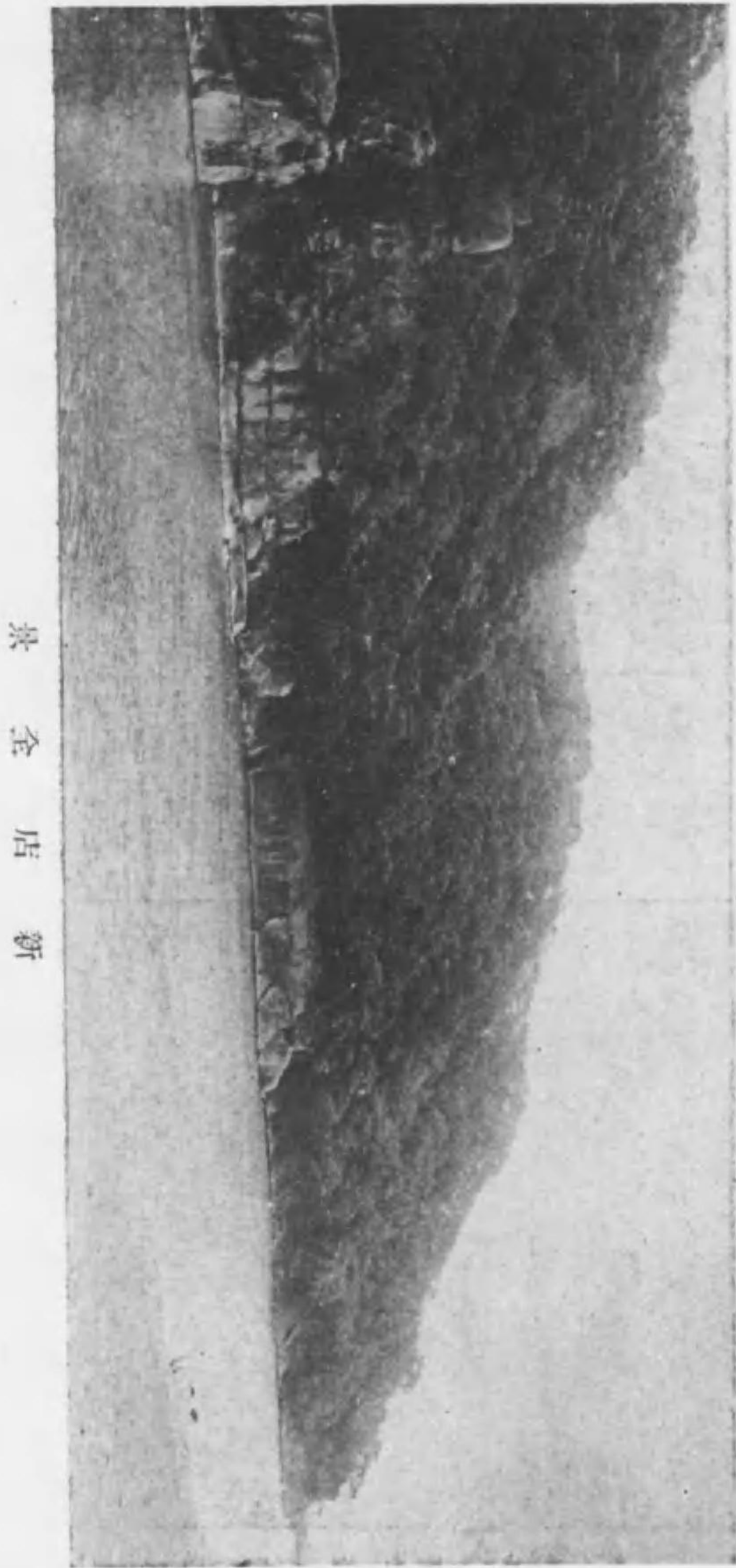
板橋の庭園を築く外、義田を寄附し學校其の他社會事業を興し、板橋は當時文化の中心となつてゐた。
▲新莊街 停車場の北約二十九町。大嵙崁溪の對岸に在る。此の地は、臺北地方最古の市街で、乾隆三十二年(西紀一七九七)八里坌巡檢を此の地に移し、同五十五年(西紀一八〇〇)縣丞に改め、爾後光緒元年(西紀一八七五)淡水縣を設くる迄、縣署の所在地として、地方の首都を成してゐた。領臺後、明治三十四年、臺北廳に屬し、新莊支廳が置れたが、大正九年新莊郡役所に改められ、今尚ほ地方の中心地として、郡役所の外、郵政局・商工銀行出張所等がある。人口一萬九千百餘。
臺北市大稻埕より臺北橋を通ずる道路があり自動車・人力車に依る事が出来る、大稻埕から新莊迄は乗合自動車賃金二十五錢。



龍山寺



烏來溫泉



新 店 全 景

樹林驛

基隆より二十五哩五分
高雄まで二百二十三哩六分
(臺北州海山郡鶯歌庄彭福)

▲携帶品一時預 ▲入場券發賣

彭福は、鶯歌庄の一部で、一に樹林と呼ばれてゐる。市街は、驛前より東西に連る一條の街衢より成り、西端に專賣局酒造工場がある、附近一帯の地は、大崙炭溪に近く灌漑の便に富み、農産物の産出多く、又附近に信和炭坑・明山炭坑等がある。

本島酒の話 本島人は酒を相當に好み、内地酒をも飲むが、今尙ほ本島固有酒をより多く好む、臺灣の固有酒と言へば、玄米・甘藷・甘蔗汁・糖蜜・高粱等を原料とし之に白糴を加へ醱酵させた蒸餾酒及び之に紅糴その他の原料や漢藥を以て加工した混成酒即ち再製酒であつて、前のを白酒と言ひ、後のを紅酒・藥酒

その他原料の名を冠してゐる。今日一番多く造られるのは玄米を原料とする糖蜜酒、甘藷を原料とする蕃薯酒、泡盛及び是等を原料として再製又は混製した紅酒、藥酒であつて、高粱酒や紹興酒は産額が極めて少い、米酒は粳米を炊いて糴を混じ水を加へて醱酵させた醪を蒸餾したもので、味ひ淡泊、値も安いので普通本島人間に愛用されてゐる。高粱酒は臺灣で出来る酒の中酒精含有量の一番多いもので、品質の佳いものはウキスキーに似た風味をもち、本島酒類中で最も内地人の嗜好に適し、其の値も安くはない、臺灣でも上流社會でないと飲まない、紅酒は再製酒の一種で、本島人の冠婚の式場には缺く可らざるものである。其の色は製造當時は紅色を呈してゐるので此の名がある。然し貯藏長きに互ると淡褐色となり恰も内地の清酒に近い色と風味とを生じ老紅酒として最も賞美される。

尙ほ樹林停車場の北十町餘に在る潭底坡は、鴨

鳴等の銃獵地にして知られ、南方十町餘の大嵯炭溪には鮎・鯉等の漁利がある。

山子脚驛

基隆より二十七哩九分
高雄まで二百二十一哩二分

(臺北州海山郡鶯歌庄山子脚)

山子脚は、鶯歌庄の一部で、北は小龜崙の峻峯を仰ぎ、南は大嵯炭の清流に接し、其の間にある狭小な地域を占めてゐる。有名なる十二股圳の取入口があるに因り、俗に斗門頭と稱へられてゐる。明治三十四年頃より、本島炭業の發展に伴ひ、附近の石灰坑・蓋炭坑等が漸次採掘せられ、俄然住民を増加し、小部落を形成してゐる。停車場の南數町、大嵯炭溪には、鮎・鯉等の漁利に富んでゐる。

鶯歌驛

基隆より三十哩七分
高雄まで二百十八哩四分

(臺北州海山郡鶯歌庄鶯歌)

▲携帶品一時預 ▲入場券發賣
附近は鶯歌庄の西半に位し、一帯の地は大嵯炭溪の流域に沿つてゐるが、丘陵其の間に隆起し、平地は比較的少く、茶・木材・土器等の産出がある。附近に渡邊炭坑・鶯山炭坑等があり、石炭の搬出が盛んである。

物産 石炭・瓦・土器・木材・茶・樟腦・桐油

交通機關

▲軌道 海山輕鐵會社の經營に係り、鶯歌驛前より起り、西、中庄に達し、東、三峽・成福を経て大寮地に達してゐる。中庄迄三哩四分、一人乗普通運賃二十四錢、所要時間三十五分。三峽迄三哩二分、同十七錢、所要時間三十分。成福迄五哩九分、同四十一錢、所

所要時間約一時三十分。大寮迄六哩九分、同四十七錢、所要時間二時間。一等運賃倍額、二等は五割増。
▲乗合自動車 大鷲自動車會社の經營に係る、此地より大溪郡大溪街に至る乗合自動車及び貸切自動車の便がある。賃金一人五十錢、貸切一臺金五圓。

附近案内

▲鶯歌石 停車場の西七町。鐵道線路の右方の山腹に聳立つ一大巖石で、其の形、恰も、鶯(臺灣鷹)の將に鳴かんとするに似て居る爲め、此の名がある。桃園廳志に、「人若し、此の石に觸るれば、殃忽ち至り、惡疫流行し、地方必ず其の祟を被る」と云ひ、又た口碑に「鷹石常に毒霧を吐き、瘴氣天を蔽ふ。二百年前、鄭氏の部將、其の首を斬り、毒霧忽ち霽れ、復瘴氣の患なし」と傳へられてゐるのは、即ち此の石であつて、車窓より望見する

ここが出来る。

▲三峽庄 停車場の東三十二町。軌道によれば約三十分にて達する。大嵯炭溪と三角湧溪との合流點に當り、地形三角形をして居る爲め、嘗て、三角湧と稱へられてゐたが、大正九年、現名に改稱せられた。此の地は、領臺當時、大溪と共に猛烈な土匪の反抗を受け、我が將卒五十名の戦歿した古戰場で、市街は其の際兵火にかゝり、全滅したが、其の後、再び、舊に復し附近交易の市場として、稍繁盛なる町を成してゐる。

▲遊漁地 附近の山野は到る處小鳥多く、又た三角湧・大嵯炭兩溪は、鮎の本場として知られてゐる。

▲成福庄 停車場の東二里十五町。軌道の便があ

る。

桃園驛

(新竹州桃園郡桃園街)

驛名	哩程	旅客運賃		
		一等	二等	三等
基隆	三五八	二三五	一六〇	〇九〇
新竹	一八〇	一一五	〇八〇	〇四五
新中	二八一	一八五	一三五	〇七〇
臺南	八三八	五四五	三七五	二一〇
高雄	一八四五	二〇〇	八三〇	四六〇
高雄	二一三三	一三八五	九六〇	五三五

▲手荷物運搬▲携帶品一時預▲手荷物配達▲入場券
 發賣▲内臺間連絡扱▲仲賣▲呼賣(辨當・西瓜)
 旅館 桃園館・惠比壽屋
 宿泊料 一圓二十錢乃至三圓
 中食料 五十錢乃至一圓五十錢

會食所 花屋

桃園街は、元の桃園廳の所在地で、臺北より汽車で十八哩、桃園平原の門戸に當り、附近物資の集散地であると共に、大溪街に至る要路を占め、取引盛んに行はれ、新竹州下に於て、新竹街に次ぐの市街であり、現に桃園郡役所の所在地である。市街は、停車場より一直線に、西走する本街の終端に於て横に延びた二條の横街により、略略十字形に開展し、各街には街路樹茂り、瀟洒たる市形を成してゐる。殊に、停車場から市街に續く道路は、幅員十二間の坦々たる大道で、街路樹と共に幽遠な感を與へてゐる。此の地は、清乾隆十年(西曆一七五五年)蔣啓隆なる者が初めて開墾に著手した所で、當時彼等の移植した桃樹が繁茂して、紅雲

搖曳の狀を呈し、桃子園の名は之から生じたのである。

人口 一九、四三九人 (内地人 七六九人、本島人 一八、五八三人、外國人 八七人)

官衙 郡役所・郵便局・稅務出張所・桃園大圳事務所・農業倉庫
 銀行・會社 臺灣銀行出張所・彰化銀行出張所・商工銀行出張所・桃園軌道會社・東亞興業會社・星製藥會社・桃園工場・臺灣合同電氣會社營業所
 物産 米・茶・木藍・苧麻・石炭・松丸太・野菜

交通機關

▲軌道 桃園軌道會社の經營に係り、桃園を起點とし、南は八塊・大溪を経て角板山に西は、埔子を經て竹圍に達し、埔子よりは、更に、大園に至る支線を分ち、又、西北は南嶽に東は遠く新莊郡新莊街に達してゐる。南嶽迄四哩六分、一人乗普通運賃三十六錢、所

附近案内

▲景福宮 停車場の西五町。中南街に在る。天上聖母及開漳聖王を安置したもので、嘉慶年間(西曆一八〇〇年)の創建に係り、廟の規模壯麗で、彫琢の美を盡し、

聯額等の珍奇なものが尠くない。例祭は、毎年舊三月十三日より二十七日迄、十五日間に互つて行はれる。

▲大溪街 停車場の南西三里二十四町。軌道によれば約二時間、自動車によれば三十分にして達する。臺北方面からは鶯歌驛より自動車で行くが便利である。市街は大嵙崁溪の碧潭に臨み、斷崖削り立つ臺上に在つて、背後に連山を背ひ、前面大嵙崁溪の流域を俯瞰し、眺望頗る雄大である。臺灣八景につぐ『十二勝』として最近其の選に入る。此の地は清の乾隆の初年、漢人謝秀川なる者が開發に著手した所で、同二十年頃(西曆一七五五年)には、陳合海・江蕃等に依り市街が建設され、後光緒十二年(西曆一八八六年)巡撫劉銘傳此の地を以て北蕃統轄の策源

地となした。爾後山地には製腦業起るあり、平地には田園次第に開け、米・茶等の産出は逐年増加するに至つた。現に大溪郡役所の所在地で、角板山に至る要路を占め、附近物資集散の市場として、人口二萬五千六百有餘を算してゐる。郡役所の外に郵便局・商工銀行支店・製腦會社出張所・大溪產業會社・東瀛物産信託會社等がある。旅館に千山園・清涼軒・花屋等がある。

▲大園庄 停車場の西北三里二十七町。軌道の便がある。此の地は、元大坵園たいまきと稱し、往古は對岸廈門・福州よりの船舶寄港地として繁榮してゐたが、今は衰頹して昔日の面影を偲ぶべくもない。
▲石門 大溪街より、大嵙崁溪を遡ること三里。峻峻なる小峯を越え、蕃界に接する地點に石門の



大 溪



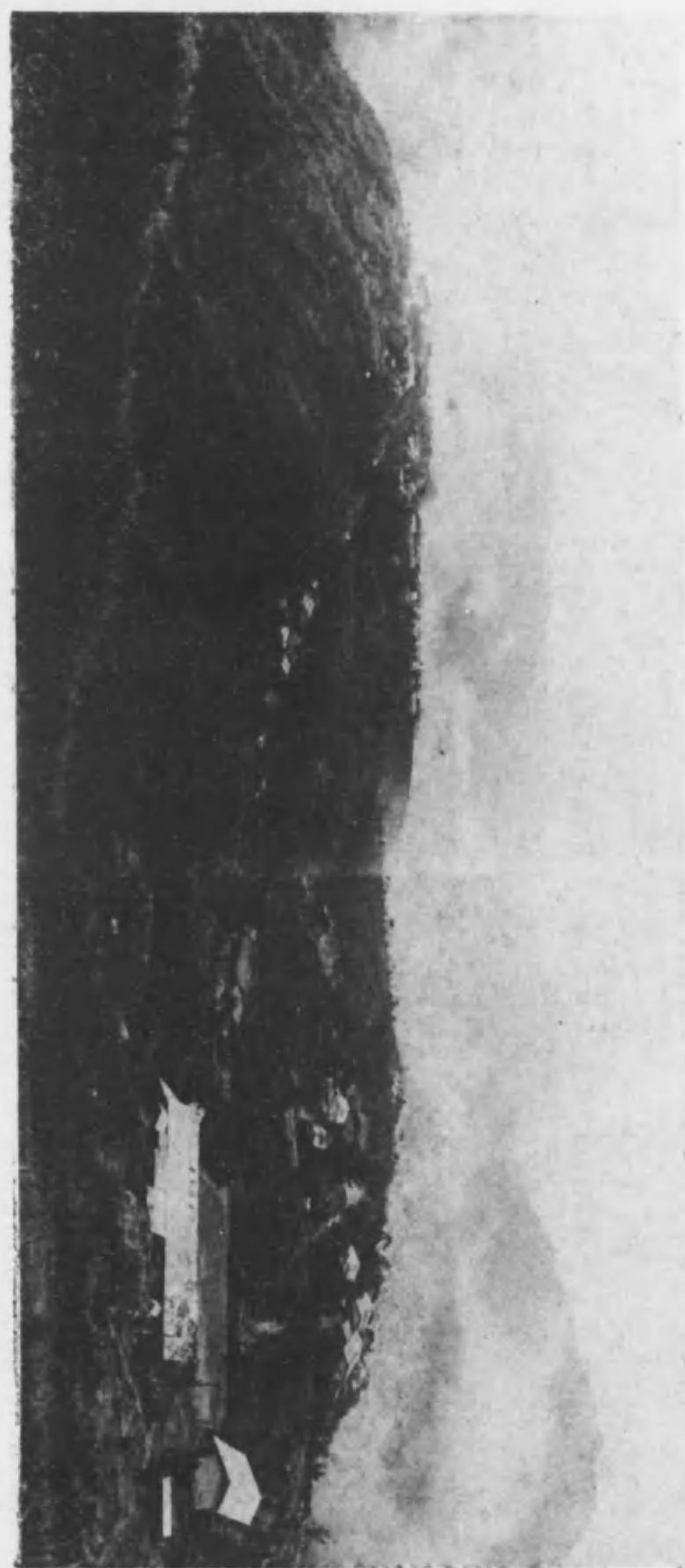
茶 摘



茶 撰

奇勝がある。幅三十尺、高五百尺の巨巖が高く吃立して、其の頂上に吊橋を架してある。一に大竹橋おほいたけと稱し、延長六十間、人之れに乗れば、搖々として動き雲に乗り風に御して、恰も仙宮に遊ぶか如く、四圍の風光に對照して身の俗界に在るを忘れさせる。

▲桃園埤たうけん 桃園埤は、桃園高原約三萬二千甲歩の田畑に灌漑し、之を完全なる二期作田たらしめんとする水利事業である。臺灣に於て頗る發達してゐるのは此の灌漑事業であつて、之には官設の公共及び私設あり、嘉南大圳の如きは官設の最も大なるもので桃園大圳之に次ぐ。桃園埤は大嵙崁溪たいかまの水を其の上流石門に於て取入れ、溪の右岸に沿つて延長約十二里に互り隧道・暗渠・開渠



三 峯 岳

を穿つて灌漑水を桃園附近に導き、之に幹支線の給水路延長六十五里餘を新設し、田畑を灌漑してゐる。工事に著手したのは大正五年で、水路の幹線支線分線及び貯水池一部の改良工事等は政府が自ら之を爲し、在來埤池の改良や埤池以下の小給水路は埤圳組合に於て施行し其の總經費一千四百餘萬圓に及んでゐる。大正十四年完成を見たので、新竹州下桃園附近一帯は、昔々全然趣きを異にする迄に良田が續くやうになつた。

▲角板山見物 停車場の東南九里十七町。大溪街より桃園軌道により、羊腸たる山路を登ること、約六時間にして達する。海拔二千百尺、大嵙崁の上流を俯瞰するテーブル・ランド即ち臺地を占め、近く南に烏嘴山、東に挿天山さかてんざんを控へ、遠く、西南

には、大霸尖山の雲表に聳ゆるあり、營に理蕃上
險要の地たるのみならず、風光の雄大を以て聞け、
『臺灣十二勝』の一に数へらる。高臺上は稍廣く、
貴賓館・薰風館・警察官吏派出所・郵便局出張所・蕃
童教育所・物品交易所・三井合名會社出張所・製腦
會社收納所等があり、物品交易所では、珍奇な蕃
産物を、廉價で購入するこゝが出来る。附近には、
又、蕃人の耕作田等があつて、蕃情を視察せんこ
する者の見逃すべからざる所である。旅館に北代
館がある。

茨子脚驛

基隆より三十九哩四分
高雄まで二百九哩七分

(新竹州桃園郡桃園街茨子脚)

茨子脚は、桃園街の南端に在る小部落で、一帯

の地は沃野開け、想思樹の防風林や、村家を圍ん
だ竹林等が、此所彼所に散點し、靜な農村の風情
が窺はれる。

中壠驛

基隆より四十一哩九分
高雄まで二百七哩二分

(新竹州中壠郡中壠庄石頭)

▲携帶品一時預 ▲入場券發賣 ▲呼賣
中壠庄は、桃園街より鐵路六哩。中壠郡役所の
所在地で、市街は郡の東北端に位し、舊街及新街
の二街より成り、附近物資の集散地にして、取引
盛んである。新街には古來鐵工多く、農具の製作
を以て聞けてゐる。

人口 二〇、三五三人

官衙・會社 郡役所・郵便局・登記所・商工銀行出張所・
日本拓殖會社・中壠軌道會社。

物産 米・茶・繭・錫・豚・生鳥

交通機關

▲軌道 中壠軌道會社の經營する中壠軌道は驛前を起
點とし西に觀音、西南は龍潭、南は新屋に達してゐ
る。龍潭迄六哩八分、一人乗普通運賃四十五錢、所
要時間一時半。觀音迄十一哩二分。同七十九錢、所
要時間約一時間。新屋迄八哩、同五十六錢、約一時
間。桃園軌道會社の經營する更寮脚、青埔軌道は此
の地より西北に青埔に達し、東北に霄裡を経て更寮
脚に達し、桃園・大溪間の本線に連絡してゐる。青埔
迄四哩七分。一人乗普通運賃三十四錢、所要時間四
十分。霄裡迄三哩一分、同二十三錢、所要時間四十
分。更寮脚迄五哩四分、同三十九錢、所要時間約一
時半。

▲乗合自動車 此の地から龍潭に至る乗合自動車の便
あり、一日十二回、定時に運轉してゐる。運賃龍潭
迄四十錢、往復七十錢。尙貨切自動車は龍潭迄四圓。

附近案内

▲人力車 賃金一里四十錢、雨天・難路は各二割増。

▲轎 賃金二人昇一里六十錢、三人昇一里七十五錢。

▲青裡淡水養殖試驗場 停車場の東一里四町。中
壠より桃園軌道によれば、約四十分にして達する。
本場は、本島唯一の淡水魚の養殖試驗場で、主
して、魚族の試験調査を行ひ、傍ら鯉魚及「マラリ
ヤ」の媒介となる蚊の「ボウフラ」を喰ふ「タツブミ
ンノオ」の養成配布をやつてゐる。試験地面積は、
水源用溜池を合して、約一萬六千餘坪。池數五十
六箇を算し、飼養魚族は、鱒魚・草魚・鯉魚等を
初めこし養殖魚として利用し得べきものは、殆ん
ど網羅されてゐる。

▲石觀音 停車場の北四里十八町。軌道の便があ

る。此の地は、元一寒村に過ぎなかつたが、咸豊年中(西暦一八七〇年)一農夫が、溪流中より佛像に似た自然石を發見し、辻堂を造つて、之を奉祀してより以來、來り賽する者多く、石觀音の名を生ずるに至つた。今の甘泉寺は、當時の辻堂を再建したもので、明治二十八年、佛像發見の箇所に靈泉湧出し、其の味甘く、諸病に效ありと傳へられ、因つて、此の寺號を生じた。今尙ほ、本島人の信仰厚く、遠近參拜する者が尠くない。

平鎮驛

基隆より四十五哩五分
高雄まで二百三哩六分

は、別に中龍軌道に依つて、中壠庄に通じ、關西庄からは、關石軌道が東方石門に通じてゐる。龍潭迄四哩三分、一人乗普通運賃三十一錢、所要時間一時間。三坑子七哩一分、同五十二錢、所要時間一時間半。關西十一哩、同八十八錢、所要時間約二時間半。▲轎 賃金二人昇一里五十錢、三人昇七十錢、二人昇備切一日約四圓。

附近案内

▲製茶工場 停車場の東一町。今は三井合名山林部の所有にかゝり、工場には電氣動力を装置し、専ら紅茶の製造に當り、一箇年の製茶額は約四十萬斤に達してゐる。

臺灣の茶業 臺灣の茶は古い歴史があり、同治六年(西紀一八六七年)には既に其の輸出量は二十萬五千斤に達したが、其の後の發達は益々急速度を加へ今日では本島輸出貿易中最重要なものゝ一つとなつた。

(新竹州中壠郡楊梅庄草埔坡)

▲携帶品一時預 ▲入場券發賣

平鎮驛は、楊梅庄草埔坡にある。附近一帶は製茶業の盛大を以て知られ、平原丘陵、悉く茶園ならざるなく、殊に陽春の候、妙齡の本島婦人が茶摘歌を高らかに歌ひつゝ、茶摘む風趣は、宇治の茶摘みを聯想せしめる。中央研究所茶樹栽培試驗所・臺灣拓殖製茶會社出張所等がある。

人口 六千七百四十二人

官衙・會社 郵便局・中央研究所平鎮茶樹栽培試驗支所
物産 茶・蜜柑

交通機關

▲軌道 關西軌道は、此の地より起り、龍潭・關西・新埔の諸庄を経て、紅毛驛に達してゐる。龍潭庄から

主な栽培地は臺中州以上で、新竹、臺北の二州が最も盛んである。茶樹の種類は、烏龍、黃柑、白毛猴、時茶及び雜種であつて、年中摘採されるが、各季節の産額は、春茶四十四・五、夏茶二十七・八、秋茶十八・九、冬茶八乃至十の割合である。大正十三年の作付面積は四萬七千餘甲、收穫量は二千六十二萬餘斤に達してゐる。製茶の種類は、烏龍茶と包種茶とを主とし、他に僅少の紅茶・綠茶を産する。烏龍茶は、茶葉を半ば醱酵させたもので其の性質は、完全に醱酵させた紅茶と、全く醱酵させぬ、綠茶との中間にある。製造順序は、先づ農家で摘んだ茶を天日に乾し日乾萎凋をなし、更に室内萎凋を行ふ。室内の萎凋は要するに茶を醱酵させるものであつて、烏龍茶特有の芳香を發するに至る譯である。のち揉んで乾燥させたものが粗製茶で、之を山方から臺北大稻埕に運び茶棧・茶館等の再製家の手に渡し、之を更に選別して爐に掛け約八時間乾燥するのである。包種茶は、春秋兩期に最優良品を擇み、烏龍茶よりも約

一二週間遅引して摘採するもので、大體に製造の手續は烏龍茶に等しいが其の程度を幾分異にしてゐる。要するに包種茶は烏龍茶に比し酸酵の度が少いものである。この包種茶には更に黃枝花、秀英花、茉莉花等の香花を混じて薰香をつけ風味をよくする。

▲中央研究所平鎮茶樹試驗場 停車場の東十五町。總督府中央研究所の所管で茶樹の栽培試驗の傍ら、本島産各種製茶の試製をやつてゐる。

▲龍潭庄 停車場の南一里半。關西軌道によれば約四十分にして達する。此の地は、乾隆の初年頃から開發せられた市街で、附近の貨物集散の中心市場たるのみならず、中壠・關西・大溪・平鎮に至る諸道路は、皆、此の地より起り、所謂四通・八達

の地で、製茶の産出が多い。郵便局・東南拓殖會社

等がある。

▲龍潭坡 龍潭庄の西方に在る。周圍二十町水深十餘尺。常に、碧波を堪へ、池中には菱が多い、此の大坡は、乾隆十二年(西曆一七四七)地方灌溉の爲め、生蕃の通譯係だつた知母六が開鑿したもので、明治二十八年林本源之を重修し、附近の田園百餘甲を灌溉して尙ほ早る、こみなし云はれてゐる。

▲關西庄 龍潭庄の西南に當り、軌道の便がある。此の地は、元咸菜礪稱してゐるが最近現名に改められた。柑橘・茶等の産地として知られ、市況稍殷盛であつて、郵便局・公學校等がある。

楊梅驛

基隆より四十八哩一分
高雄まで二百一哩

(新竹州中壠郡楊梅庄楊梅)

▲携帶品一時預 ▲入場券發賣 ▲仲賣 ▲呼賣(初茸)

楊梅庄は、中壠郡の南端、銅鑼圈高原を縦斷する丘陵地を占め、市街は、庄の東南にある。北西

の新屋・大波、南方の新埔方面を初めとし、近くは中壠・平鎮・龍潭等に對する物資の供給地として、商況稍活氣を呈してゐる。

人口 二〇、九〇四人
官衙 郵便局
物産 米・茶・豚・鶏

交通機關

▲軌道 楊梅鐵道公司の經營に係る手押軌道は、楊梅より起り、西新屋を經て炭頭厝に達してゐる。延長一〇哩六分、運賃新屋迄一人乗四十二錢、時間四十分。炭頭厝まで同七十七錢、時間一時間半。
▲乗合自動車 楊梅・平鎮間、楊梅・大坡間、楊梅・龍潭・關西間。楊梅・炭頭厝間を運轉する定期乗合自動車があり本線列車と接續運轉してゐる。平鎮迄

十錢、時間二十分、大坡迄四十二錢、時間四十五分。龍潭迄三十五錢、同四十分。關西迄七十錢、同約一時間十分。

▲轎 賃金二人昇一里四十錢、三人昇同五十錢、二人昇備切一日四圓。但し、一日は七里を限度とし、以上一里に付三十錢乃至五十錢増。

附近案内

▲茸狩 附近の丘陵には松林多く、十月頃より三月頃まで初茸が簇生する。丘上の見晴も極めて美しい。

湖口驛

基隆より五十四哩四分
高雄まで百九十四哩七分

(新竹州新竹郡湖口庄)

湖口庄は、新竹郡の東北端に位し、西端は、鳳山溪を隔て、舊港庄と境し、東北は、楊梅・新屋の兩庄に接し、一帶の地は、廣闊な高原地帯を成し

てゐるが、灌漑の便を缺く爲め、池水を以て、纔かに、灌ぐの有様である。

物産 米・茶・果實・鶏・豚

交通機關

▲自動車 湖口・圓山子間を往復する乗合自動車の便がある。賃金十錢、所要時間十五分。

▲轎 賃金二人昇一里六十錢、三人昇一里七十五錢。

附近案内

▲陸軍演習廠舎 停車場の南十町。丘陵の中腹に在る。附近は高臺を成し、眺望廣陵である。

紅毛驛

基隆より六十哩二分
高雄まで百八十八哩九分

(新竹州新竹郡紅毛庄紅毛)

▲携帶品一時預 ▲入場券發賣 ▲仲賣 ▲呼賣

紅毛庄は紅毛田溪・鳳山溪との間に介在し、西

半は概ね沃野を成し、東半は山岳起伏し、柑橘類の栽培に適してゐる。此の地方は、始めて和蘭人の開拓したのに因み、元紅毛田と稱せられてゐた。停車場は、數歩にして舊港庄豆子埔に接してゐる。豆子埔は、新埔・關西に至る要路に當つてゐる。

物産 米・柑橘類・茶・木炭

交通機關

▲軌道 關西軌道は平鎮より起り、龍潭・關西・新埔を経て、此の地に終つてゐる。新埔迄四哩三分、一人乗普通運賃三十五錢、所要時間一時間。關西迄十一哩八分、同九十五錢、時間約三時間。一等運賃は倍額。

▲乗合自動車 此處から新埔を経て關西に至る乗合の便がある。到着列車毎に連絡運轉する。新埔迄三十

附近案内

▲鳳山崎 停車場の東二十町。所謂新竹八景の一たる鳳山崎晚霞の地で、日暮、鳳山溪を隔て、遠く連山を觀望するの景趣は、捨て難いものがある。

附近案内

▲義民廟 停車場の東二十四町。林爽文及び戴萬生の亂に戦没した郷勇の靈を合祀したもので、毎年舊七月二十日祭典を行ひ、苗栗以北の各地より、參詣者集り、頗る雜踏を極める。

▲舊港庄 停車場の西二里。

▲新埔庄 停車場の東二里。軌道によれば、約一時間にして達する。元の新埔支廳の所在地で、人口二萬一千五百餘。郵便局・小學校・公學校等があ

る。此の地は、柑橘類及び茶の産地として知られ、就中、新埔蜜柑は、粒も大きく甘汁も多く風味の良いので有名である。

臺灣の蜜柑 その體験で美味なことは何人も激賞する所であつて、バナナが今日の様に果實市場を壓倒しない先は、實に柑橘類が本島果實界に覇を唱へてゐたものである。種類としては椪柑・桶柑・雪柑等がある、その他では文旦・斗柚などそれ／＼に賞美される。椪柑は本島柑橘類の第一位をしめ生産期は十一月から一月頃までである。其の芳香と甘酸適度の味は最も誇りとする所であつて、臺中以北に良品を産し、殊に臺中州員林と新竹州の新埔とが最も名がある。雪柑も前者と同じ頃に收穫されるが恰度「ネーブル」の様な味をもち内地や對岸支那方面の需要が多い。桶柑は後れて二月から三月頃に生産され、主とし臺北地方から出る、其の甘味に富むこと貯蔵に耐へること等の點で市場に於て優勢である。斗柚類は全島

普く生産を見るが特に文旦は臺南州麻豆、斗柚は同州西螺産が名高い。現に麻豆文旦は皇室へ献上品となつてゐる。

柑橘類の栽培は昔は山間の瘠地を利用して自家用的に栽培し、其の規模も小であつたが、近來移出が有望になつたので平地の畑に栽培するやうになつた。その方法も大いに向上して來て最近の栽培面積は二千八百甲、その收穫高は百五十八萬餘斤である。

新竹驛 (新竹州新竹郡新竹街)

驛名	哩程	旅客運賃		
		一等	二等	三等
桃園	二八・一	一八五	一二五	〇七〇
臺北	四六・一	三〇〇	二〇五	一四五
臺中	五五・七	三六〇	二五〇	一四〇
基隆	六三・九	四一五	二九〇	一六〇

彰	彰化		彰
	南	雄	
高	一五六四	一八五二	一七〇
臺	一〇一五	一一〇五	三九〇
彰	四四〇	八三五	四六五

▲手荷物運搬▲携帯品一時預▲手荷物配達▲入場券發賣▲公衆電報取扱▲内臺間連絡扱▲臺東線連絡扱▲自動車▲人力車▲仲賣▲呼賣(辨當・蜜柑・葡萄)

乘降客數 一、〇〇〇、九四六

發貨物噸數 四六、五八八

收 入 三八九、一四五・八七

銀行 臺灣銀行支店(南門) 商工銀行支店(西門)

郵便局 新竹郵便局(南門)

旅館 塚酒家支店・田中屋

宿泊料 二圓乃至三圓五十錢

中食料 一圓乃至一圓七十五錢

會食所 塚酒家・喜樂・榮久・八千代

劇場 新竹座

沿 車 新竹地方は、北部臺灣中最も古く開拓された所て、其の開發は、遠く、約三百年前の昔に遡ること出来る。往古は、平埔蕃族「テグチャム」社の在つた地て、永曆三十六年(西紀一七〇九年)北蕃の反亂に乗じ、竹塹蕃と共に、鄭氏に反抗したが、左協理陳綿之を討平し、王世傑なる者、其の戦功に依り、此の地の開墾を許された。これが地方開發の創めて、當時の墾田は、今の新竹街を中心として、附近數百甲の廣きに達し、漸次、移住者を招來するに至つた。其の後、永曆三十八年(西紀一七〇九年)鄭氏亡び、清國の版圖となるや、之を、福建省に屬せしむるに及び、潭泉地方の僱民の本島に流入するあり、此の地方も康熙末年より雍正の初年に互り、著しく發展し、遂に、原住蕃人を驅逐し、附近一帯を占有した。雍正元年(西紀一七二三年)淡水廳開設せられ、次で雍正十一年(西紀一七三三年)には、竹塹城を築き、爾後百五十年間、廳治の府として、實に北部臺灣に於ける、文教の中心であつた。然るに、光緒元年(西紀一八七五年)臺灣府治の變革に際し、淡水廳を

廢し、新に、治府を臺北に定むるや、此の地は、單に新竹縣の所在地として、新竹城と改稱せられ、次第に、衰微するに至つた。領臺後、明治二十八年四月、新竹支廳を置き、同三十一年辨務署に改め、更に、同三十四年新竹廳を設置せられた。其の間、大に市區の改正を行ひ、市街の面目を一新し、最近廳を改め州と爲し、新竹州廳の外、臺北地方法院支部、新竹少年刑務所等が設置せられ、加ふるに各種企業の勃興に伴ひ、市況も次第に殷盛を來たしつゝある。

新竹街は、本島の首府臺北を距る四十五哩、新竹州廳の所在地であつて、北部臺灣有數の都會である。市街は南北に長く、東西に狭く、東・西・南・北の四門街及び同外街・旭町等に分れ、就中、東門街は市街の中樞として、北門街は商區として、共に般賑なる街衢を成してゐる。旭町は最近に出來た市街で、停車場から州廳に至る目拔きの場所を

占め、新式で宏壯な家屋が際立つて目立つ。蘆草は此の地の特産で年額五萬斤に上り、内地は勿論遠く歐洲方面にも輸出してゐる。

人口 三七、三五四人 (内地人 三、九五七人、本島人 三二、九七三人、外國人 四二四人)

官衙・學校 州廳・郡役所・街役場・醫院・臺北地方法院支部・新竹少年刑務所・中學校・高等女學校

會社 新竹電燈會社・臺灣製糖會社出張所・東洋木材會社・臺灣拓殖製茶會社・帝國製糖會社製糖所

物産 米・茶・苧麻・樟腦・腦油・蘆草・魚介・果實

蘆草の産 蘆草は殆ど本島獨特の産物で、北部や中部の蕃地に野生する五加科に屬する灌木で凡そ二千尺内外の山地に繁植する。蘆草紙は此の樹を適當の長さで切り、髓分を突き出し之を外面から蠟施狀に截りのばして薄片としたものである。従來この蘆草紙は造花用にしたに過ぎなかつたが、更に活動紙として葉書、名刺、短冊、式紙、カレンダー等に加工さ

交通機關

▲私設鐵道 帝國製糖會社經營の新竹湖口線は此の地を起點とし、溪州・麻園・坑子口の諸驛を経て波羅紋に達してゐるが別に溪州よりは紅毛を経て下山に至る支線を分つてゐる。延長六哩八分運賃波羅紋迄二十錢所要時間一時三十分。

▲軌道 新竹軌道會社の經營に係り、新竹街を起點とし、東西に分れ、東は竹東街を経て、内灣に達し、竹東よりは、南、北埔庄に分岐し、西は新竹西門街に於て分れ、一つは南行して浸水に達し、一つは西行して舊港に終つてゐる。後者は舊港の手前から更に分れて、南寮ヶ濱に達してゐる。浸水迄三哩六分、一人乗普通運賃二十七錢、所要時間約三十分。舊港迄四哩五分、同三十四錢、時間約四十分。南寮ヶ濱

迄五哩二分、同三十九錢、時間約五十分。竹東迄九哩、同七十三錢、時間約一時二十分。北埔迄十三哩六分、同一圓十錢、時間約二時三十分。

▲乗合自動車 新竹驛・竹東間を運轉するもので、自動車三臺を以て、一日十二回定時に運轉してゐる。運賃は竹東迄七十錢である。

▲人力車 賃金一丁に付市内一錢五厘、市外一錢。暴風・雨天・夜間は各二割増。停車場よりの運賃は

郡役所・市場・新竹寺・小學校 八 錢

新竹醫院・州廳・新公園・竹蓮寺 十 錢

塚廻家・製糖工場 十五 錢

新竹神社 二十五 錢

牛埔派出所 三十五 錢

附近案内

▲新竹公園 停車場の東三町。街の東方の郊外に在る。最近の開設に係り眺望の美しい小丘に據つてゐるので、休憩場・運動場等の設備も備はり、園中

の池では釣魚することも出来る。

▲帝國製糖會社新竹製糖所 停車場の北十町。水田庄に在る。機械能力六百五十噸、最近一期の製糖高は、約八九百萬斤である。

▲新竹神社 停車場の南三十町。松嶺山の頂に在る。松嶺山は、明治二十八年八月八日、北白川宮殿下が近衛師團の精銳を率ゐさせられ、御露營の夢を結ばせ給ふた御遺跡地で、殿下の御偉功を偲び、併せて、その御徳を追慕する餘り、特に、此所に臺灣神社の御分靈を奉祀したものである。境内森嚴新竹街を脚下に俯瞰し、遠く一帶の平原を距て、碧波を望み、風光絶佳の境地である。神社の東方には、故宮殿下が征旆を駐めさせ給ふた爽吟閣といふ立派な建物がある。

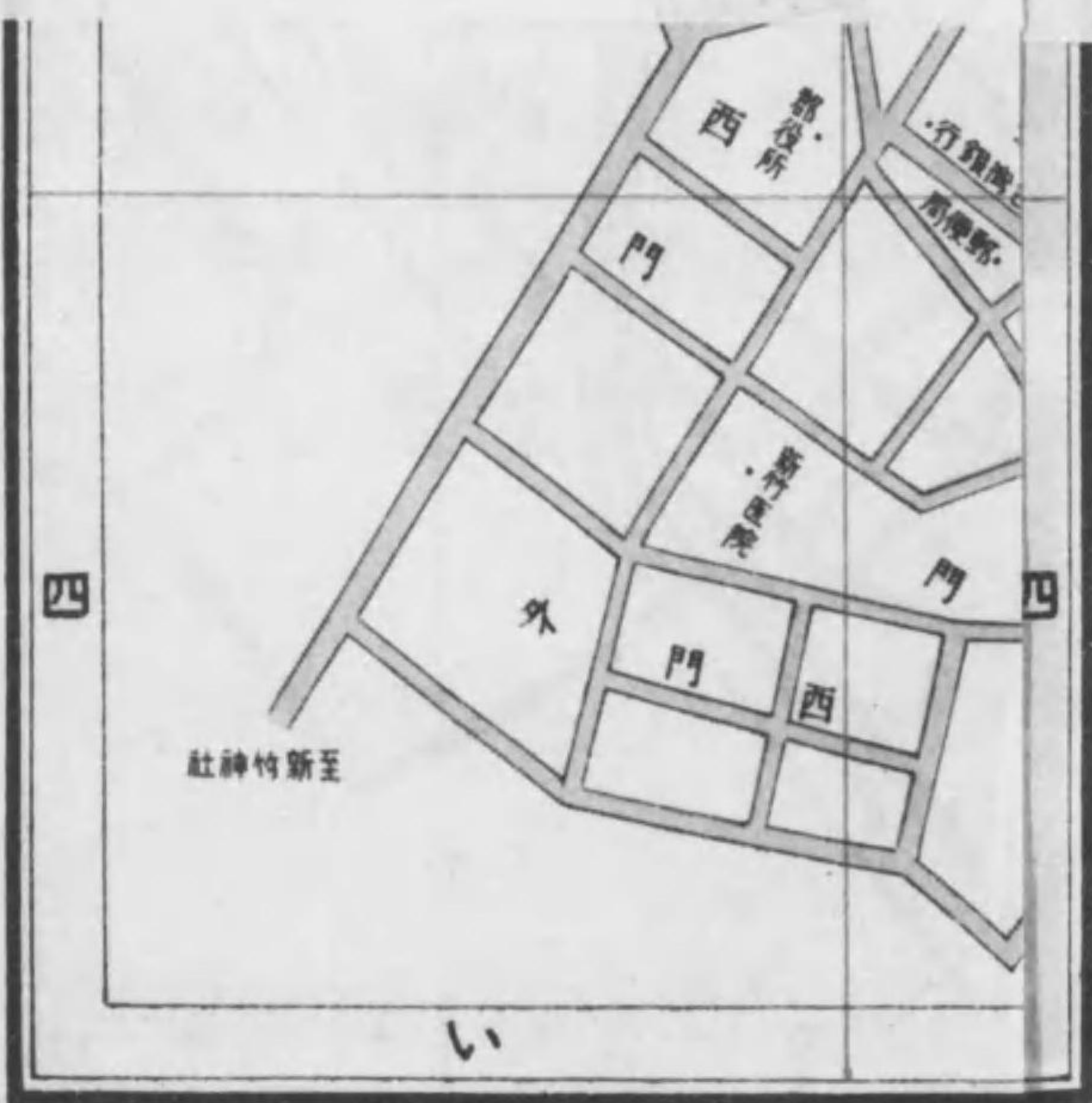
線 貫 縦

▲舊港 停車場の北西一里三十町。軌道によれば約四十分にて達する。舊港溪の下流に沿へる一市街で、清國政府以來、對岸支那との貿易港である。税關支署 帝國製糖會社出張所等がある。

▲南寮濱海水浴場 停車場の北西一里三十町。舊港の北に在り、軌道の便がある。新竹地方に於ける唯一の海水浴場で、新竹附近より來り浴する者が多い。

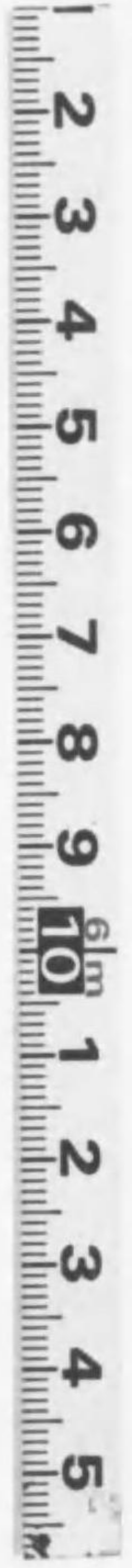
▲油車港 停車場の西約一里餘。新竹軌道の樞樞發著所に下車すれば、徒歩二十町にして達する。

此の地は、舊港庄の一部で、附近は製鹽業が旺んで、一箇年の製鹽高は四百萬斤に達してゐる。香山庄に屬する南油車港には專賣局油車港支局がある。



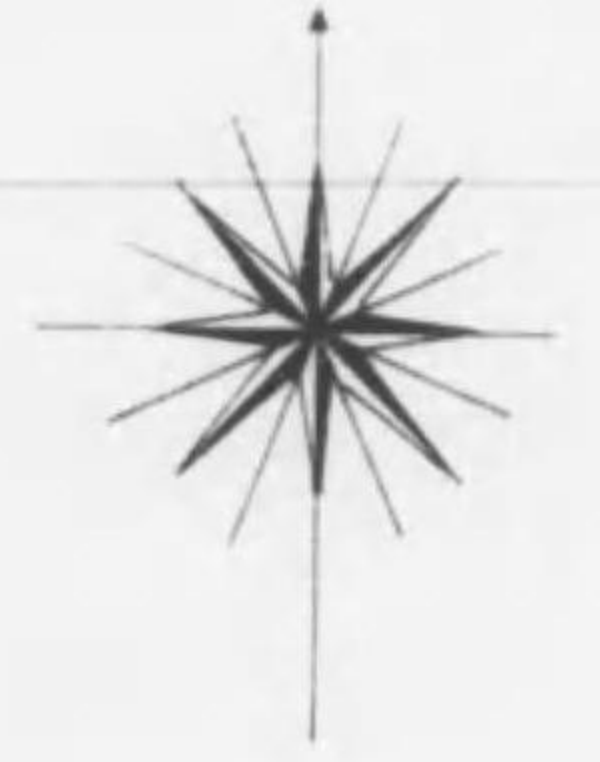
▲竹東街 停車場の東三里三十町。軌道及び乗合自動車の便がある。竹東郡役所の所在地で、元、樹杞林と稱せられてゐた。嘉慶年間(西紀一七九〇年)竹塹社の一土目が、閩人張光彩に物資を供給して、地方を開拓せしめたのが本街の創まりで、其の後道光年間(西紀一八二〇年)製糖業の勃興に伴ひ、移住者頗る増加し、遂に市街の基礎を作るに至つた。領臺後、樹杞林支廳の所在地となり、理蕃上の要衝として、北埔及内灣の咽喉を扼し、商業盛んである。現に郡役所の外郵便局・簡工銀行支店・新竹製糖會社竹東製糖所等がある。内地式旅館としては田中屋・竹東館等がある。

▲北埔庄 竹東の南方一里半。軌道によれば、約一時間にして達する。蕃界に接した小邑で、茶・石



新竹街圖

一分万一尺縮



- 例九
- /// 鐵道
 - /// 溝渠
 - 示 示
 - 點 渠路道

枕頭山脚

至新竹神社



新 竹 神 社



新 竹 街



五 指 山

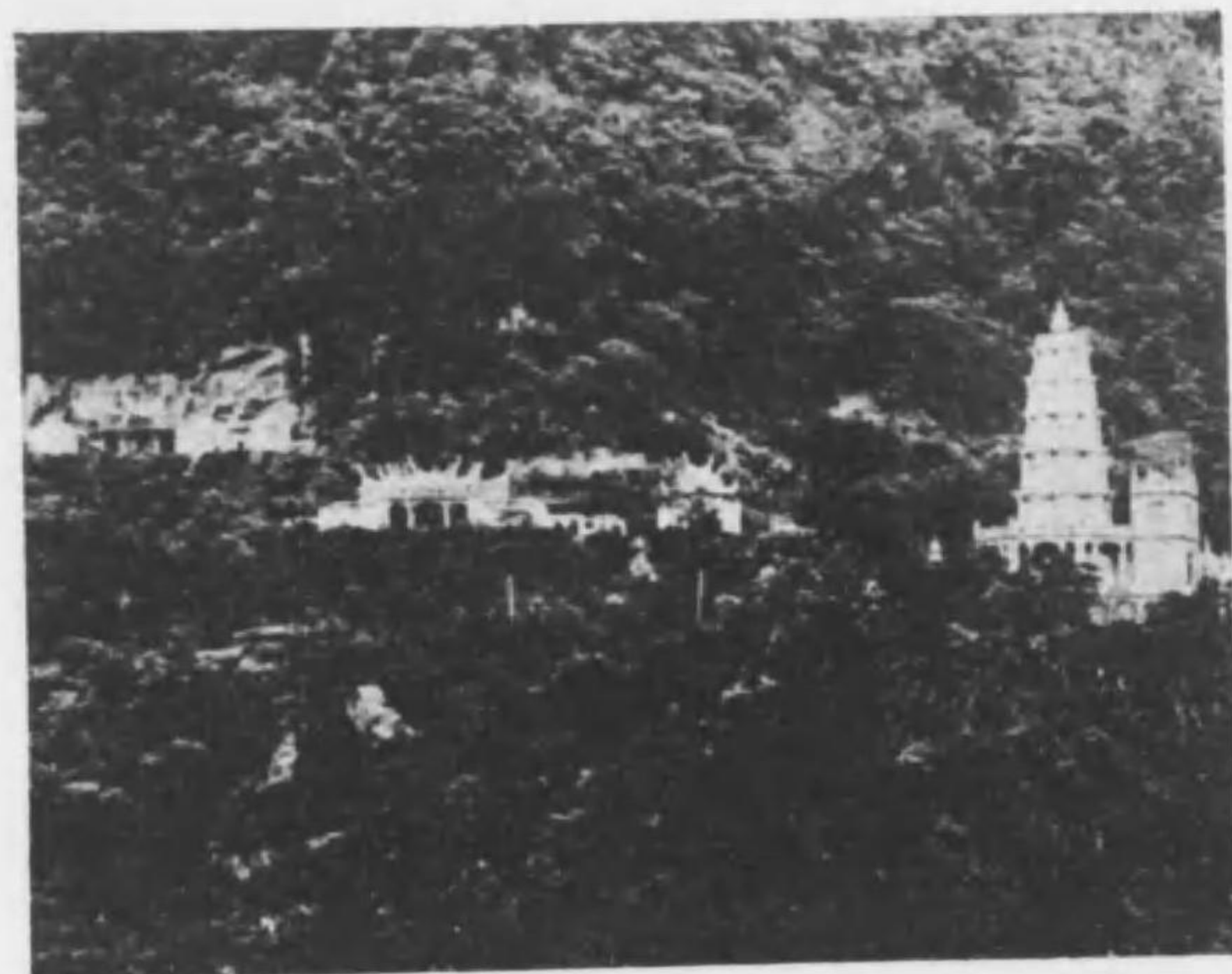


線 貫 縦

炭等の産出があり、商業稍盛、郵便局・公學校等がある。明治四十年に起つた北埔事件を以て有名である。

▲五指山 新竹驛の東南七里。竹東郡にあり『臺灣十二勝』の一で、五指の如き山頂の形ちから此の名あり、佳景に富む。

▲次高山 新竹驛より下り列車に乗れば、出發間もなく左方の車窓から、我國第二の高峰、次高山の勇姿を望むこゝが出来る。次高山は、新竹・臺中兩州の境に屹立し、海拔一萬二千九百七十二尺、元、シルビヤミ唱へられてゐたが、攝政宮殿下本島行啓の折、次高山ミ命名あらせられた。登山するには、宜蘭線の羅東驛より入るを便宜とする。



山 頭 獅



坑 鏡 出

香山驛

基隆より六十八哩八分
高雄まで百八十哩三分

(新竹州新竹郡香山庄香山)

香山庄は、新竹街を距る一里八町。後は牛埔山の連岡に圍まれ、前面直に海洋に接して白沙遠く連り、冬期海潮の激蕩する様は、恰も白馬の狂ふが如く、古來香山觀海の稱がある。沿岸は遠淺で、海水浴に適し、引網等も出来る。

竹南驛

基隆より七十五哩
高雄へ百七十四哩一分
臺中へ四十四哩六分

(新竹州竹南郡竹南庄竹南)

▲携帶品一時預 ▲入場券發賣 ▲仲賣 ▲呼賣
注意 この驛は海岸線と臺中線との分岐點で下り列車は行き先により茲て乗替を要する。
銀行 商工銀行派出所(竹南二三五)
旅館 前川旅館・竹陽館・鹽田館

宿泊料 一圓三十錢乃至三圓
中食料 五十錢乃至一圓五十錢
竹南庄は、竹南郡役所の所在地で、市街は竹南及中港の兩部に分れてゐる、中港は本庄發源の地で、取引の中心であり、竹南には郡役所・製糖會社製糖工場等があり、海岸線の分岐點として交通上重要な位置を占め、又た頭份・南庄に至る要路として、貨客の集散が頻繁である。

人口 一三、八二七人

官衙・學校 郡役所・郵便局

會社 帝國製糖會社製糖所・展南拓殖會社

物産 木材・木炭・砂糖・米・麻・藍・鮮魚・柑橘類・西瓜

石炭

交通機關

▲軌道 竹南軌道會社の經營に係り、竹南を起點とし、中港・頭份・三灣等を経て、遠く南庄に達してゐる。

中港迄一哩一分、一人乗普通運賃八錢、所要時間五分。頭份迄二哩一分、同十五錢、時間約三十分。斗

換坪迄四哩二分、同三十錢、時間約一時三十分。三

灣迄八哩二分、同六十六錢、時間約三時間。田尾迄

十三哩九分、同一圓十二錢、時間約四時。南庄迄十

六哩一分、同一圓三十錢、時間約四時三十分。

▲乗合自動車 竹南より、中港・頭份・斗換坪・珊瑚湖等

の間を往復運轉してゐる。中港迄一人十錢、頭份迄

十五錢、斗換坪迄三十錢、珊瑚湖迄四十錢。

▲輻 賃金二人昇一里四十錢、三人昇五十錢、二人昇

一日備切四圓。但一日は七里を限度とし、以上一里

に付四十錢増。

附近案内

▲帝國製糖會社中港製糖所 停車場の東 町餘。

機械能力五百五十噸。最近一期の製糖高は一、千四

十三萬二千五百斤に達してゐる。

▲中港市街 停車場の西十五町。軌道及び自動車

の便がある。竹南庄の一部で中港溪の河口港を成し、往時に在つては、對岸貿易港として繁榮してゐるが、今は漸く衰微し、其の繁榮は、漸次竹南に移らんとしてゐる。郵便局・中港興業會社等がある。

▲竹南海水浴場 停車場の西二十四町。手押軌道の便がある。中港市街の西方に在る。最近に開設せられたものであるが、脱衣場・水浴場・休憩場等の設備もある。

▲頭份庄 停車場の東方三十二町。手押軌道の便がある。附近には農産物多く、又た南庄に至る要路に衝り、地方の交通取引の中心を成してゐる。

全庄の人口約一萬六千三百を算し、郵便局・展南拓殖會社等がある。

▲獅洞巖 又は獅頭山と呼ばる『臺灣十二勝』の一

で、頭份より四里。竹南軌道により、田尾發著所

に下車すれば、徒歩十五町にして達する。此の洞

は、一つに水簾洞とも稱し、竹南・竹東兩郡の境界

を成す獅洞山内に在る。自然の巖洞を利用し、巧

みに、廟宇を建立したもので、勸化堂・靈塔・地藏

殿等を初めとし、十數の堂宇がある。祭神は、關

聖帝を主神とし、外に、神佛の諸靈を奉安し、結

構壯麗輪奐の美を極め、香煙日夕絶ゆるこゝなく、

洵に北部臺灣に於ける靈域である。

▲南庄 頭份を南に距る五里。手押軌道の便があ

る。元の南庄支廳の所在地で、木材の外、石炭の

産出がある。人口八千餘。郵便局がある。附近は

夙に紅櫻の名所として知られ、又た獅洞巖の奇勝

にも近く、蕃地視察を兼ねての一泊の旅には、最もふさはしい。旅館としては神谷旅館がある。

造橋驛

基隆より七十八哩四分
高雄まで百六十九哩五分

(新竹州竹南郡造橋庄造橋)

造橋庄は竹南郡の南端に位し、加裡山の支脈を負ひ、西方の海濱と南方の後龍溪に面する部分に僅かの平地を有するの外、他は概ね高燥なる丘陵地であつて、果實・苧麻・木炭・薪等を産出する。停車場の南東一里二十八町錦水には、石油坑があり、目下日本石油會社に於て試掘中であるが最近多量の瓦斯及び石油を噴出し將來を頗る矚目されてゐる。

會社 大日本石油會社出張所

交通機關

間連絡扱▲呼賣(辨當・柿・枇杷・西瓜)

旅館 明月館・苗栗館・吾妻館

宿泊料 一圓八十錢乃至三圓

中食料 九十錢乃至一圓五十錢

附近は、後龍溪の上流、中央山脈と海岸山脈とに圍繞せられた大盆地で、農産物が多い。苗栗街は、新竹を距る鐵路二十哩、苗栗平野の中心に當り、物資集散の市場として、州下に於いて、新竹街に次ぐ繁華なる市街である。現に苗栗郡役所の所在地で、附近には果實の産出多く、就中、苗栗柿、苗栗西瓜は、最も著名である。

人口 一六、八四八人
内地人 一五、八三九人
本島人 一五〇人
外國人

官衙・會社 郡役所・郵便局・新竹製糖會社・臺灣軌道會社・日本石油會社礦業所

物産 砂糖・樟腦・石油・木材・果物

▲轎 賃金二人昇一里四十錢、一日備切四圓。

北勢驛

基隆より八十二哩四分
高雄まで百六十五哩五分

(新竹州竹南郡後龍庄二張犁)

二張犁は、後龍庄の東南端、後龍・新港兩溪の流域を占め、地味肥沃、米・甘蔗・甘藷・落花生等の産が多い。

交通機關

▲軌道 縱貫線の後龍驛を起點とする後龍軌道がある。運賃は新港迄一哩三分、一人乗普通運賃十錢、所要時間十分。後龍迄二哩七分、同十八錢、時間三十分。頭屋迄三哩一人、同二十二錢、時間三十分。

苗栗驛

基隆より八十四哩四分
高雄まで百六十三哩三分

(新竹州苗栗郡苗栗街苗栗)

▲手荷物運搬▲携帶品一時預▲公衆電報取扱▲内臺

交通機關

▲軌道 臺灣軌道會社の經營に係り、苗栗驛前を起點として市街を過ぎ、公館・出礦坑を経て大湖庄南湖に達する。運賃は市街地七錢均一、公館迄五錢一分、普通運賃四十八錢、所要時間約四十分。出礦坑迄八哩九分、同運賃八十三錢、時間二時三十分。大湖迄十四哩二分、同運賃一圓三十三錢、時間約四時間。▲乗合自動車 苗栗・福基間を往復してゐる賃金五十錢約四十五分を要する。

▲轎 賃金二人昇一里六十錢、三人昇同七十五錢、二人昇一日備切四圓。(但一日は七時間)

附近案内

▲將軍山御遺跡地 停車場の南十八町。明治二十八年征臺の役に、故北白川宮殿下が、馬を立てられ、親しく戰況を視察あらせられた御遺跡地で、丘上には將軍駐馬の碑がある。眼界廣く、苗栗平

野を一瞬の中に集めることが出来る。

▲新竹製糖會社 停車場の南三十町。資本金七百五十萬圓を擁する新式製糖會社であつて、機械能力五百噸、大正十四年度の製糖高は、六百六萬二千餘斤に達してゐる。

▲出礦坑 停車場の東南三里十八町。軌道によれば、約一時間半にして達する。此の地は、夙に石油の産出を以て知られ、既に清朝時代に於て屢々探掘が試みられた歴史がある。明治三十七年、臺灣石油探掘組合が、此の地に鑿井を開始してから日々約一石の原油を採取してゐたが、其の後屢々經營者を替へ、現在は日本石油會社が經營してゐるが、其の三十五號井及び四十號井は前後して大噴油をなし、前者は一日數百石、後者は千石近い

石油を自噴してゐる。

臺灣の石油鑛業 今から六十年前、新竹州下出礦坑油田が発見されたのが始めてあつて、清國政府は之を官業として經營する所があつたが其の後久しく廢絶してゐたのを、明治三十七年に至つて復舊し、日本石油株式會社が探掘を繼續して今日に至つてゐる。その後石油熱が高つて來ると共に油田も全島各地に發見され、其の數も三百餘箇所に達した。これ等從來發見された石油は、第三紀層中に胚胎し、その兆候としては滲出油や合油層の露頭、燃質瓦斯、之に伴ふ噴泥並に鹽水等である。油帶の背斜軸は東臺灣に三條と西部地方に二十四條とあり、總延長二百二十餘里に達してゐる。現在採油中に屬する出礦坑區は、新竹州後龍溪の兩岸に連亘して、礦區の面積は約六十萬坪に及び、既に開掘された坑井は四十に達し、出油中の主なるものは十八號、三十六號及び四十號井であつて十八號井は大正二年、三十六號井は大正十四年末、また四十號井は昭和二年より出油を

初め、今尚ほそれ／＼自噴してゐる。以上の外補助試掘井は、新竹州下錦水及び臺南州下竹頭崎に各一井宛あり、前者は既に揮發油を採取するまでに至り前途に光明を認めてゐる。

▲大湖庄 出礦坑から更らに軌道により山地に入れば、約一時半にして大湖庄に達する。此の地は、大湖郡役所の所在地で、蕃界に對する咽喉を扼し、伐材及び製腦業の中心地である。郡役所の外に、郵便局・豊原物産會社・朝日製糖拓殖會社等があり、山間に賑かな市街地を現出してゐる。

南勢驛

基隆より八十八哩九分
高雄まで百五十九哩

(新竹州苗栗郡苗栗街南勢庄)

附近は、元、南勢坑庄と稱する一庄であつたが、最近苗栗街に合併せられた。苗栗丘岡に據り、山容溪態頗る景趣に富んでゐる。

銅鑼驛

基隆より九十一哩四分
高雄まで百五十六哩五分

(新竹州苗栗郡銅鑼庄)

銅鑼庄は、銅鑼・三座厝・老・新の兩鷄降及び其の附近の七大字より成り、附近は、後龍溪の支流縱横に奔流し、灌溉頗る便である。此の地よりは西海岸の通霄・苑裡に至る道路があり、苗栗地方と海岸地方とを連絡してゐる。

三叉驛

基隆より九十六哩一分
高雄まで百五十一哩八分

(新竹州苗栗郡三叉庄三叉)

▲携帶品一時預 ▲入場券發賣 ▲呼賣(炭)
旅館 山科屋
宿泊料 一圓五十錢乃至二圓五十錢
中食料 六十錢乃至一圓
三叉庄は、臺中・新竹二州の境界に近く、苗栗郡

の西南部を占め、一帯の地は、山嶽・溪川入り交り土地高燥、氣候中和である。河谷に沿ふ狭小なる田圃の外、丘陵地の大半は茶園であつて、年額約一萬七千八百斤を産する。庄内には臺灣拓殖製茶會社の製茶工場があり、綠茶を主とし、再製茶の製造を爲してゐる。又附近の丘陵一帯は、**藏**の名所として知られてゐる。

十六份驛

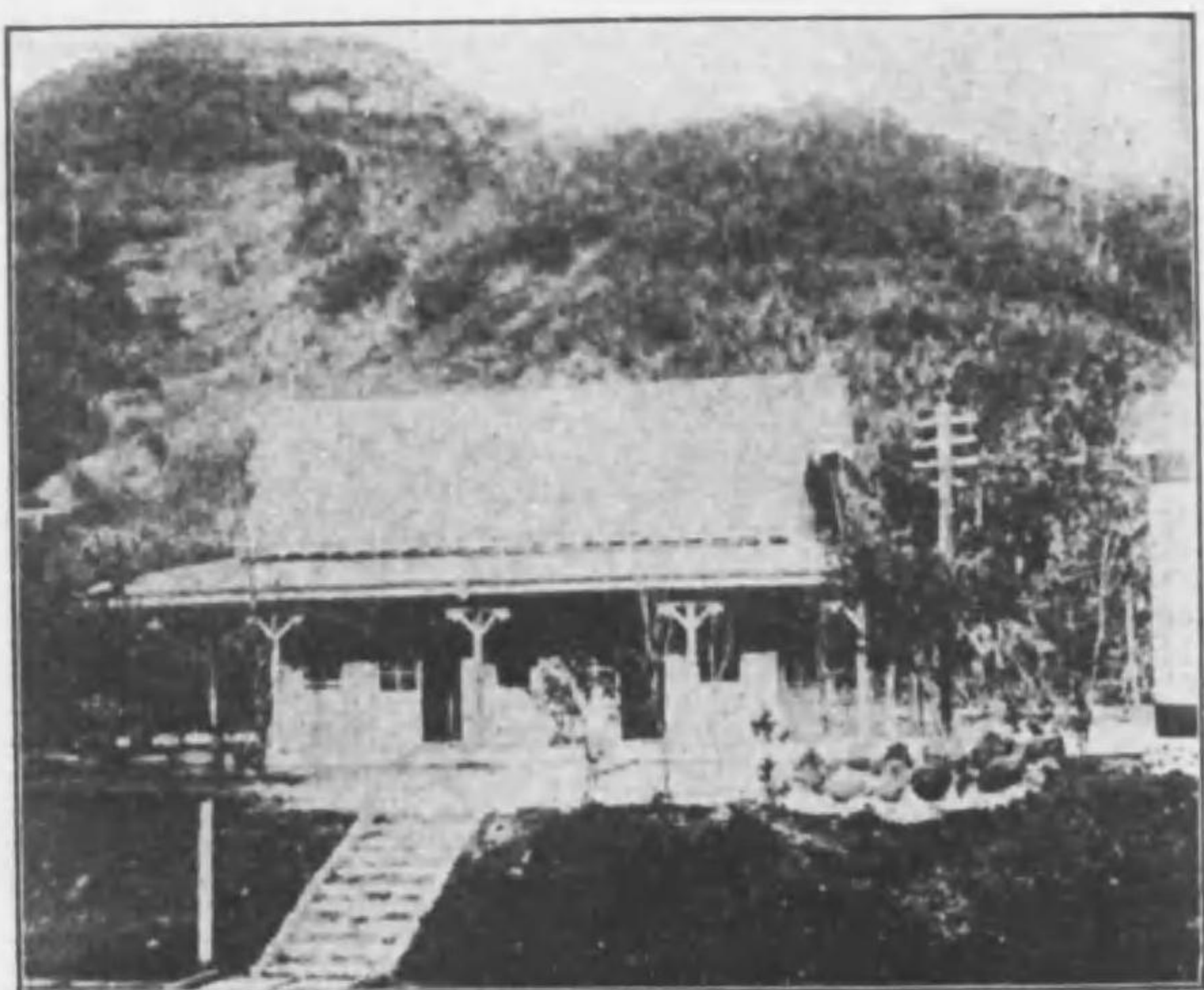
基隆より九十九哩二分
高雄まで百四十八哩七分

十六份驛は、列車運轉上の必要に因り設置せられた信號所で、關刀山の山腹に在り、海拔一千二百餘尺、鐵道沿線中の最高地である。

大安驛

基隆より百四哩四分
高雄まで百四十三哩五分

(臺中州豊原郡内埔庄)



(尺百二千一拔海)場號信份六十



橋鐵川社内

此の地は、内埔庄の一部で、其の東北端に位し、

大安溪に沿ひ新竹州大湖郡卓蘭庄に至る要路に當つてゐる。大安溪兩側の連山は、風雨の浸蝕に因つて崩壊し、錐のやうな峰が竝峙し、頗る奇觀を呈してゐる。

物産 茶・木材

交通機關

▲軌道 卓蘭軌道は、大安軌道會社の經營に係り、此の地より起つて新竹州大湖郡卓蘭を経て、蕃地の關門たる内灣に達してゐる。運賃卓蘭迄一人乗五十二錢、所要時間約一時半。

附近案内

▲卓蘭庄 大安驛より軌道によれば、約一時間に達する、蕃地に對する要衝を占め、郵便局出

線貫縦

張所・大安製糖會社等がある。

后里驛

基隆より百六哩
高雄まで百四十一哩九分

(臺中州豊原郡内埔庄后里)

▲携帶品一時預 ▲入場券發賣 ▲呼賣

后里は、内埔庄の一字で、其の西南端に位し、東半は概ね山地であるが、西半は極めて緩かな傾斜地を成し、地味肥沃米・甘蔗の栽培に適している。此の地は月眉・大甲に至る要路に當り、東洋製糖會社經營の后里・大甲線の起點である。停車場の構内には、梅樹多く、花期、此の地を過ぐれば、暗香馥郁として浮動するを覺ゆるであらう。「后里の梅」にして名高い。

官衙・會社 郵便局・蔗苗養成所・發電所
物産 米・砂糖



林梅の場車停里后



橋鐵溪甲大

交通機關

▲鐵道 東洋製糖會社の經營に係り、此の地を起點とし、月眉・馬鳴埔の諸驛を経て、海岸線大甲驛に達する。月眉迄三哩二分、二等二十錢、三等十三錢、所要時間二十五分。大甲迄十二哩五分、二等七十五錢、三等五十錢、時間二時二十分。

附近案内

▲發電所 停車場の西北約十五町。鐵道の便がある。本發電所は、臺灣電力會社の經營に係り、能力一千馬力、主として臺中・彰化・豊原等の市街に電力を供給してゐる。附近一帶の山地は、風光佳絶、躑躅多く、杖を曳く者が尠くない。

▲蔗苗養成所 停車場の東南十五町。苗圃は海拔八百尺乃至千二百尺の間に在り、殖産局所管の下に、専ら甘蔗苗を養成し、島内各地に配布してゐる。

る。
▲月眉製糖所 停車場の西一里十一町。大日本製糖會社線によれば、約二十五分にして達する。機械能力七百五十噸。最近一期の製糖高は、一千四百五十八萬斤(約八千噸)に達してゐる。

豐原驛

基隆より百十里七分
高雄まで百三十七哩二分

(臺中州豐原郡豐原街豐原)

▲手荷物運搬▲携帶品一時預▲入場券發賣▲仲賣

旅館 車茶屋

宿泊料 一圓五十錢乃至二圓七十錢

中食料 一圓乃至一圓五十錢

豐原街は、元葫蘆墩云ひ、豐原郡役所の所在地で、夙に葫蘆墩米の産地として知られてゐる。東に東勢、西に大甲の兩郡を控へ交通上の要地を占め、中部臺灣に於ては彰化と並び稱せらる、繁

入れ、第二期作は五月から七月の間に播種して十月から十一月の間に收穫する。この二度の米作を比較すると、第二期作は作付面積は一期作より遙かに多いが、一甲(約一町歩)當りの收穫量が劣るから總收穫は略ぼ相半ばしてゐる。在來の稻にも水稻と陸稻とあること及び之が稈籾の兩種に分れてゐることなど内地同様であるが、領有當時は收穫高も約二百萬石に過ぎなかつたし、且つ米の品質も悪かつた所が領後改良に改良を施し、初め千三百餘程もあつた米の種類も、今日では四百種位に淘汰され、臺灣米の品質は昔と全然趣きを一變し、著しく向上した。殊に此の兩三年來は、内地種(主に中村種)の栽培が急に増加し農家は競うて之を作る様になつた。即ち大正十年頃には内地種米は約三千石餘を出てゐなかつたが、十四年には一躍して九十九萬二千石といふ突飛な増加の數字を見せた。この内地種の新臺灣米は「蓬萊米」と名づけられ、盛んに内地へ向つて移出される。大正十四年度の島内産米の總額は、六百

盛な郡邑である。近時諸種の工業勃興し、製麻會社・製材會社等が設立せられたるのみならず、八仙山の檜林、大浦庄蔗苗養成所等の事業に因り、市況漸次殷盛に向つてゐる。

人口 二二、九九九人 (内地人 五、四五人
本島人 二二、三三二人
外國人 一、二二二人)

官衙 郡役所・郵便局・專賣局出張所・米穀検査所
銀行・會社 彰化銀行支店・臺灣製麻會社・製紙製材會社・臺中輕鐵株式會社・富春製氷株式會社

物産 米・果實・麻袋・野菜・木材
臺灣の米 この地の氣候は良く米の栽培に適し到る處に產出されるが、特に臺北・宜蘭平野・桃園・中壢・彰化・員林・豐原・鳳山・屏東・潮州地方は主要産地になつてゐる。收穫は水利の便がある地方は年に二回を原則とし、第一期作といふのは普通十二月から二月までの間に種播きをなし、五月から七月の間に刈り

四十四萬石の間もなく一千萬石臺に達するであらうとは一般の觀測である。

交通機關

▲鐵道 臺中輕鐵會社の經營に係り、豐原を起點とし、東、石岡を経て、土牛に達してゐる。石岡迄四哩二分、一等三十四錢、三等十七錢。土牛迄七哩三分、一等六十錢、三等三十錢。

▲軌道 臺中輕鐵會社の經營に係る豐原軌道は、此の地を起點とし西、神岡に達し、南、潭子を経て臺中に達し、別に同社鐵道の終點たる土牛より起り、東に東勢庄を過ぎ白毛に達するものがある。又水底寮軌道は、土牛より起り、新社を経て水底寮に達してゐる。豐原より神岡迄四哩六分、運賃一人乘三十七錢、所要時間四十分。潭子迄三哩一分、同二十五錢、時間二十分。臺中迄八哩七分、同七十錢、時間一時間。土牛より東勢迄一哩一分、運賃一人乘十六錢。白毛迄八哩五分、同六十八錢。水底寮迄五哩、同三

十五錢。

▲乗合自動車 臺中豐原間・豐原神岡公館間及び豐原土牛間を往復する。運賃は臺中迄一人三十五錢、一時間。神岡迄二十五錢、三十分。公館迄三十五錢、約四十五分。土牛迄三十五錢、約五十分。

▲人力車 賃金一里四十錢。

▲轎 賃金二人昇一里六十錢、三人昇一里七十五錢、二人昇一日備切四圓。(但し一日は七里を限度とする)

附近案内

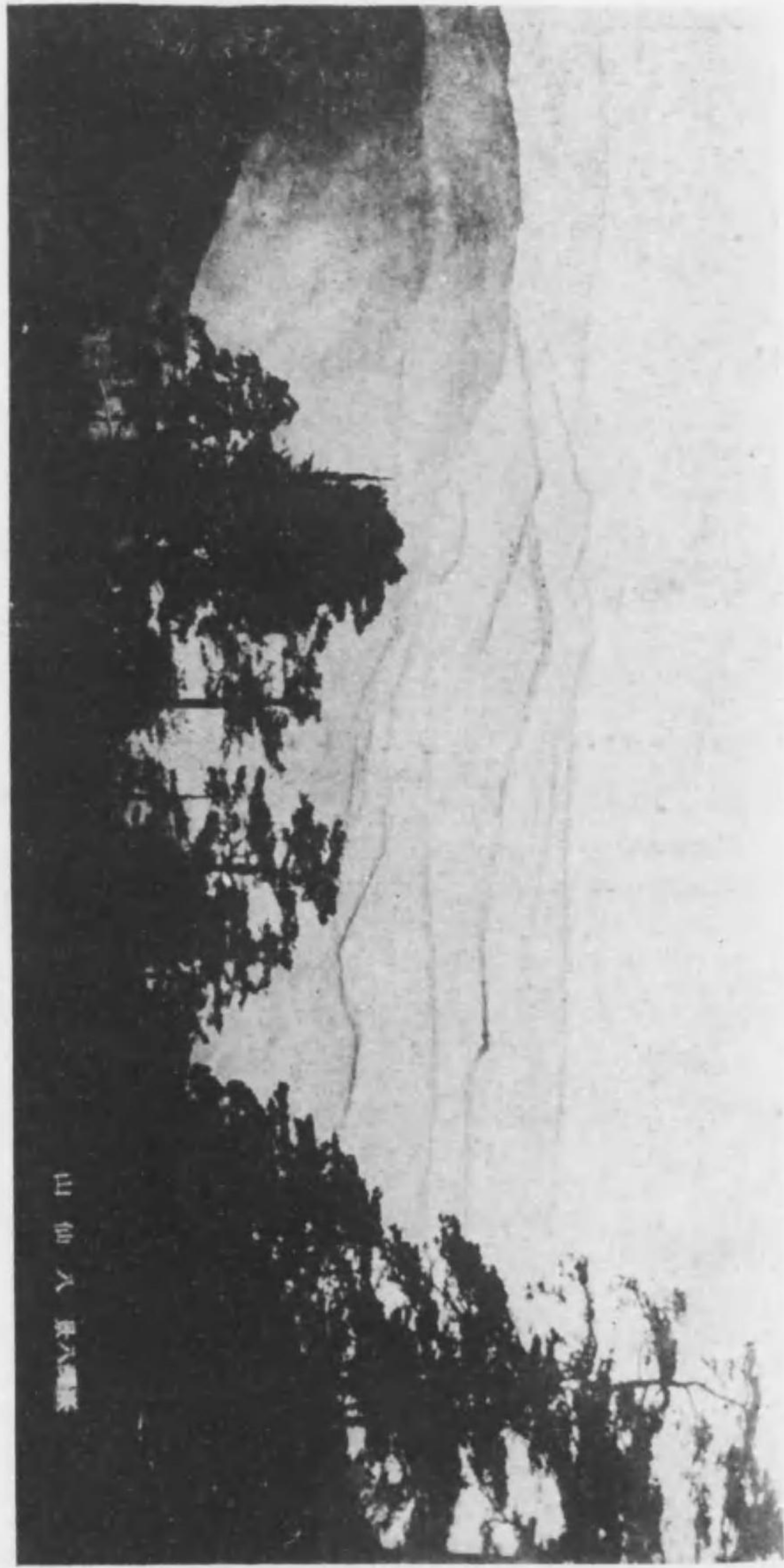
▲神岡庄 停車場の西約二里。軌道によれば、約四十分にて達する。豊原・清水兩街の略中間に位置し、縦貫道路に沿つて、小市街を成し、附近は米産地として著名である。

▲東勢庄 停車場の東約三里。臺中輕鐵の鐵道によれば、約二時間半にして達する。大甲溪の右岸

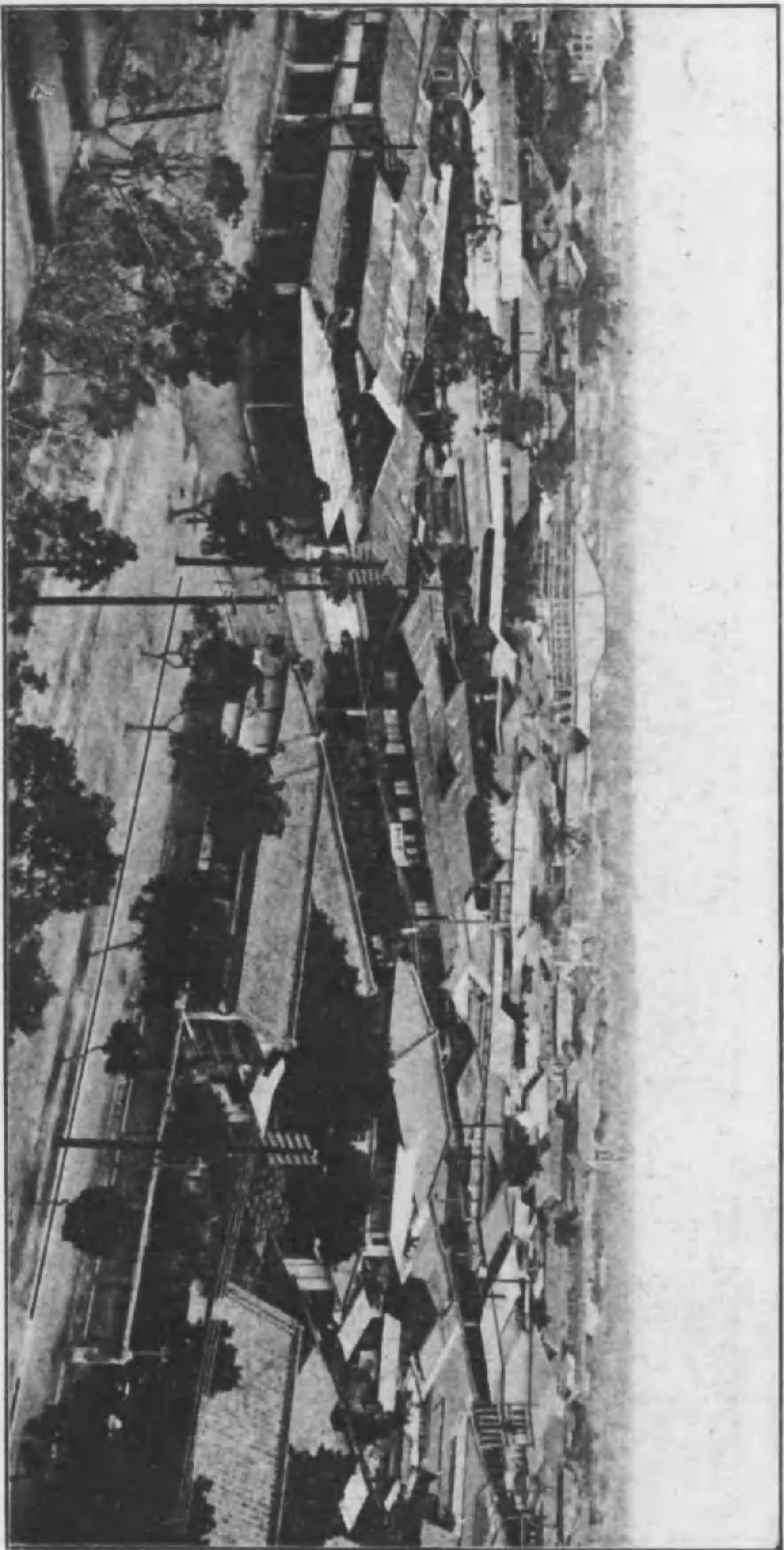
に沿ひ、蕃界の門戸を扼し、東勢郡役所の所在地たるのみならず、最近八仙山森林事業の發展に伴ひ、市況次第に繁榮してゐる。郡役所の外、郵便局・彰化銀行出張所・製腦會社出張所・物產會社等があり、内地式旅館に池田・清原・松屋等がある。

▲大埔庄 蔗苗養成所 東勢庄より一里三十一町。新社庄に在り、軌道によれば、約一時間半にして達する。この養成所は殖産局の所管に屬し、苗圃は、海拔千六百尺の高地に位し、開墾面積一千百十七甲、植付甲數三百二十七甲、植付蔗苗約三千萬本の多きに達してゐる。新社庄には、專賣局樟林作業所がある。

▲八仙山檜林 東勢庄より九里餘。途中の白毛迄軌道の便がある、沿道は臺灣に珍らしい松林多く、



八仙山 景八圖



縱貫線

大甲溪の溪流と共に景勝の地として最近「臺灣八景」の一に選ばれる、この檜林は、中央山脈の中部、合歡山より分岐せる支脈中の最高峰たる白姑大山の西方に連る大檜林で、面積一萬四千町歩、蓄材量は約四百萬尺に稱せられてゐる。目下總督府に於て、伐木事業を經營して居るが、其の方法は阿里山と異なり、地勢の關係上専ら木馬・管流等の舊式方法を探り、最近の伐木造材高は、一萬八千百三十八石に達してゐる。

潭子驛

基隆より百三十三哩九分
高雄まで百三十四哩
(臺州中豐原郡潭子庄潭子)

▲携帶品一時預 ▲入場券發賣

潭子庄は、豐原郡の南端に位し、米・甘蔗の産出多く、最近帝國製糖會社製糖所の設立あり、市況

稍繁盛である。

官衙・會社 郵便局・帝國製糖會社潭子製糖所

物産 砂糖・米・果實

交通機關

▲軌道 豐原軌道の沿線に當つてゐる。潭子より臺中迄一人乗二十五錢、豐原迄十五錢。

▲乗合自動車 臺中豐原間を運轉し、運賃は臺中迄二十五錢、豐原迄十五錢。

▲轎 賃金二人昇一里四十錢

附近案内

▲帝國製糖會社潭子製糖所 停車場の前に在る、機械能力七百五十噸。最近一期の製糖高は約二千萬斤に達してゐる。

臺中驛

(臺中州臺中市橋町)

線 貫 縦

驛名	哩程	旅客運賃		
		一等	二等	三等
基隆	二九六	七・七五	五・四〇	三・〇〇
臺北	一〇一・八	六・六〇	四・六〇	二・五五
新竹	五五・七	三・六〇	二・五〇	一・四〇
嘉義	六一・二	四・〇〇	二・七五	一・五五
臺南	九九・五	六・四五	四・五〇	二・五〇
高雄	二八・三	八・三五	五・七五	三・二〇

▲手荷物運搬▲携帶品一時預▲手荷物配達▲入場券發賣▲公衆電報取扱▲內臺連絡扱▲臺東線連絡扱▲自動車▲仲賣▲呼賣(辨當)

乘降客數 一、四三三、二九三
 發賣貨物噸數 二四三、一八六
 牧入 一、〇五二、五八三・一〇
 重要貨物

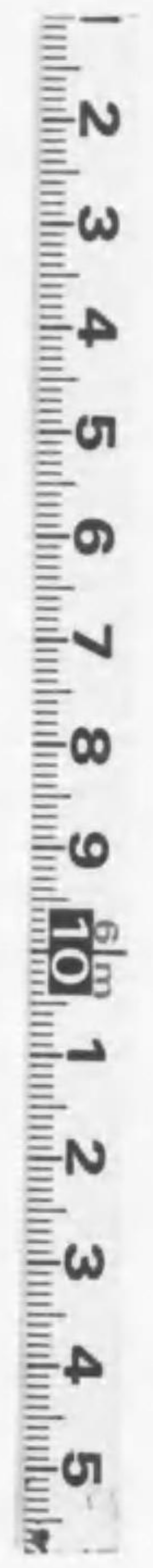


發 送 到 著

砂糖 二八、二八九
 芭蕉 五一、九四一
 米 一五、七五七
 石炭 一五、〇八四
 肥料 一二、七八〇
 米 九、八〇九
 銀行 臺灣銀行支店(寶町)
 (三) 商工銀行支店(榮町)
 郵便局 臺中郵便局(寶町)
 旅館 春田館(大正町)
 旅館(榮町)
 宿泊料 二圓乃至五圓
 中食料 一圓乃至二圓五十錢
 會食所 富貴亭(新富町)
 劇場 臺中座(榮町)
 活動常設館 大正館(榮町)
 沿革 此の地方は、往古の平埔蕃族、岸裡社の地で、康熙五十五年(西曆一七一七)同社の一土目が、官に請うて、始めて猫霧棟の野を開墾した。之れが此の地方開發の始めてあつて、其の後康熙末年(西曆一七二二)より、雅

臺中市中街圖

縮尺一萬分一





臺中第二中學校



臺中公園



驛名哩程

旅客運費
一等
二等
三等

發送
砂糖 二八、二八九
芭蕉 五一、九四一
到著
石炭 一五、〇八四
肥料 一二、七八〇

正年間(西曆一七〇〇年)に互り、支那内地より、漢族の渡來する者多く、漸次、原住蕃人を驅逐して、地方の開發を計り、遂に大墩と稱する大部落となり、益々人口を増加した。然るに其の後林爽文・戴萬生の亂と、福州人系の閩人、廣東人系の粵人との争闘に因り、大墩部落は、屢々全滅の厄に遇つた。光緒十一年(西曆一八五四年)臺灣を以て一省と爲すや、巡撫劉銘傳の奏請に依り、此の地を以て、省城と爲し、巨萬の財を投じ、廣さ約三百七十五甲の築城に著手したが、劉銘傳の失脚と共に、省城は臺北に移さるゝこととなり、僅に府城として存置せらるゝこととなつた。

領臺後明治二十八年八月、民政支部を此の地に置かれたが、當時、臺中市の人口は、僅かに、千四百五十人に過ぎなかつた。其の後臺中縣を経て、應を置くに至り、内地人の移住する者、次第に増加し、明治三十六年には臺中公園を初めとし、諸官衙・學校・銀行・會社等の設立せらるゝあり、市街の外観全く備り、人口も領臺當時の約十倍に達した。大正元



臺 中 州 廳



臺 中 市 役 所

年には市區改正の計劃を樹て、街路の延長、上下水道の修築を企て、又町名を改めて全市を三十町とした。大正九年には市制を布かるゝこととなり、領有後約三十年にして、臺中平野の中央に股盛なる都市を現出した。

臺中市は臺中州廳の所在地にして、基隆を距る鐵路約百二十哩。中央山脈と海岸山脈とに依つて圍まれた臺中平野の略中央に位し、面積一方里餘、本島三大都市の一であつて、土地高燥、大氣澄み、氣候中和である。綠川・柳川の二川に八橋を架し、瀟洒たる建物、整然たる街區なき世間に『小京都』の稱ある所以である。

市街は、鐵道線路により、略東西の兩部に劃せられ、線路以東は、土地廣く、會社・工場等があり、工業區として矚目せられ、線路以西、即ち、柳川

より緑川に至るの間は、本市の中心であつて、就中、榮町・大正町・寶町等は最も繁盛なる商區となつてゐる。幸町・旭町は官衙の所在地であり、又干城橋附近は、本市發祥の地で、主として本島人の居住者多く、商業盛んである。

人口 四二、三八七人
内島人 一〇、九六八人
外國人 三〇、五一五人
九〇四人

官衙 州廳(村上町)(三) 警察署(幸町)(四) 市役所(幸町)(四) 郡役所(大正町)(四) 臺中醫院(村上町)(三) 地方法院(幸町)(五) 刑務所(臺中市)(五) 專賣局支局(數島町)(五) 測候所(大正町)(三)
軍衙 歩兵第三大隊(干城町)(三) 憲兵分遣所(干城町)(三)
學校 商業學校(新高町)(二) 師範學校(村上町)(三) 第一中學校(新高町)(三) 第二中學校(明治町)(五) 高等女學校(幸町)(四)

交通機關

會社 帝國製糖會社(高砂町)(四) 臺灣新聞社(明治町)(四) 臺灣電力會社出張所(大正町)(三) 臺灣倉庫會社出張所(櫻町)(四) 製粉會社(老松町)(五) 三井物產會社出張所(橋町) 臺灣青果株式會社(橋町)(四) 臺中州青果同業組合(明治町)
物産 米・砂糖・果實
鐵道 帝國製糖株式會社の經營に係る南投線及び聚興線の二線がある。前者は臺中驛を起點とし、東南に走り霧峯・草屯等の諸驛を経て南投郡南投街に達してゐる。霧峯迄七哩一分、一等五十八錢、二等二十九錢、所要時間約五十分。草屯十三哩五分、一等一圓八錢、二等五十四錢、時間一時四十分。南投迄十八哩八分、一等一圓五十二錢、二等七十六錢、時間約二時十六分。後者は東に軍功寮・公館等の諸驛を経て聚興に達してゐる。
軌道 臺中輕鐵の外臺灣軌道及び帝國製糖會社の手

押軌道は此の地を中心として、東頭沱坑、南、大里、西南、南屯に達してゐる。犁頭店迄二哩九分、一人乗普通運賃二十四錢、所要時間約三十分。大里迄三哩二分、同二十六錢、時間約三十分。頭沱坑迄四哩三分、同三十五錢、時間約一時間。

▲乗合自動車 臺中・彰化間臺中・豐原間及臺中・清水間を往復する。賃金は臺中・彰化間四十錢、また臺中・豐原間は潭子まで二十五錢、豐原迄三十五錢、臺中・清水間は清水迄六十錢、一時二十分を要す。

▲人力車 賃金は平道一里三十五錢、暴風雨五割、難路、夜間二割増、停車場からの運賃は春田館・臺中座迄十錢、臺中州・市役所・臺中神社・分屯大隊迄十五錢、水源地・地方法院・製糖會社・刑務所迄二十錢、果實市場迄三十錢。
物産 米・砂糖・青果物

附近案内 (驛より見物順位に並ぶ)

▲行啓記念館 市内大正町にある。大正十二年四月

月 今上陛下尙ほ皇太子殿下に渡らせらる、折

本島に行啓相成つたのを記念せんが爲めに、州下官民の醴金及び補助金六萬餘圓を以て工を起し、大正十五年に竣工したもので、館内には教育參考品たる博物や州下の物産を陳列してある。

▲臺中公園(三) 停車場の北九町。大正町の東端に在る。明治四十一年、本島縦貫鐵道の全通式が舉行された所で、當時御臺臨の閑院宮殿下の御休憩所は今尚ほ残されてゐる。園内には蒼々たる芝生あり、繚亂たる花壇あり、陵々たる丘崗あり、泉石老樹其の間を點綴し、本島屈指の公園で、臺中神社・昭忠碑・故兒玉總督壽像・後藤子爵銅像・商品陳列館等がある。

▲臺中神社(三) 臺中公園内に在る。大國魂命・大

線 貫 縦

己貴命・少彦名命の三神一座竝に故北白川宮殿下を奉祀する縣社で、本殿・拜殿・社務所・鳥居等悉く古式に遵ひ、壯嚴の氣四邊に満ちてゐる。

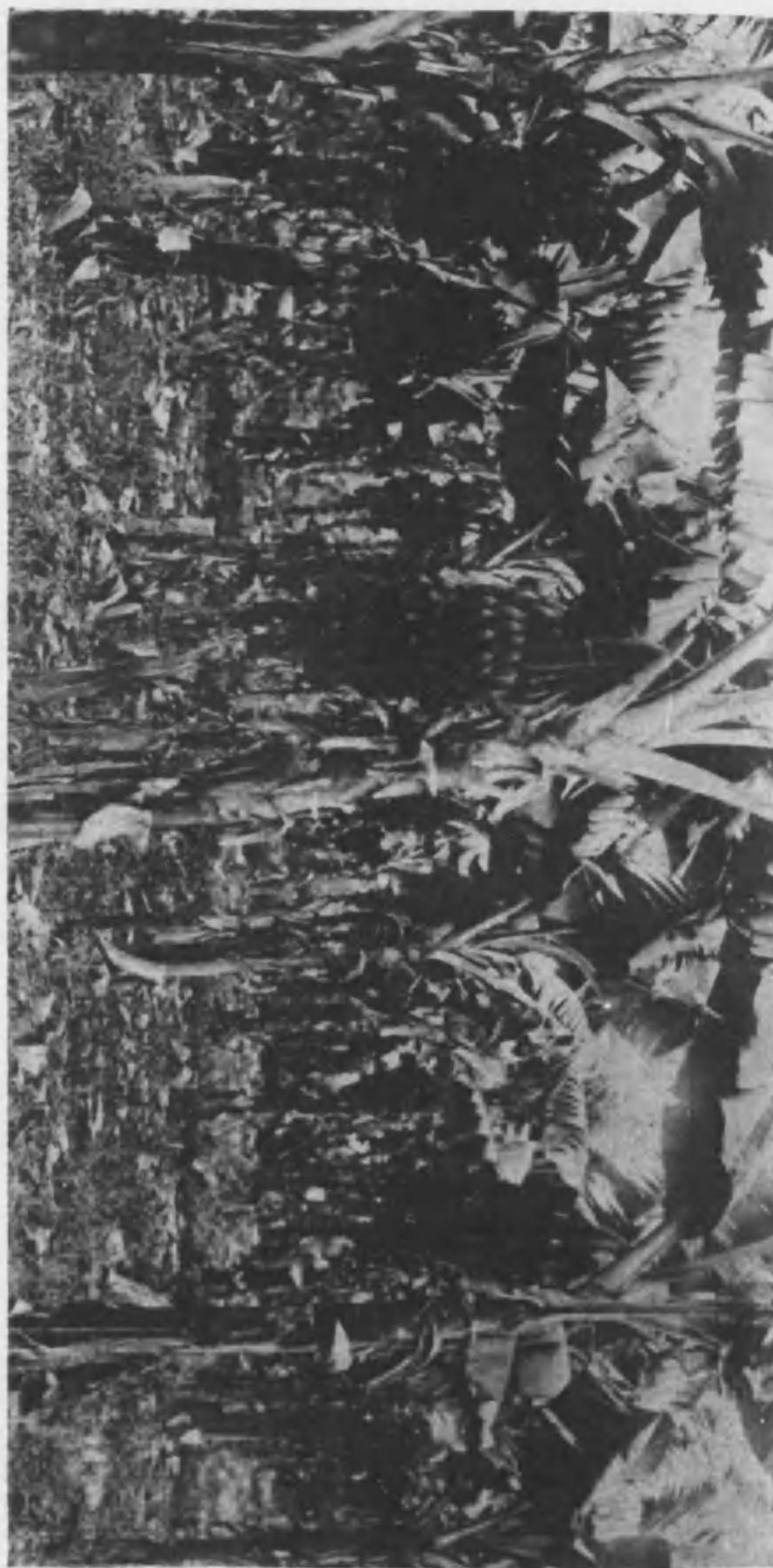
▲水道水源地 停車場から十數町。この水道の水源地は堀井により地下水を得、之を電動力應用の唧筒式により直に貯水塔に揚水し、それより自然流下法により全市に送水する設備である。この井戸式が此の水道の特色になつてゐる。

▲水泳場 市内實町武徳殿裏にある。大正八年公共衛生費を以て建設せられ、大正十年市の經營に移された。貯水面積三百坪、深い所で八尺、浅い所で一尺五寸、毎年五月一日から九月末日まで開いてゐる。

▲青果物検査所(補町) 臺灣青果株式會社の經營

に係り大正十五年五月從來の取引市場制を廢し、検査所に改めたものである。大正十四年中に於ける取扱數量は三千四百萬斤、この價格は百七八十萬圓に達し州下各市場の總取扱高の約五割に當つてゐる。

臺灣のバナナ 島内では一般に芭蕉實と言つてゐる。氣候風土によく適してゐるので到る處で栽培されてゐるが、中でも臺中・臺南・高雄の各州が其の主産地である。品種は北蕉種、仙人種と稱する在來種が大部分を占め、其の産額の豊富なる點に於て、また風味の佳い點に於て到底小笠原産や、琉球産の遠く及ぶところもなく、殊に他種に比し耐久力の優れてゐる點は臺灣バナナの特色である。そのため内外人の嗜好に適し領臺後輸送の途が開け内臺交通が便利となるにつれ需要も多くなり、最近では年産額三億萬斤に達し、内地移出だけで一億五千萬斤、その價格一千萬圓以上に及んでゐる。



臺灣青果株式會社の經營



三 景 第 三

郡下産業の中心地で風景も佳い。

烏日驛

基隆より百二十四哩
高雄まで百二十三哩九分

(臺中州大屯郡烏日庄烏日)

▲携帶品一時預 ▲入場券發賣

烏日庄は大肚溪の流域を占め、烏日外十大字より成り、土地肥沃にして米・甘蔗等の産出多く、現に大日本製糖會社烏日製糖所の所在地である。

官衙・會社 郵便局・大日本製糖會社烏日製糖所
物産 米・砂糖

交通機關

▲乗合自動車 臺中・彰化間の乗合自動車の運轉區間で、運賃は臺中迄十二錢、王田迄十錢、彰化迄二十八錢。

▲人力車 賃金平道一里四十錢、風雨・夜間は各二割。

線 貫 縦

▲帝國製糖會社 停車場の東五町。資本金三千萬圓、拂込資本金一千八百七十五萬圓を擁し、臺中製糖所の外潭子・新竹・中港の三製糖所を有してゐる。臺中製糖所は第一・第二の二工場より成り、機械能力兩者合して千五百噸、最近一期の製糖高は、約二千八百萬斤に達してゐる。

▲農業倉庫 も臺中廳農會に於て大正四年總督府の補助を受け『ホフマン』氏の穀類試驗倉庫に準據し模範稻摺乾燥工場として建設したものであるが、大正十一年臺中州農會の經營に轉じ専ら農業倉庫として其の業務を開始するこゝに、なつた。現在の設備は、稻摺乾燥一晝夜稻百二十石、貯藏稻千石、玄米二千七百石の能力がある。

▲頭汙坑 軌道でゆくこ約一時間で達する。大屯

▲暴風雨は五割増。

附近案内

▲大日本製糖會社烏日製糖所 停車場の西三町。機械能力四百五十噸、最近一期の製糖高は約八百萬噸に達してゐる。

王田驛

基隆より百二十六哩二分
高雄まで百二十一哩七分

(臺中州大屯郡烏日庄勝勝)

▲携帶品一時預

驛は烏日庄の南端に位し、海岸線追分驛への分岐點になつてゐる。

彰化驛

(臺中州彰化街彰化)

驛名	旅客運賃		
	一等	二等	三等

高	臺	嘉	新	臺	基
雄	南	義	竹	北	隆
一七四	八八六	五〇三	六七八	一三九	一三七
七六五	五七五	三二五	四四〇	七四〇	八五五
五三〇	四〇〇	二二五	三〇五	五二五	五九五
二九五	二二〇	一二五	一七〇	二八五	三三〇

▲手荷物運搬 ▲携帶品一時預 ▲手荷物配達 ▲入場券發賣 ▲内臺間連絡扱 ▲呼賣(辨當・鮪)

銀行 彰化銀行支店

郵便局 彰化郵便局

旅館 千代酒家(北門)・彰化ホテル(西門)

宿泊料 一圓五十錢乃至三圓五十錢

中食料 一圓乃至一圓五十錢

沿革 此の地は昔、半線又は半綫と稱し、今より約二百七十年前、鄭氏據臺當時、既に一部落を成してゐたが、其の發展の機運を示すに至つたのは、清領

に歸した康熙二十三年(西紀一六八四年)以後である。當時支那は、明既に滅び、清朝の威力が、漸く熾んならんとする時であつたから、漳泉惠潮等南方諸州に於ける流民は續々と本島に流入し、至る所に地を相し、開墾した。中でも此の地方は、臺中平野の中心に當つてゐた爲めに、其の數、數十萬の多きに達した。是等の移民は、先づ、此の地に入り、然る後諸種の準備を整へ、再び各地に散ずる状態であつたから、自然此等拓殖事業の劃策地として、急激な發達を遂げた。泉州人施長命・吳沛・楊某・廣東人張振福等の豪族が、臺南或は嘉義地方より來り、官に乞うて附近の開拓に著手したのは恰も此の前後であつて、彼等は、自から、居を此の地に構へ、其の規模稍々大なりし爲め、商人の之に従つて來る者多く、漸次市街の基礎を作るに至つた。その後拓殖事業の進捗は、大いに地方の開發を促し、遂に雍正元年(西紀一七二三年)には南は虎尾溪以北、北は大甲溪以南を劃し、新に縣治

を敷き、顯彰皇化の義に取り、之を彰化縣と稱し、縣署を、此の地に置いた。此れが彰化の起原である。斯くて爾後百數十年、常に縣治の府として、中部臺灣に於ける、行政文化の中心となり、光緒年間(西紀一八五五年)一時省城を置かるゝに至り、股盛の極に達したが、其の後府治を臺灣(今の臺中)に移すに及び、漸く衰微を示し、其の繁榮は次第に臺中に奪はるゝに至つた。

領臺後、明治二十九年、彰化廳を置かれたが、幾干もなく、支廳となり、衰微依然たるものがあつたが、大正九年地方自治制度の施行と共に、彰化郡に改められ、加ふるに、同十年海岸線の全通と共に、南北交通上の重要地點として市況、頗る活氣を呈してゐる。

彰化街は、臺中市の南、鐵路約十一哩、臺中平野の、略、中央に位し、東に八卦山峙ち、北に大肚溪流れ、頗る景勝の地を占め、純本島人都市

線貫縦

しては、島内有数の都會で、現に彰化郡役所の所在地である。市街は、概ね支那式の店舗を以て連ねられ、舊態依然たるものがあるが、市區は比較的規模大で、東・西・南・北の四門街及同門外街より成り、古代支那式の、殿宇、樓閣所々に屹立し、朽廢せる中にも、輪奐彫刻の美は、榮華を極めた古都の面影を見せてゐる。最近海岸線の全通と共に、南北交通上の要區となり、市況頓に活氣を呈し、市街も漸次舊態を改めんとしつゝある。

人口 一九、三〇七人
内地人 九七二人
本島人 一七、九四三人
外國人 三九二人

官衙・會社 彰化郡役所・高等女學校・臺灣煙火爆竹會社
工場・彰化商工補習學校
物産 米・砂糖・鹽・果實・織物

交通機關

附近案内

▲觀音亭 停車場の東三町。一名開化寺と稱し、

▲鐵道 新高製糖會社の經營に係り、此の地を起點とし、西、鹿港街に達し、東、中寮・和美を経て線西に達してゐる。鹿港迄七哩一分、一等五十六錢、二等二十八錢。中寮迄二哩一分、一等十六錢、二等八錢。和美迄四哩四分、一等三十二錢、二等十六錢。線西迄六哩九分、一等五十二錢、二等二十六錢。

▲軌道 彰化輕鐵會社の經營に係り、市街の東端、市子尾より起り、南投郡草屯庄に達してゐる。草屯迄運賃一人押一人乘一圓二十錢。

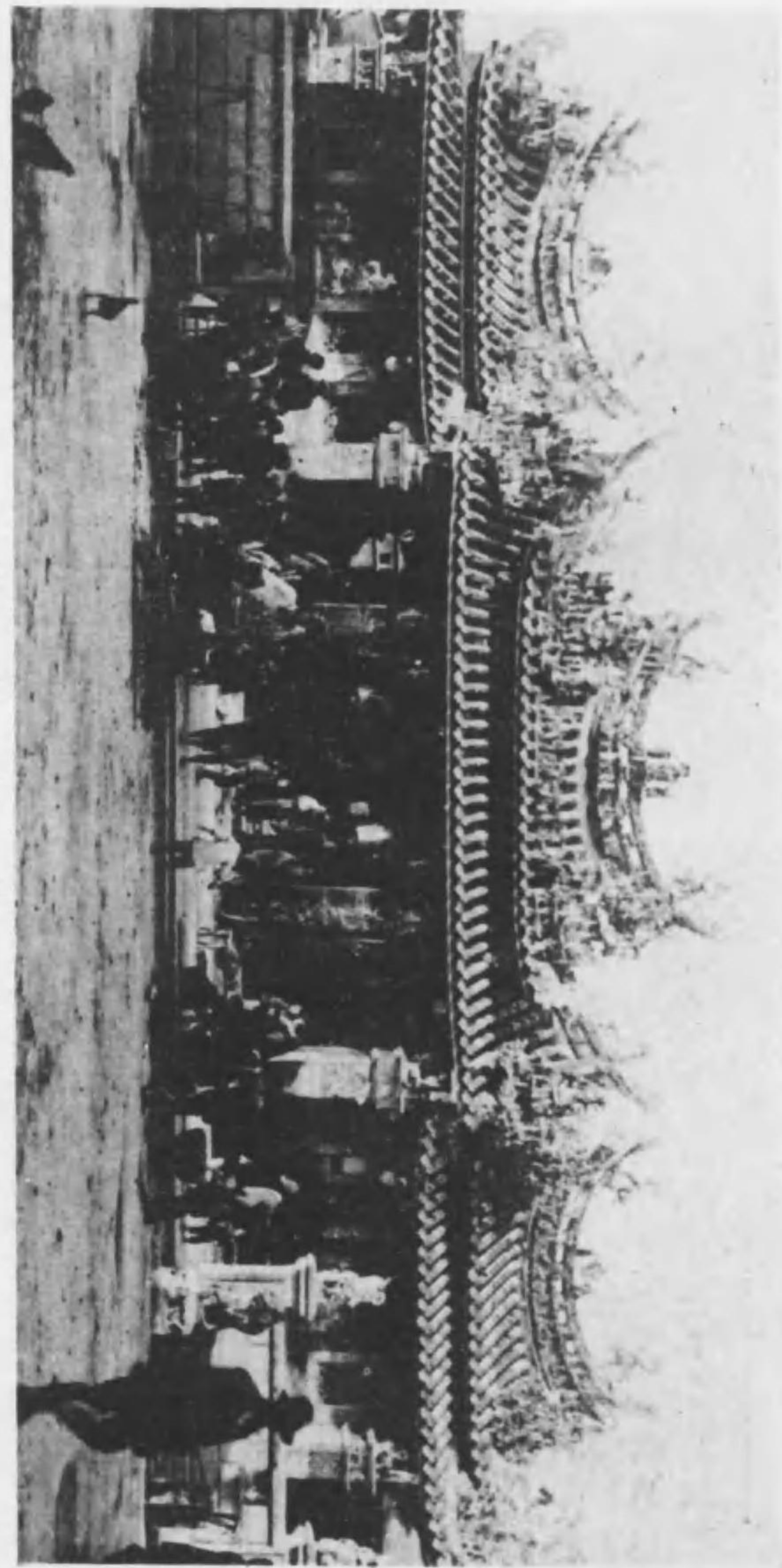
▲乗合自動車 驛前より北に臺中、西に鹿港、南に員林、北東に和美に到る乗合自動車の便がある。運賃は臺中まで四十錢、約一時間、鹿港まで三十錢約四十分。員林まで三十錢約五十分。和美まで十五錢約二十分。



彰化街遠望



八卦山



觀音菩薩を祀る。廟内に安置せる十八羅漢は、金色燦然として佛相尊嚴を極めてゐる。

▲孔子廟 停車場の東四町。東門内に在る。舊彰化縣の儒學々堂で、雍正四年(西紀一七二五)の建築に係り、中央には大成殿を設け、配するに東西の兩廡を以てし、廟宇宏壯、嘗ては輪奐の美を極めたものであつたが今や、朽廢甚しく、改築の議がある。毎年春秋二回に互り、壯嚴なる孔子祭典を舉行してゐる。

▲八卦山御遺跡地 停車場の東九町。八卦山は「臺灣十二勝」の一で眺望佳く彰化平野中に峙ち、形勝の地を占め、近く市街は指呼の間に在り、遠く鹿港・塗葛窟・棲梧の長汀曲浦を、模糊の間に望むことが出来る。領臺當時、故北白川宮殿下が、近衛

師團の精銳を率ゐ、此の險を死守せる匪徒を撃退せられたる御遺跡地で、山上に其の記念碑がある。山麓は舊彰化城趾で、今は公園となつてゐる。園内の觀月樓は、嘉慶年間(西紀一七九六)の建築で、元支廳内に在つたものを移築したものである。

▲南瑤宮 停車場の東十八町。南門外街にある。嘉慶年間の建立に係り、天上聖母を祀る。即ち俗に媽祖廟と稱するもので、毎年三月二十三日を神誕日として、祭祀を行ひ、北港の朝天宮と併稱せらる、靈地である。

▲彰化水道水源地 停車場の南東二十町。

▲虎山巖 停車場の東三十町。白砂坑庄にある。乾隆十二年(西紀一七四七)里人、賴光高が、淨財を募つて建立したもので、寺の左右は翠綠滴る許りの森林で、

縦貫線

修行風に鳴り、爽涼衣を侵すの趣があり、古來虎嶼聽行と稱せられ、彰化八景の一である。

▲新高製糖會社 停車場の北三十町。中寮庄に在る、資本金二千八百萬圓の新式製糖會社で、本製糖所の外に嘉義製糖所がある。本製糖所は第一・第二の二工場より成り、機械能力は、兩者を合して千八百五十噸、最近一期の製糖高は約三千四百五十萬斤に達してゐる。

▲和美庄 停車場の北西一里十二町。新高製糖會社線の終點で鐵道によれば、約三十分で達する。此の地は今を去る六十餘年前、戴萬生の亂に、全庄灰燼に歸したが、其の後漸次回復し、現在人口は二萬近くある。

▲鹿港街 停車場の西方二里三十四町。新高製糖

會社線によれば、約五十分にて達する。特別輸出港の一で、最近に於ける輸出入總額は二十八萬圓内外である。嘗て本港は、臺灣三大港の一として繁榮なる港灣都市であつたが、港口が埋もるに共

に、年々衰微して來た。併し純本島市街としては今尚ほ、彰化街と比肩するに足るものがあり、宏壯なる家屋軒を並べ、街路は概して狭いが、盡く磚を疊み、支那式古代市街の典型として、本島市街中の、一奇觀である。人口三萬一千九百餘。

郵便局・稅關支署・專賣局支局・彰化銀行支店・鹿港製鹽公司・鹿港物產信託會社等がある。附近には亦鹽田多く、一箇年の製鹽高は約千三百餘萬斤に達してゐる。

花壇驛

基隆より百三十五哩八分
高雄まで百十三哩三分

(臺中州彰化郡花壇庄花壇)

花壇庄は、彰化郡の南半に位し、附近一帶は、概ね平坦な沃地であつて、米・甘蔗の產出に富み、東半の山地方面は、造林や果樹の栽培に適する。本庄は元茄荖脚庄と稱へられてゐたが、最近、現名に改められた。驛前には精米工場多く、精米業が盛である。

員林驛

基隆より百四十哩九分
高雄まで百八哩二分

(臺中州員林郡員林街員林)

▲手荷物運搬 ▲携帶品一時預 ▲入場券發賣 ▲呼賣
(餅・蜜柑・文旦・芭蕉實)

旅館 東京館
宿泊料 一圓六十錢乃至二圓

中食料 六十錢乃至一圓

員林街は、員林郡役所の所在地で、附近一帶の地は、八卦山脈に連る一部を除き、他は廣漠たる平野であつて、全島中最も豊沃の地と稱せられ、米穀の產地として著名なるのみならず、芭蕉實・柑橘類・鳳梨等の青果物乃至、豚等の畜産類の產出多く員林は其等取引の中心地である。芭蕉検査所は臺灣青果會社の經營に係り、其の景況は車窓より瞥見することが出来る。市街は、明治三十九年以降二回に互る市區改正が行はれ、規模相當に整つてゐる。

人口 二四、四〇七人 (内地人 二二、六五八人
本島人 一、七四九人
外國人 一、五一人)

官衙・會社 郡役所・郵便局・米穀検査所・彰化銀行支店・員林果物會社・臺灣物產會社出張所・鳳梨罐詰工

交通機關

物産 米・砂糖・鳳梨・芭蕉實・龍眼肉・疊表

▲鐵道 明治製糖會社の經營に係り、此の地を起點とし、西溪湖を経て、鹿港街に達してゐる。溪湖迄六哩四分、一等五十二錢、二等二十六錢、所要時間五十七分。鹿港迄十三哩二分、一等一圓六錢、二等五十三錢、一時四十七分。

▲軌道 臺中輕鐵會社の經營に係り、此の地より南北に分れ、南走するものは、北斗庄に達し、北走するものは、東山及浦雅に達してゐる。北斗迄一人乗五十八錢、所要時間一時十分。東山迄同二十錢、二十五分。浦雅迄同三十七錢、同時間四十分。

▲乗合自動車 彰化員林間を往復する乗合自動車の便がある。彰化迄三十錢約五十分を要する。

▲人力車 賃金平路一里五十錢。夜間・雨天は各二割増。停車場よりの賃金は、員林郡役所・市場・西門臺

車發著所、各十錢。東門臺車發著所十五錢。蓮花池・港尾・溝皂、各四十錢。三條圳・大饒、三十錢。東山五十錢。

▲輪 賃金二人昇一里六十錢以内。夜間・雨天・難路は各三割増。

附近案内

▲東山 停車場の東三十町。八卦山脈の麓に位し軌道によれば、約二十五分にて達する。土地高燥にして、山上より俯瞰すれば、員林平野を一眸の内に收め、眺望佳絶、夙に桃の名所として知られ、花期、江雲變態の情趣は、一日の清遊に値する。

▲獵漁地 停車場の東北約一里餘の小店には沼澤多く、夏期は釣魚に適し、冬期は鴨其の他の水禽集群し、好箇の遊獵地である。

▲明治製糖會社溪湖製糖所 停車場の西二里十四町。明治製糖會社線によれば約一時十七分にて達する。機械能力七百五十噸、最近一期の製糖高は二千四百萬斤に達してゐる。

▲鹿港街 西五里十四町、(一二四頁参照)鐵道の便がある。

社頭驛

基隆より百四十五哩三分
高雄まで百三哩八分

(臺中州員林郡社頭庄社頭)

社頭庄は、員林郡の東南部に位し、附近一帯は沃野開け、米・芭蕉實・甘蔗・蕃薯等を産す。

附近案内

▲鴨母浦 停車場の東北二十町。清冽なる大池で夏期は蓮花を賞しつゝ、綸を垂る、に良く、冬期は鴨獵に絶好の地である。

▲清水巖 停車場の南東三十町。大武郡山の山麓に位し、清の乾隆初年(西曆一七二七)創建に係る古刹であつて、古木蒼鬱として、邱壑、林泉頗る幽邃を極め、古來清水春光稱し、彰化八景の一である。寺内には三寶佛を安置し、毎年舊曆正月十日より、二月末日迄は、參拜者集り一日數百人の多きに達する。轎賃金二人昇往復一圓二十錢、約五十分を要する。

田中驛

基隆より百四十八哩
高雄まで百一哩一分

(臺中州員林郡田中庄田中)

▲手荷物運搬 ▲携帶品一時預 ▲入場券發賣 ▲公衆電報取扱

旅館 中野屋

宿泊料 一圓五十錢乃至二圓五十錢
中食料 八十錢乃至一圓二十錢

田中庄は、員林郡の南半に位し、東は南投郡に、西は濁水溪を挟んで北斗郡に接し、平野廣く農作に適し、麻及び良質の芭蕉實を産出するを以つて知られてゐる。此の地は、また北斗・溪州・二林に至る要路に當り、最近交通機關の普及と共に、頗るに發展し、以上諸庄の外、社頭・二水・南投方面に對する物資の集散地として、旅客の來往・貨物の集散が頻繁である。

人口 一五、五九一人

官衙・會社 郵便局・田中興業會社
物産 米・砂糖・果實・麻

交通機關

▲鐵道 鹽水港製糖會社の經營に係り、此の地より、北斗・溪州を経て、二林に達してゐる。北斗迄六哩二分運賃二等三十八錢、三等二十五錢、時間四十分。

附近案内

溪州迄八哩七分、二等五十三錢、三等三十五錢、時間一時間。二林迄十八哩二分、二等一圓十錢、三等七十三錢、約二時間。
▲自動車 北斗二林に至る乗合自動車の便がある。北斗まで二十二錢約三十五分。二林迄六十七錢約一時間三十五分。
▲輻 賃金二人昇一里二十錢、一日備切二圓五十錢。夜間・雨天・難路は各二割増。

▲北斗街 停車場の西二里二十七町。製糖會社線によれば、約四十分にして達する。北斗郡役所の所在地で、人口九千五百餘、地方物資の集散地を成し、郵便局・登記所等があり、内地式旅館に北斗館がある。

▲鹽水港製糖會社製糖所 停車場の西三里二十町。溪州庄に在る、元は林本源製糖會社の經營であつ

好適地である。

二水驛

基隆より百五十一哩六分
高雄まで九十七哩五分

(臺中州員林郡二水庄二水)

▲手荷物運搬▲携帯品一時預▲入場券發賣▲仲賣▲呼賣(壽司)

旅館 中央ホテル・北仙家・ます屋

宿泊料 一圓五十錢乃至三圓五十錢

中食料 七十錢乃至一圓五十錢

二水庄は、員林郡の最南端に位し、附近一帯の地は、濁水溪畔に沿うて平野を成し、東は陳有蘭溪に沿うて、集集に通じ、東北は南投平野に連り、南投・集集・埔里等の諸街に至る要路を成してゐる、日月潭・霧社・新高登山は何れも此の驛にて集集線に乗換へる。

たが昭和二年鹽水港製糖會社に於て買収經營することとなつた。機械能力七百五十噸。最近一期の製糖高は約二千三百八十萬斤に達して居る。溪州庄には常盤館・溪州館がある。

▲三五公司源成農場 停車場の西約六里。礪磙庄にある。農場經營の傍ら製糖業を行つてゐる。鹽水港製糖會社線竹糖驛に下車し、農場専用軌道に移乗すれば約三十分にして達する。

▲二林庄 西七里半。製糖會社線の終點で、田中より約二時間にて達する。此の地の西方二里、沙山庄は舊稱萬古稱し、往昔對岸互市の市場として取引が盛んであつたが、今は其の面影を偲ぶべくもない。内地式旅館に二林館がある。

▲遊獵地 北斗・二林間濁水溪畔一帯は、雉子獵の

官 衙 郵便局
物 産 樟腦・腦油・砂糖・木材・薪炭・果實・土器・野菜
交通機關

▲鐵道 官線集集線は此の地より濁水・集集・水裡坑の諸驛を経て、外車埕に達してゐる。別に明治製糖會社の經營に係る營業線は名間(濁水)を経て南投に達してゐる。明治製糖線の運賃は名間迄六哩七分、三等二十七錢、二等五十四錢。南投迄十一哩五分、三等四十六錢、二等九十二錢である。
▲乗合自動車 二水と北斗街間を往復する。賃金三十五錢、約五十分

林内驛

基隆より百五十六哩七分
高雄まで九十二哩四分
(臺南州斗六郡斗六街林内)

▲携帶品一時預 ▲入場券發賣

林内は、斗六街の一字であつて、其の北端、觸

一萬一千二百尺) 奇萊主山(海拔一萬一千八百三十五尺)に發し、水源より約二十四里にして、群大溪を併せ、之より下流四里の牛轡轆で陳有蘭溪を、更に下流八里の林内に於て清水溪を合し、林内より下流は、北斗溪・西螺溪・新虎尾溪・虎尾溪の四派に分流して海に注ぎ、本流の全長四十二里に達する。濁水溪鐵橋は、延長二千九百七十七呎本島第四位の長橋である。尙ほ濁水溪底には硯石に著名な羅溪石を産する。
▲竹山庄 停車場の東二里三十町。竹山軌道によれば、約一時五十分に達する。竹山郡役所の所在地で濁水・清水兩溪の合流點に位し、土地膏腴・樟腦・木材及び竹材を産し、附近屈指の市街である。

口山麓の平野を占む。嘗ては濁水溪氾濫の爲め荒蕪に委せられてゐたが、護岸工事の完成に依つて次第に開發せられて、豊沃の田畑ミ化した。竹山庄に至る要路になつてゐる。

會 社 臺神竹材會社
物 産 樟腦・竹材・龍眼肉・筍

交通機關

▲軌道 竹山軌道は此の地より起り、東、竹山庄を経て東埔蚋に達し、此の地にて南投郡名間に至る社寮軌道及び郡下東坑寮に至る竹山產業軌道に連絡してゐる。竹山迄一人乗五十錢、東埔蚋迄六十五錢、約二時間。

附近案内

▲濁水溪 本島第一の大河で、源を合歡山(海拔

此の地は明の永曆年間(西紀一六六一年)鄭氏の參軍、林圯の初めて開墾したるに因み、林圯埔と稱せられ、清の光緒十二年(西紀一八八六年)一時雲林縣を置かれたことがあつた。郡役所・專賣局出張所・郵便局・臺南製糖會社下埕工場・林圯產業會社・三菱竹材會社等があり又附近には帝國大學演習林がある。旅館山口旅館 臺灣の竹 全島各地に産し、其の種類は三十餘種に及んでゐるが、その中でも重寶かられるのは桂竹(臺灣まだけ) 刺竹・蔴竹等である。桂竹は其の分布が最も廣く、全竹林面積の過半を占め、殊に臺中州竹山郡、臺南州嘉義郡の標高二三千尺の地域にある桂竹林は一番有名である、用途は建築材・竹器・竹紙・筍・竹の皮等その需要が廣く多い。また近年は米國市場に竹材の需要が多くなり相當に輸出される。刺竹も本島固有種で竹桿太く密生し、肉厚く強靱なので建

築主材・家具等に使用される。藤竹は海拔四千尺の谿谷に叢生し桿は竹類の中最も大で、用途は竹筏・椅子・家屋の桁・籠等に用ゐられ、節も賞美される。

斗六驛

(臺南州斗六郡斗六街)

驛名	哩程	旅客運賃		
		一等	二等	三等
基隆	一六二・六	一〇・五五	七・三〇	四・〇五
臺北	一四四・八	九・四〇	六・五〇	三・六〇
臺中	四一・八	二・七〇	一・九〇	一・〇五
嘉義	一九・四	一・二五	〇・八五	〇・五〇
臺南	五・七	三・七五	二・六〇	一・四五
高雄	八六・五	五・六〇	三・九〇	二・一五

▲手荷物運搬▲携帶品一時預▲手荷物配達▲入場券發賣▲内臺連絡扱▲仲賣▲呼賣(果物・宮の芋)

旅館 斗六館

宿泊料 一圓五十錢乃至二圓五十錢

中食料 一圓乃至一圓五十錢

斗六街は、舊斗六門の地で清の光緒十九年(西曆一八九三)雲林縣を置かれてより以來、行政の中心地を成し、現に斗六郡役所の所在地である。西螺庄及び大崙庄に至る交通の要路に當り、兼ねて郡下物資集散の市場として、臺南州下に於ては嘉義街に次ぐ郡邑である。

人口 二七、一一五人 (内地人 九七三人、本島人 二六、〇〇〇人、外國人 一四二人)

官衙・會社 郡役所・郵便局・專賣局製酒工場・商工銀行出張所・東洋製糖會社製糖所

物産 砂糖・米・龍眼肉

交通機關

▲鐵道 大日本製糖會社の經營に係り、斗六を起點とし、製糖所の所在地たる大崙庄を経て、崁頭厝に達する。大崙迄二哩五分、三等十錢、一等二十錢、所要時間約十八分。崁頭厝迄六哩七分、三等二十七錢、一等五十四錢、所要時間五十八分。

▲軌道 臺灣軌道會社の經營に係り、斗六を起點として、西行し、荊桐・西螺を経て埔心に達してゐる。荊桐迄四哩六分、運賃一人三十七錢、一時間。西螺迄八哩七分、同七十錢、約二時間。外に大日本製糖會社經營の斗六大崙間二、五分の軌道がある客賃一人乘十八錢。

▲人力車 賃金五町迄十錢、十町迄十五錢、一里迄二十錢。

附近案内

▲大日本製糖會社斗六製糖所 停車場の南東一里大崙庄に在り、鐵道の便がある。機械能力五百噸最近一期の製糖高は、九百七十萬斤に達してゐる。

▲荊桐庄 停車場の西二里。手押軌道によれば、約一時間にして達する。故北白川宮殿下御征臺の砌、暫く此の地に御駐屯あらせられて、地方の匪徒を討平せられた所で、其の記念碑がある。

▲西螺街 停車場の北西三里半。軌道によれば、約二時間にして達する。濁水溪の沿岸を占めて一市街を成し、人口約一萬九千三百餘。郵便局・農業倉庫等がある。朱欒の産出を以て知られ、又た、附近は水田に富み、米の産出が多い。

斗南驛

基隆より百六十七哩四分
高雄まで八十一哩七分

(臺南州虎尾郡斗南庄)

▲手荷物運搬▲携帶品一時預▲入場券發賣

斗南庄は元他里霧と稱し、附近は一望際涯なき沃野で、甘蔗の栽培に適し、又西螺・虎尾・北港の

各地に至る要路に當つてゐる。

官 衙 郵便局

物 産 砂糖・米・油糟・粗紙・落花生

交通機關

▲鐵道 大日本製糖會社の經營に係り、此の地を起點とし西方虎尾に至つて分れて二となり、一つは北、西螺に、一つは南、土庫を経て北港に達し、同社の嘉義烏麻岡線に連絡してゐる。尙ほ虎尾と西螺とを結ぶ線もある。虎尾迄四哩四分、三等十八錢、二等二十七錢、二十八分。西螺迄十四哩一分、三等五十七錢、二等八十六錢、一時二十分。土庫迄八哩五分、三等三十四錢、二等五十一錢、五十分。北港迄二十哩三分、三等八十二錢、二等一圓二十三錢、二時十八分。

附近案内

▲虎尾街 停車場の西一里三十町。大日本製糖會

社線によれば、約三十分にして達する。虎尾郡役所の所在地で、人口約三千。郵便局・大日本製糖株式會社等がある。元五間厝（又）と稱してゐたが、最近虎尾と改稱せられた。内地式旅館としては、虎尾旅館其の他がある。

▲大日本製糖株式會社 虎尾街に在り、資本金五千四百一十一萬六千六百圓、拂込資本金三千四百七十四萬九千百圓を擁する新式製糖會社で、第一、第二の二工場より成り、工場機械能力兩者合して、三千二百噸。最近一期の製糖高は八千萬斤に達してゐる。右の外、元東洋の製糖所たる北港・斗六・烏日・月眉の四工場をも最近買収して一大製糖會社となつた。

▲北港街 停車場の西南八里十八町。鐵道によれ

ば、約三時間にて達する。北港郡役所の所在地で、人口約一萬九千六百餘。郵便局・登記所・嘉義銀行出張所・大日本製糖所等がある。此の地は往昔菜港（菜）と稱し、對岸貿易の要津であつたが、今は泥砂沈積して船舶を通ぜず、空しく港名を存するのみである。街には有名なる北港媽祖廟の外、阿彌陀寺・義民廟等見るべきものが少くない。鐵道は、大日本製糖會社線の外、新高製糖會社線があり、大林・嘉義に通じてゐる。旅館に北港館がある。

▲北港媽祖廟 北港街に在る。一に朝天宮（又）と稱し、全島第一の媽祖廟で、廟宇宏壯、輪奐の美を極め、島民信仰最も厚く、全島各地よりの參詣者四時絶わぬ。殊に、舊曆三月二十三日の例祭日前後の如きは、其の數一日數萬に上り、香煙は濛々として宮

殿の軒を廻り、銀紙の焰は炎々として、天を焦し、神威崇嚴を極む。祭神媽祖は、宋の建隆元年（西紀一〇〇〇年頃）福建省湄州に生れ、九娘又は默娘と稱してゐた。九歳にして書を讀み、香を焚いて佛を拜し、十三歳にして道典秘法を得、屢々人を水難から救つたが、康熙四年（西紀一六六五年）二十八歳の時白日昇天して神となつたと傳へられてゐる。一に天上聖母又は護國夫人と云ひ、主として船人の信仰したものであるが、其の後媽祖の靈顯赫灼たるものがあつたから、康熙二十三年（西紀一七〇四年）清朝より天后の位に封ぜられ、國幣祭祀の格を贈られ、地方長官に於て祭典を行ふに至りたるを以て、益々一般の信仰を集め、其の祭祀の如きも極めて嚴肅に行はれてゐた。

▲大日本製糖會社北港製糖所 北港街に在る。新

式製糖工場で、機械能力一千噸。最近一期の製糖高は、三千四百四十萬斤に達してゐる。
▲西螺街 停車場の北西四里二十七町。鐵道の便がある。

大林驛

基隆より百七十二哩六分
高雄まで七十六哩五分

(臺南州嘉義郡大林庄潭底)

▲携帶品一時預 ▲入場券發賣

此の地は、元大莆林たいほりん稱し、新高製糖會社嘉義製糖所の所在地で、又北港・新巷・小梅の各地には鐵道の便があり、附近交通の要路を占めてゐる。

官衙・會社 郵便局・新高製糖會社製糖所

物産 米・砂糖・粗紙・龍眼肉

交通機關

▲私設鐵道 新高製糖會社の經營に係る、大林・小梅、

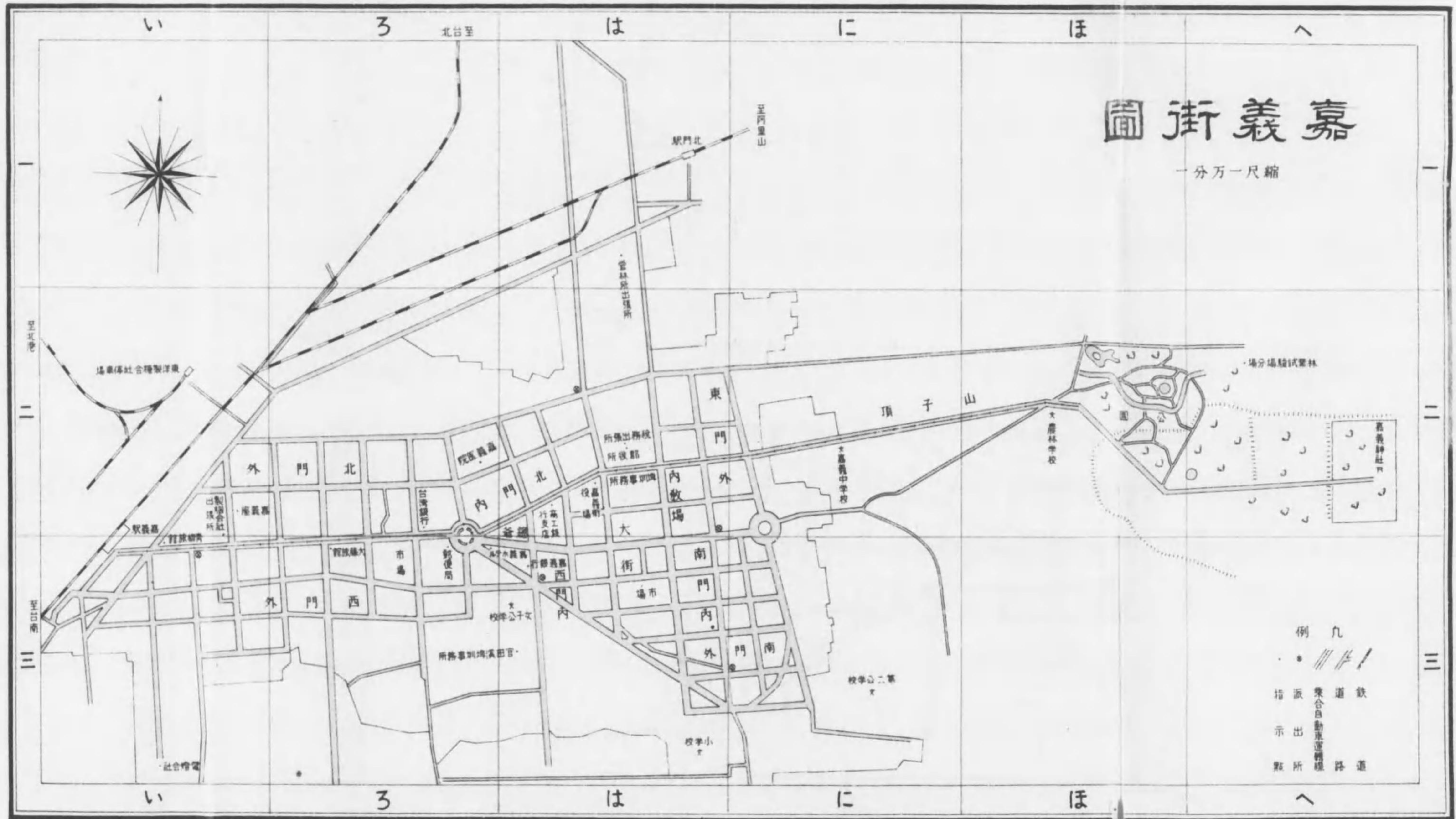


大林・北港の兩線は、此の地を中心として、東、小梅に

達し、西、溪口を経て新巷に達し、大日本製糖會社經營の嘉義烏麻閣線あまごんせんに連絡し、新巷・北港間は、新高・東洋兩會社の共用線となつてゐる。小梅迄九哩三分、三等三十七錢、二等五十六錢、一時十四分。溪口迄五哩三分、三等二十一錢、二等三十二錢、時間三十八分。新巷迄十哩、三等三十八錢、二等五十七錢、時間二十九分。北港迄十三哩四分、三等五十三錢、二等八十錢、一時五十四分。
▲自動車 大林・小梅間一日十往復の乗合自動車の便がある。運賃四十五錢約四十分。
▲轎 賃金二人昇一里四十五錢。雨天・夜間・難路は各三割増。

附近案内

▲新高製糖會社嘉義製糖所 停車場の西十五町。機械能力一千二百噸。最近一期の製糖高は千三百七十六萬九千三百五十斤に達してゐる。



嘉義街圖

縮尺一分萬一

- 例 凡
- 鐵道
 - 聯合自動車道
 - 出所
 - 點

